児玉町文化財調査報告書　第11集

塩谷下大塚遺跡

児玉町内遺跡群保存事業に伴う発掘調査報告書８

埼玉県児玉郡児玉町教育委員会

児玉町文化財調査報告書　第11集

塩谷下大塚遺跡

しおやしもおおつか

児玉町内遺跡群保存事業に伴う発掘調査報告書８

１９９０

埼玉県児玉郡児玉町教育委員会

序

首都圏近郊ののどかな農村地帯を呈していた我が児玉町も、最近では都市及びその周辺の異常とも思える地価高騰を原因とする土地不足のあおりを受け、また一部に言われる金余り現象や内需拡大の影響も手伝って、分譲住宅・工場・ホテル・ゴルフ場といった大小様々な民間開発が急増している。それらによるここ数年の環境変化は目に見えて著しく進行し、児玉町としてもこれらに伴う生活環境の整備改善が急務の課題となってきており、道路整備・農業基盤整備・土地区画整理等の公共事業も目白押しの状況である。

しかし、これらの開発に伴って埋蔵文化財など失われていくものも多く、それらをいかに調整し、将来のために伝え残していくかも、現代に生きる我々の重大な責務の一つである。

今回報告する塩谷下大塚遺跡Ｂ地点の発掘調査は個人住宅建設に伴う比較的小規模な調査ではあったが、児玉町で数少ない弥生時代の遺跡を調査することができ、また同時代のまとまった資料も得て、予想以上の大きな成果をあげることができた。これもひとえに地権者である田端正文氏をはじめ町民の皆様の文化財保護に対する深いご理解と絶大なるご協力によってなしえたことであり、ここに心より感謝申し上げる次第です。

平成２年３月１日

児玉町教育委員会

教育長　野　口　敏　雄

例　　言

1．　本書は、埼玉県児玉郡児玉町大字塩谷字下大塚 751 番地３に所在する塩谷下大塚遺跡（Ｂ地点）の発掘調査報告書である。

2．　発掘調査は、個人住宅建設に先立つ児玉町内遺跡群保存事業として、昭和59年８月17日から８月31日までの期間に実施した。

3．　調査地点は、昭和47年に埼玉県遺跡調査会が、埼玉北部用水児玉幹線水路建設に伴って「塩谷地区遺跡」として調査した地点をＡ地点とし、今回の調査地点をＢ地点とする。

4．　発掘調査及び整理・報告書作成に要した経費は、町費・国庫補助金（文化庁）・県費補助金（埼玉県教育委員会）である。

5．　本書の執筆及び編集は、恋河内昭彦が行った。

6．　本書の挿図は、主に福島恵美子が作成した。

7．　発掘調査及び本書刊行にあたって、下記の方々や機関からご助言・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表します。　　（順不同・敬称略）

赤熊浩一、伊丹　徹、太田博之、岡本幸男、柿沼幹夫、金子彰男、坂本和俊、篠崎　潔、志村　哲、須田英一、外尾常人、高橋一夫、田端正文、田村　誠、徳山寿樹、利根川章彦、長滝歳康、中村倉司、長谷川勇、増田一裕、丸山　修、矢内　勲、

埼玉県教育局文化財保護課、日本大学考古学研究会、

8．　発掘調査及び本書刊行のための整理作業には、下記の者が参加した。

石井美穂、江原　英、黒川真理、高橋　努、富元久美子、大貫裕久、花道　徹、福島恵美子、毒島正明、本間桂吉、宮内秀明、山田政幸、

目　　次

序
例　言

第Ⅰ章　発掘調査の経緯 …… 1

第Ⅱ章　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 3

第Ⅲ章　塩谷下大塚遺跡の概要 …… 5

第Ⅳ章　検出された遺構 ……11
第１節　方形周溝墓 ……11
第２節　土　　壙 ……15

第Ⅴ章　出土した遺物 ……15
第１節　遺物の出土状態 ……15
第２節　出 土 遺 物 ……31
土　　器 ……31
玉 ……40
《表採土器》 ……40

第Ⅵ章　出土土器の編年的位置の検討 ……41

第Ⅶ章　児玉地方の吉ケ谷式土器について ……44
第１節　吉ケ谷式土器出土遺跡の概要 ……44
第２節　児玉地方の吉ケ谷式土器の様相 ……51

参　考　文　献 ……57
写　真　図　版

挿　図　目　次

第１図　周辺の主要遺跡……２
第２図　飯倉古墳群内表採土器……３
第３図　塩谷下大塚遺跡発掘調査地点位置図……４
第４図　塩谷下大塚遺跡表採石製紡錘車……５
第５図　Ａ地点全測図……５
第６図　Ｂ・Ｃ地点全体図……６
第７図　Ｃ地点第６号住居跡出土土器（１）……７
第８図　Ｃ地点第６号住居跡出土土器（２）……８
第９図　Ｃ地点第３号住居跡出土土器……８
第10図　Ｃ地点第６号方形周溝墓出土土器……９
第11図　Ｃ地点第３号方形周溝墓出土土器……９
第12図　Ｃ地点第５号方形周溝墓出土土器（１）……９
第13図　Ｃ地点第５号方形周溝墓出土土器（２）……10
第14図　Ｂ地点全測図……12
第15図　Ｂ地点等高線図……13
第16図　第２号土壙……14
第17図　第２号方形周溝墓遺物出土分布図……15
第18図　土器出土状態分布図（No.１）……16
第19図　土器出土状態分布図（No.２・３）……17
第20図　土器出土状態分布図（No.４）……18
第21図　土器出土状態分布図（No.５）……19
第22図　土器出土状態分布図（No.６）……20
第23図　土器出土状態分布図（No.７）……21
第24図　土器出土状態分布図（No.８・９）……22
第25図　土器出土状態分布図（No.10）……23
第26図　土器出土状態分布図（No.11）……24
第27図　土器出土状態分布図（No.12）……25
第28図　土器出土状態分布図（No.13・16・17）……26
第29図　土器出土状態分布図（No.18）……27
第30図　土器出土状態分布図（No.14・15・19・20・21）…28
第31図　土器出土状態分布図（No.22・23・24）……29
第32図　土器出土状態分布図（No.25・26）……30
第33図　第２号方形周溝墓出土土器（１）……32
第34図　第２号方形周溝墓出土土器（２）……34
第35図　第２号方形周溝墓出土土器（３）……38
第36図　第２号方形周溝墓出土土器（４）……39
第37図　第２Ｂ号方形周溝墓出土ガラス小玉……40
第38図　塩谷下大塚遺跡表採土器……40
第39図　児玉地方の弥生時代後期遺跡と関連遺跡……46
第40図　児玉地方の吉ケ谷式関連土器（１）……48
第41図　児玉地方の吉ケ谷式関連土品（２）……49
第42図　児玉地方の吉ケ谷式関連土器（３）……50

表　目　次

第１表　周辺の主要遺跡一覧表……２
第２表　児玉地方における弥生時代後期遺跡と関連遺跡一覧表……47
第３表　吉ヶ谷式・赤井戸式編年対比表……53

図　版　目　次

図版１　１．塩谷下大塚遺跡Ｂ地点全景
　　２．Ｂ地点第２Ｂ号方形周溝墓
図版２　１．第２Ｂ号方形周溝墓遺物出土状態
図版２　２．第２号方形周溝墓出土土器（１）
図版３　１．第２号方形周溝墓出土土器（２）
図版４　１．第２号方形周溝墓出土土器（３）

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

昭和59年初春、児玉町大字金屋在住の田端正文氏が、自宅の建設を予定している同氏所有の児玉町大字塩谷下大塚751番地3における埋蔵文化財の所在の照合とその取り扱いについて、児玉町教育委員会に協議に来られた。

児玉町教育委員会では、早々に担当職員が現地を確認したところ、現地はすでに開墾によって丘陵斜面部を段状にカットしたような地形を呈していたが、一部に土器片の散布が見られ、予定地内の東側半分には遺構が残存する可能性があると考えられた。そのため田端氏に対し、住宅建設にあたっては、事前に試掘調査を実施して遺構の有無を確認し、遺構が存在する場合は、記録保存のための発掘調査を実施する必要があることを回答した。

その後、地権者である田端氏の了解を得て、同地内の試掘調査を実施したところ、東側半分に遺構と思われる黒色の落ち込みが確認されたため、文化財保護法の趣旨に則って、事前の記録保存のための発掘調査が必要であることを説明し、その理解と協力を求めた。その結果、田端氏は文化財保護の趣旨を尊重され、事前の発掘調査の実施について快く承諾していただいたため、昭和59年度児玉町内遺跡群保存事業の一環として予算化し、発掘調査を実施する運びとなった。

かくして、文化財保護法の規定により、原因者の田端正文氏より埋蔵文化財発掘届が、調査主体者の児玉町教育委員会教育長より児教社第118号による埋蔵文化財発掘調査通知が、それぞれ埼玉県教育委員会を経て文化庁長官に提出された。なお、埼玉県教育委員会からは、原因者に対して昭和59年10月18日付け教文第3―108号による「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の通知があり、文化庁からは、昭和59年11月15日付け委保記第2―3650号によって、発掘調査に対する指示通知があった。

現地での発掘調査は、昭和59年8月17日から同31日までの約半月の期間を要して実施した。

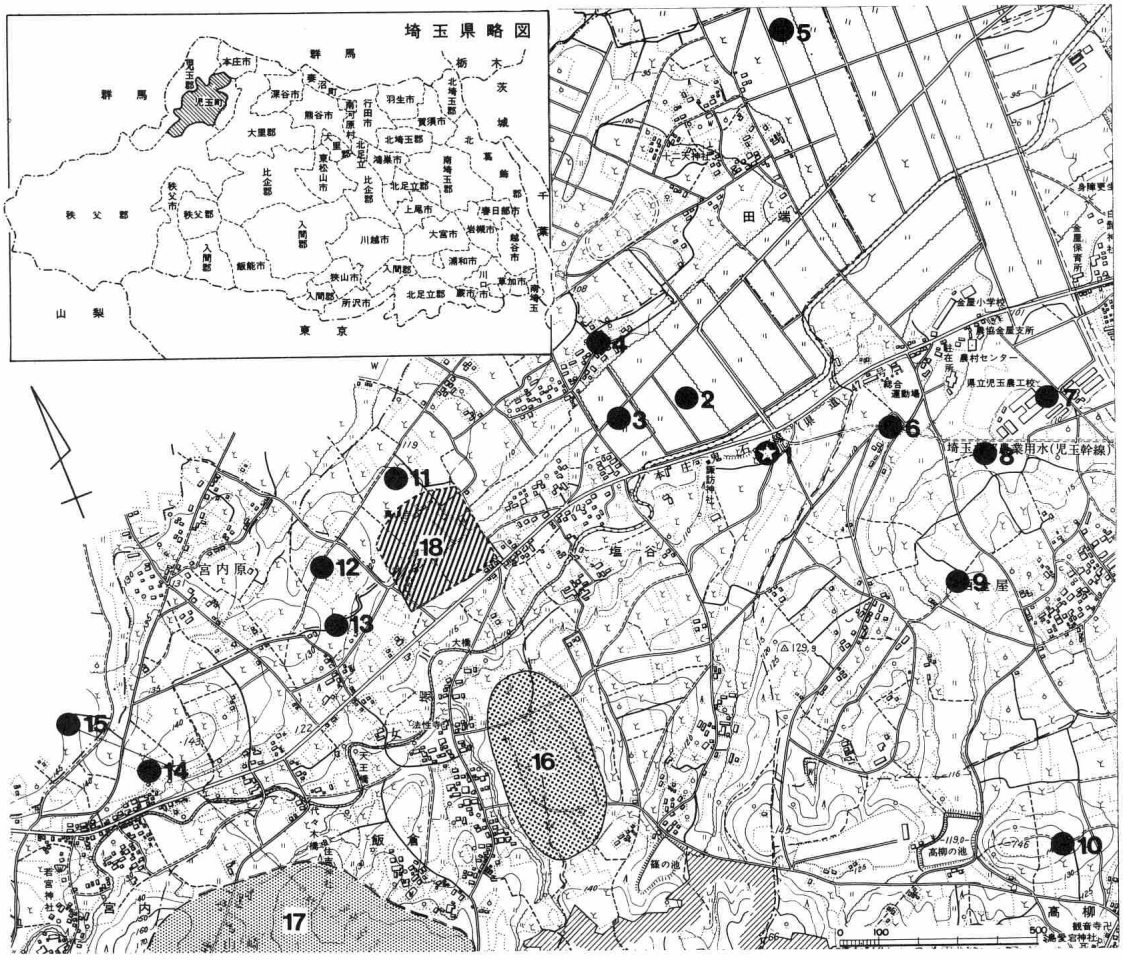
（事務局）

発掘調査組織（昭和59年度当時）

主体者	児玉町教育委員会	
	教育長	石井　栄一
事務局	児玉町教育委員会社会教育課	
	課長補佐	大塚　勲
	係長	岩上　高男
	主事	本間　良子
	主事	金子　幸弘
調査担当	主事	鈴木　徳雄

整理・報告書刊行組織（平成元年度）

主体者	児玉町教育委員会	
	教育長	野口　敏雄
事務局	児玉町教育委員会社会教育課	
	課長	吉川　豊
	課長補佐	立花　勲
	係長	前川　由雄
	主任	金子　幸弘
	主事	鈴木　徳雄
	主事	渋谷　路子
整理担当	主事	恋河内昭彦



第1図　周辺の主要遺跡

第1表　周辺の主要遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	時代・時期	備考
1	塩谷下大塚遺跡	集落跡、方形周溝墓群	縄文(前・中)、弥生(後)、古墳(前)、平安	菅谷・駒宮(1973)
2	ミカド遺跡	集落跡	古墳(前・後)、平安、中世	坂本・鈴木(1981)
3	ミカド西遺跡	集落跡	古墳(前)、平安	坂本・鈴木(1981)
4	横尾後遺跡	集落跡	縄文(前)、平安	1984年調査
5	十二天遺跡	集落跡	古墳(前)、奈良、平安	坂本・鈴木(1981)
6	枇杷橋遺跡	集落跡、方形周溝墓	古墳(前・中)、平安	菅谷・駒宮(1973)
7	金屋池脇遺跡	方形周溝墓	古墳(前)	小沢(1969)
8	倉林後遺跡	集落跡	古墳(中)	利根川他(1981)
9	念仏塚遺跡	集落跡	古墳(前・後)	1986年調査
10	ウリ山遺跡	集落跡	縄文(前・中)、古墳(後)	1981年調査
11	真鏡寺後遺跡	集落跡	縄文(前)、弥生(後)、古墳(中・後)、奈良、平安	鈴木(1987、1988)
12	下原北遺跡	集落跡	先土器、弥生(後)、古墳(後)	1984年調査
13	下原南遺跡	集落跡	先土器、縄文、古墳(後)、奈良	1984～85調査
14	上の原遺跡	集落跡	縄文(早・前・中)	1988～89調査
15	前組羽根倉遺跡	集落跡、方形周溝墓群	弥生(中・後)、古墳(前)	柿沼他(1986)
16	飯倉古墳群	古墳群	古墳(後)	
17	児玉古窯跡群	窯跡群	奈良、平安	
18	真鏡寺館跡	館跡	中世	1989年調査

第Ⅱ章　遺跡の地理的・歴史的環境

本遺跡は、埼玉県児玉郡児玉町大字塩谷字下大塚に所在し、標高110ｍを測る児玉丘陵上の先端部に位置している。本遺跡が立地する児玉丘陵は、断層線の八王子―高崎構造線を境に、南側の上武山地から区分された北東方向に長く延びる半島状の複数の丘陵によって構成されている。これらの丘陵の間には、それぞれ丘陵の奥深くまで細長い谷が入り込んでおり、谷奥の湧水を利用した段状の谷田が発達している。

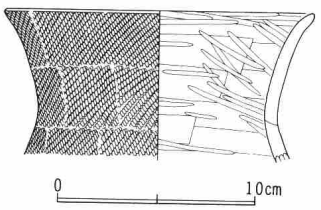
本遺跡の北側前面には、同じ丘陵内の宮内谷断層崖下より流れ出る小河川の旧赤根川によって開析された谷状の比較的広い沖積低地が開けており、ほ場整備施工以前までは一町四方の区画が連続するいわゆる条里形地割りの痕跡が明瞭に残存していた。この赤根川は、以前は本遺跡の前を過ぎた辺りでその流路を東から北に変え、児玉町大字保木野の辺りで九郷用水に落ちていたが、近年の河川改修によって本来は水源を異にしていた女堀川と一体化され、現在はその名前が使われている。

本遺跡の周辺には、丘陵部を中心として各時代にわたり、数多くの遺跡が存在している。先土器時代の遺跡は、下原北遺跡・下原南遺跡・天田遺跡（注１）で調査されており、下原北遺跡Ｂ地点では黒曜石製のナイフ形石器１点が検出されている。下原南遺跡と天田遺跡では、橙褐色テフラ層（ＢＰ対比層）下の茶褐色粘土層上層で、現在のところ当地方では最古の先土器時代文化層が確認されている。

縄文時代の遺跡は、本遺跡周辺の丘陵上に多く分布し、児玉丘陵を構成するすべての小支丘上で、該期の土器片や石器等の遺物を表採することができる。発掘調査された遺跡では、前期と中期の集落跡が多く、本遺跡で前期住居跡４軒、ウリ山遺跡で前期住居跡９軒、真鏡寺後遺跡Ａ地点で前期住居跡２軒、上の原遺跡で前期住居跡４軒・中期住居跡５軒、天田遺跡で中期住居跡８軒が検出されている。

弥生時代の遺跡は、本遺跡で後期の方形周溝墓と考えられる遺構が検出されているほかに、下原北遺跡で後期の住居跡２軒、真鏡寺後遺跡で後期の住居跡６軒、神川町前組羽根倉遺跡で中期初頭の再葬墓２基・後期末の住居跡２軒が調査されている。これらの遺跡で確認された後期の住居跡は、すべて樽式土器を主体に持つものであるが、本遺跡の遺構は吉ケ谷式土器を主体とし、また周辺の横尾後遺跡・ミカド遺跡・飯倉古墳群などでは、吉ケ谷式土器の破片が出土あるいは表採されている。このように当地方では、群馬県を中心に分布する樽式土器と埼玉県の比企地方を中心に分布する吉ケ谷式土器を主体とする遺跡があり、異なる土器型式の錯綜した状況が見られる。

古墳時代の遺跡も周辺では比較的多く調査されている。前期の遺跡は、本遺跡のほかにミカド遺跡・ミカド西遺跡・念仏塚遺跡・前組羽根倉遺跡などで住居跡が、本遺跡や枇杷橋遺跡・金屋池脇遺跡・前組羽根倉遺跡などでは方形周溝墓が調査されており、また十二天遺跡では、胴部下半を欠損する二重口縁壺を出土した土壙が１基検出されている。住居跡と方形周溝墓は時間差が認められるものの、近接して営まれているものが多く、方形周溝墓は丘陵先端部付近に、住居跡はその丘陵奥側に占地する特徴が



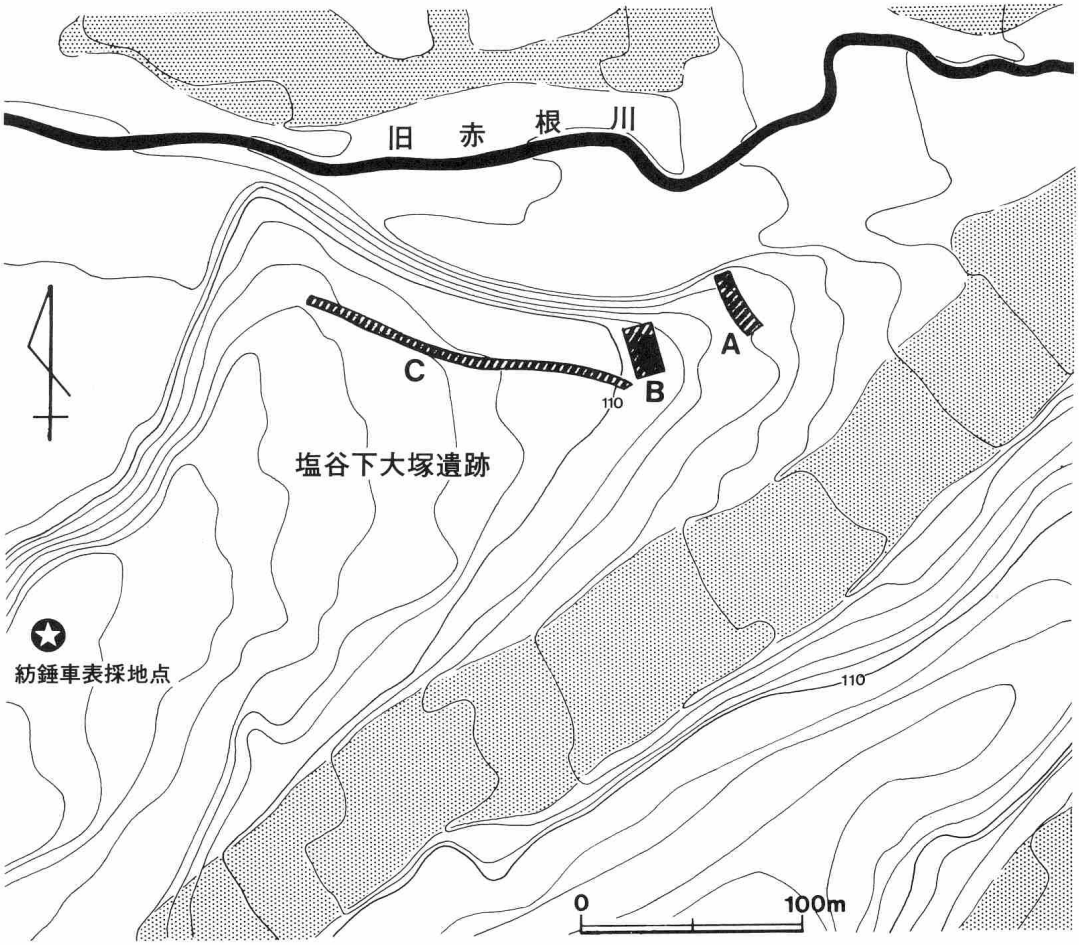
第２図　飯倉古墳群内表採土器

ある。中期の遺跡は、真鏡寺後遺跡・枇杷橋遺跡・倉林後遺跡などがあり、倉林後遺跡では住居跡にカマドを伴っている。該期には、他地域ではすでに古墳が築造されているが、本遺跡周辺では該期の古墳はまだ確認されていない。後期の遺跡では、沖積地内に突出する低台地上に多量の古式須恵器を出土して注目されるミカド遺跡が出現し、後半になると真鏡寺後遺跡・下原北遺跡・下原南遺跡・倉林後遺跡・念仏塚遺跡・ウリ山遺跡など、丘陵上やその奥部に拡散居住するようになる。また、本遺跡が立地する丘陵奥部には飯倉古墳群が造営される。

奈良・平安時代の遺跡では、本遺跡をはじめミカド遺跡・ミカド西遺跡・横尾後遺跡・十二天遺跡・枇杷橋遺跡・真鏡寺後遺跡・下原南遺跡・天田遺跡などがあるが、平安時代以降のものが多く検出されている。また、飯倉の山崎谷や中河原一帯には、8世紀前半の複弁八葉蓮華文軒丸瓦を出土した金草窯跡や、武蔵国分寺貢納瓦を出土した飯倉窯跡を含む児玉古窯跡がある。

中世では、現在も堀と土塁の痕跡が残っている「真鏡寺館跡」がある。これは約250m四方の不整方形を呈すと考えられる比較的大きな館跡で、児玉党塩谷氏の居館と推測されている。

注 (1) 児玉町大字宮内の若宮神社西側丘陵上に位置する先土器時代～平安時代にわたる複合遺跡で、農道改良舗装工事に伴い1985年に児玉町教育委員会が発掘調査を実施した。



第3図　塩谷下大塚遺跡発掘調査地点位置図

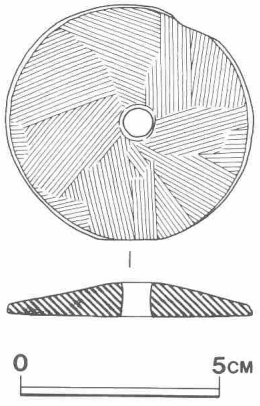
第Ⅲ章　塩谷下大塚遺跡の概要

塩谷下大塚遺跡は、北東方向に半島状に延びる丘陵上の中央部から先端部にかけて広がる、縄文時代から平安時代にわたる複合遺跡である。本遺跡が立地する丘陵は、北東方向に向かつて緩やかに傾斜し、丘陵平坦部は比較的狭い。丘陵の南東側斜面は緩やかな斜面であるが、丘陵の北西側斜面は崖状に近い急斜面を形成している。

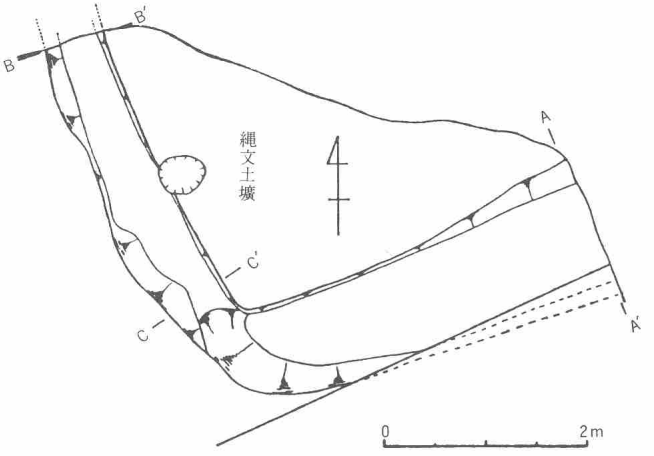
本遺跡の発掘調査は、現在までにすでに３次にわたって行われており、発掘調査地点毎にそれぞれＡ・Ｂ・Ｃ地点と呼称している。今回報告するのは、この内のＢ地点の調査成果であるが、調査面積が約 200㎡ と狭く、また地点毎に様相がやや異なることから、ここでは３地点の調査内容を記して本遺跡の概要を述べることにする。

Ａ地点は、農林省の埼玉北部用水児玉幹線水路建設に伴って、昭和47年に埼玉県遺跡調査会が「塩谷地区遺跡」として発掘調査を実施したものである(菅谷・駒宮1973)。工事中に発見され急きょ調査した遺跡であるため、調査範囲はごく限定された一部ではあるが、方形周溝墓（第１号方形周溝墓）の周溝の一部と縄文時代の土壙（第１号土壙）１基を検出している。第１号方形周溝墓は、南西から北東方向に方台部の軸線をとるようで、Ｃ地点検出の方形周溝墓と方向をほぼ同じくしている。周溝は、幅は南西側に比べて南東側が広く、南側コーナー部は幅が一番狭く、深さも浅くなっている。土器等の出土はなく、時期は不明である。第１号土壙は、直径約85cmの円形を呈し、覆土中より縄文時代中期の阿玉台式土器片や磨製石斧等の石器とともに、多量の胡桃が出土したという。

Ｂ地点は、第１章で述べているように、個人住宅建設に伴って当教育委員会が昭和59年に調査したもので、Ａ地点の西側約30ｍの所に位置する。検出された遺構は、方形周溝墓の周溝の一部（第２号方形周溝墓）と時期不明の土壙（第２号土壙）１基である。第２号方形周溝墓は、第Ⅳ章で述べるように、２基の方形周溝墓の周溝が調査区内で重複しているものと推測される。Ｂ地点の東側隣接地内の現地表面で方台部が確認できる第2Ａ号方形周溝墓は、古墳時代前期のものと推測され、全容は不明であるが、Ａ地点やＣ地点の方形周溝墓とほぼその軸線方向を同じ向きにしているよう



第４図　塩谷下大塚遺跡表採石製紡錘車

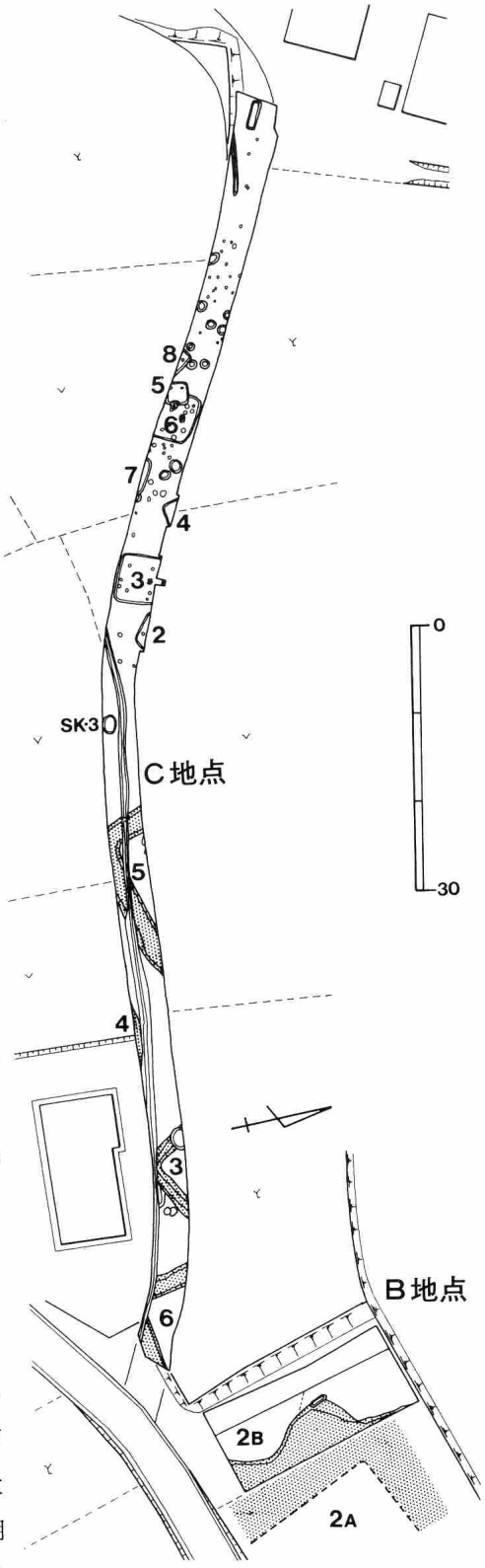


第５図　Ａ地点全測図（菅谷・駒宮1973より）

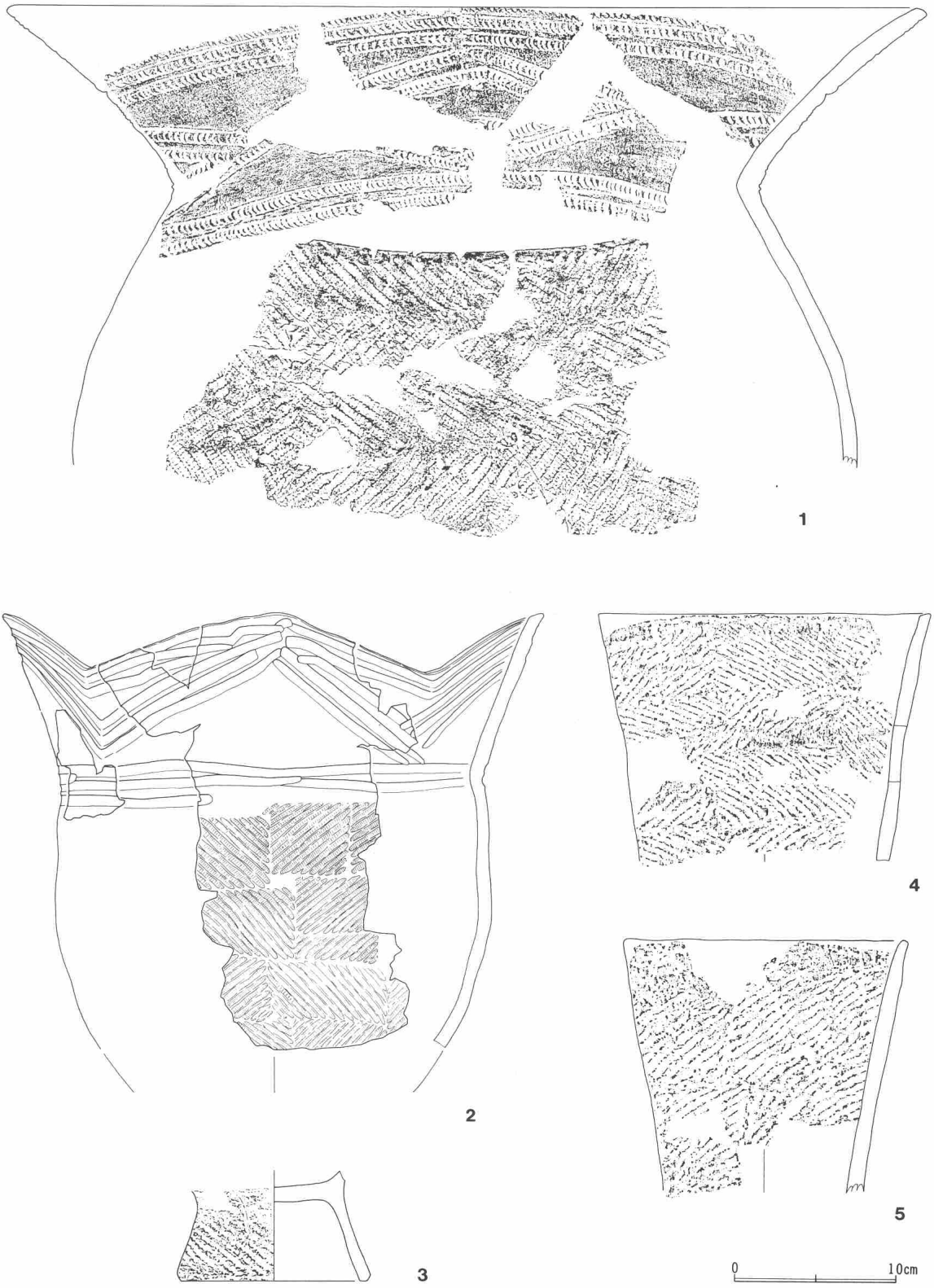
である。B地点調査区南西側の第2B号方形周溝墓もその全容は不明であるが、出土遺物より弥生時代後期吉ケ谷式のものと考えられる。調査区内で確認された部分では、周溝はコーナー部が途切れない形態で、方台部の軸線方向は、他地点で検出されている古墳時代前期の方形周溝墓とは、その向きが異なっているようである。

C地点は、農道改良舗装工事に伴って当教育委員会が昭和63年に調査したもので、B地点の西側に位置する。調査範囲は、幅4m・長さ約150mの道路敷部分で、調査区の西側半分より住居跡8軒と土壙多数が、東側半分より方形周溝墓が4基（第3～6号方形周溝墓）検出されている。住居跡は、縄文時代前期前半4軒（第2・6・7・8号住居跡）・古墳時代前期2軒（第3・4号住居跡）・平安時代1軒（第5号住居跡）・時期不明1軒（第1号住居跡）である。土壙は、ほとんどが縄文時代前期のものと推測され、住居跡周辺に分布している。調査区中央部付近の比較的大形の楕円形を呈する第3号土壙は、縄文時代前期諸磯C式期の所産で、その覆土中より黒曜石のチップが多数出土している。方形周溝墓は、4基ともすべて古墳時代前期のものである。方台部が不明の第4号方形周溝墓を除いて、すべて南西から北東方向に方台部の軸線を向けているが、周溝を共有したり、同一方向に近接して列状に並ぶような形態はとっていないようである。これらの方形周溝墓の中で、一番西側の第5号方形周溝墓は、他に比べて周溝幅が広く周溝の掘り込みも深く、整った周溝形態をしており、規模も比較的大きいのではないかと推測される。出土遺物は、各周溝墓ともあまり多くないが、第5号方形周溝墓の出土土器の多くは、南東側周溝東寄りの覆土上層にまとまって一括投棄されたものである。

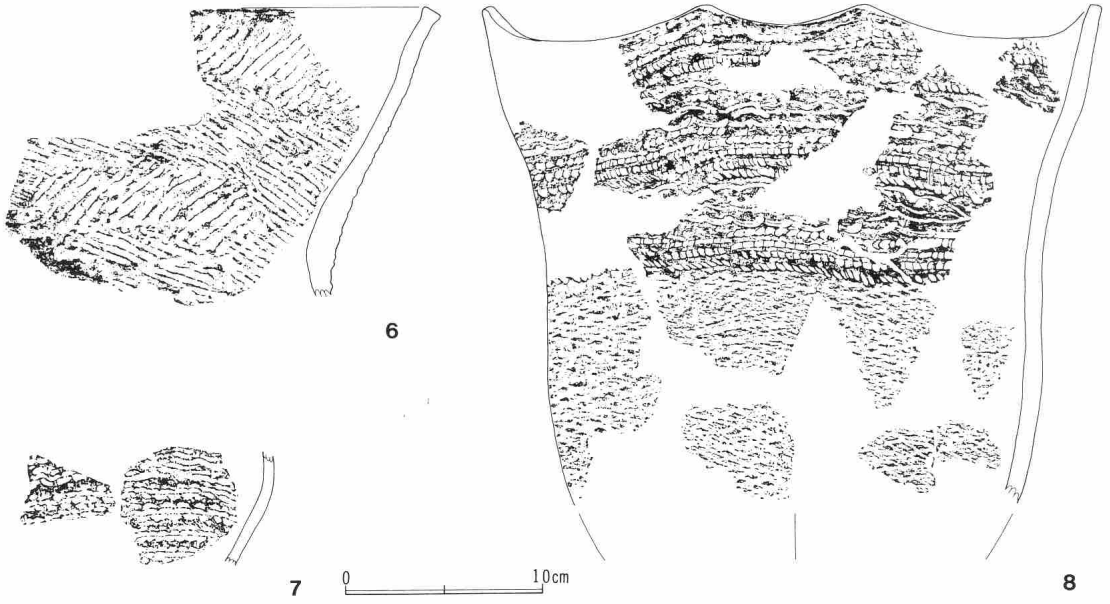
以上のように、これまでの3次にわたる発掘調査では、縄文・弥生・古墳・平安時代の各集落跡が検出されているが、主体をなすのは古墳時代前期の集落跡である。特に方形周溝墓は、丘陵先端付近に広く分布しており、比較的大きな墓域を構成しているようである。また、弥生時代後期の方形周溝墓は、該期資料の少ない当地域では初めての検出であり、吉ケ谷式と樽式土器の伴出も注目されよう。



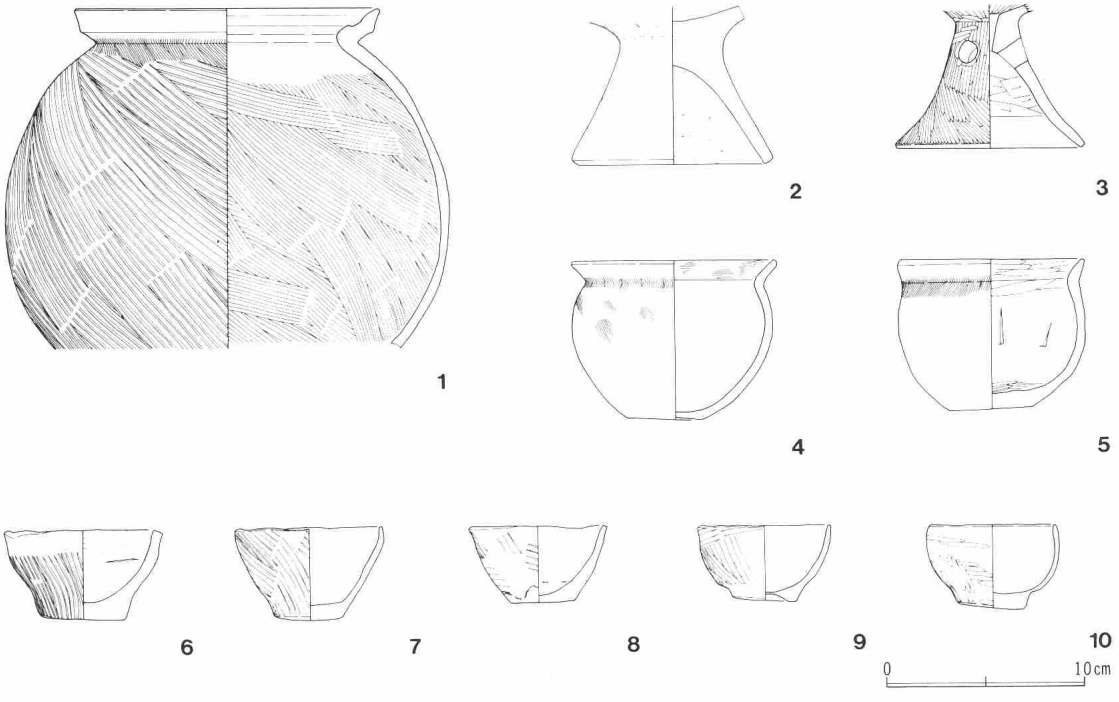
第6図　B・C地点全体図



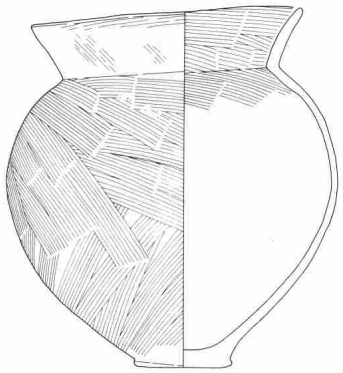
第７図　塩谷下大塚遺跡Ｃ地点第６号住居跡出土土器(1)



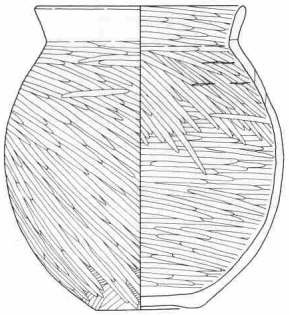
第8図　塩谷下大塚遺跡C地点第6号住居跡出土土器(2)



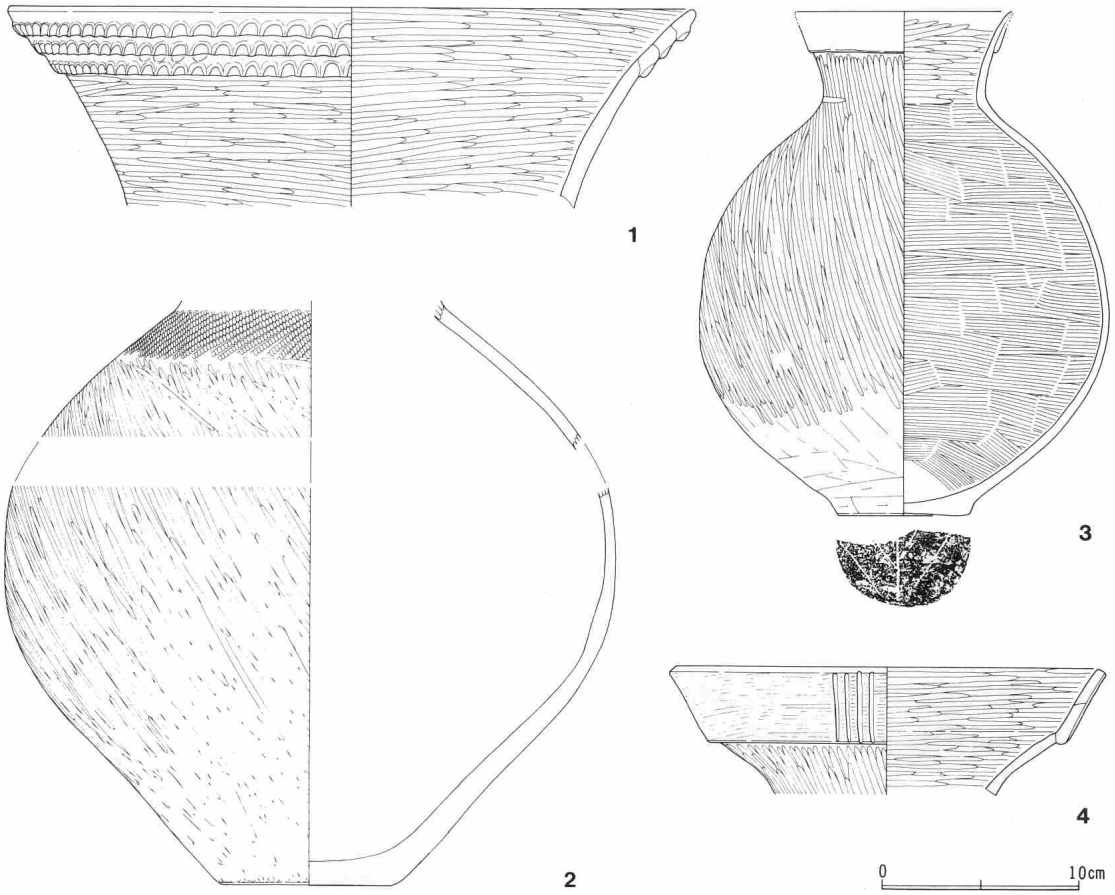
第9図　塩谷下大塚遺跡C地点第3号住居跡出土土器



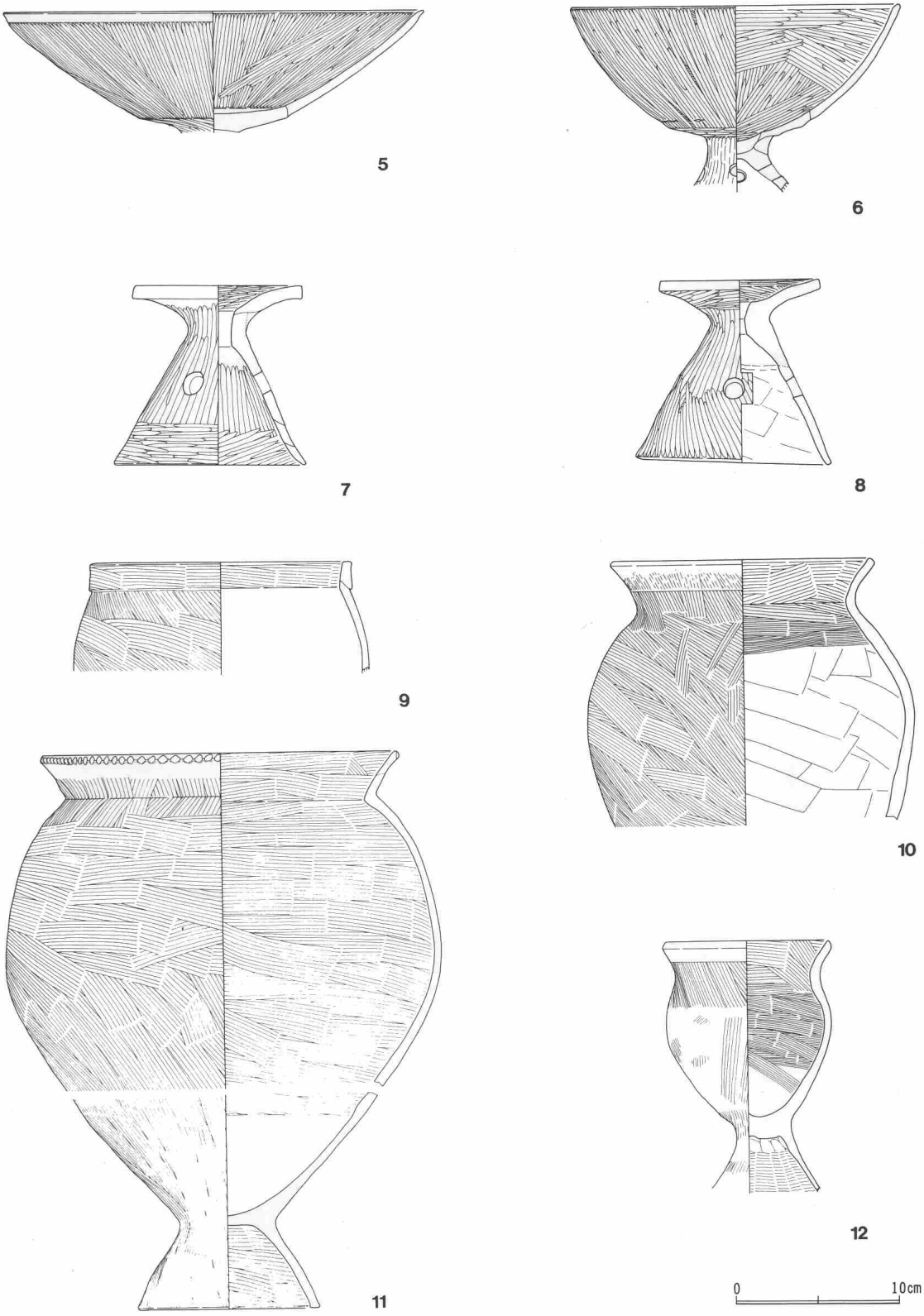
第10図　C地点第6号方形周溝墓出土土器



第11図　C地点第3号方形周溝墓出土土器



第12図　塩谷下大塚遺跡C地点第5号方形周溝墓出土土器(1)



第13図　塩谷下大塚遺跡C地点第5号方形周溝墓出土土器(2)

第Ⅳ章　検出された遺構

今回報告する塩谷下大塚遺跡のＢ地点は、すでに調査区西側がハードローム層中までカットされて全体に整地された状態であり、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。調査区内で検出された遺構は、方形周溝墓の周溝と考えられる溝跡（第２号方形周溝墓）と、調査区西側地境に位置するいわゆる「根切り溝」及び土壙（第２土壙）１基である。

第１節　方形周溝墓（第14図）

方形周溝墓は、近接するＡ地点ですでに１基調査されているため、それを第１号方形周溝墓と呼称し、今回のＢ地点で検出されたものを第２号方形周溝墓とする。

第２号方形周溝墓は、削平があまり及んでいない調査区東側を中心に検出されている。調査区内で確認されたのは、周溝の一部分であるため、周溝墓の全容は不明であるが、調査区内の南西側に方台部が存在する第２Ｂ号方形周溝墓と、調査区外の東側隣接地内に近接して方台部が存在する第２Ａ号方形周溝墓の２基の周溝が、調査区北東側で一部重複しているものと考えられる。

第２Ａ号方形周溝墓

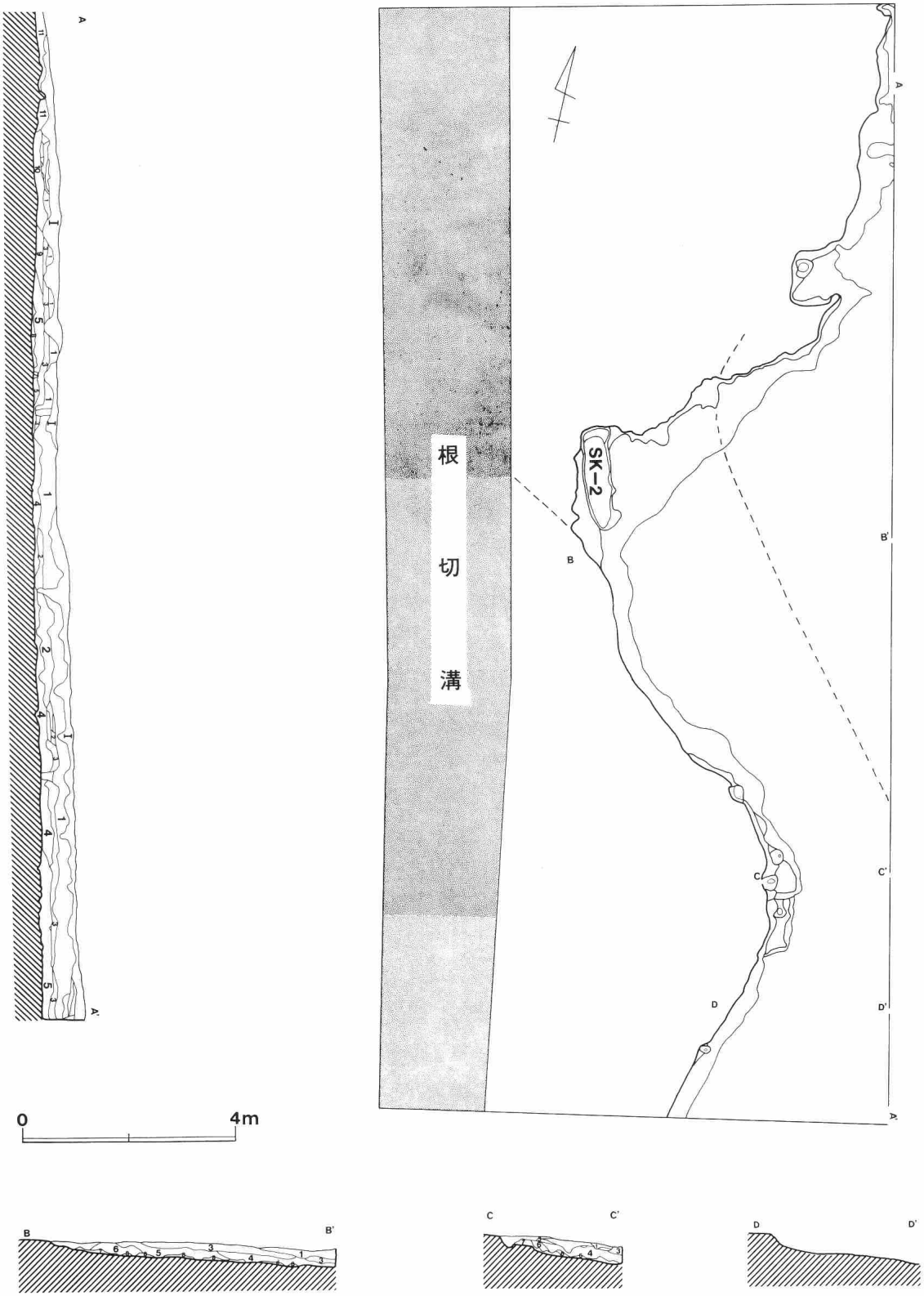
第２Ａ号方形周溝墓は、その周溝の外側部分が一部本調査区内の北東側で第２Ｂ号方形周溝墓の周溝と重複しているものである。方台部は調査区外の東側隣接地にあり、降雨後などに現地表面の土色の違いからその存在が確認できる。それによると、方台部はほぼ南西から北東方向に軸線をとっているようで、周溝幅は方台部の位置と本調査区内で確認された周溝外側部分から推測すると、４～５ｍはあると思われる。本調査区内における第２Ｂ号方形周溝墓との重複部分でのプランは、調査時に明らかにできなかったが、遺物の出土状況によりある程度判断することができる。切り合い関係は、覆土が非常に類似していたため、土層断面の観察では明らかにできなかったが、本周溝墓の周溝覆土からの出土と推測される土器（第35図№26）より、本周溝墓は古墳時代前期末から中期前半頃のものと考えられ、第２Ｂ号方形周溝墓より新しいことは明らかである。

第２Ｂ号方形周溝墓

第２Ｂ号方形周溝墓は、調査区南側に位置する。調査区内で確認されたのは、本周溝墓の東側から北側にかけての周溝の一部で、北側の周溝は第２号土壙（ＳＫ－２）が存在するあたりで削平されている。時期は、出土遺物より弥生時代後期後半のものと考えられる。

周溝の形態は、方台部側のみ明らかで、その掘り込みは比較的しっかりしている。方台部側の壁は、やや斜方向に立ち上がり、底面は平坦で凹凸がなく、地形の傾斜に沿うように東側に向かって緩やかに傾斜している。確認面からの深さは約30cmを測る。コーナー部は、途切れずに連続する形態をとり、周溝底面は浅くならずに他の部分と均一の深さを呈している。覆土は全体に黒褐色を呈し、方台部土盛りの流入は、明確には認められない。

方台部は、すでに削平されており、主体部や土盛りの痕跡はまったく認められなかった。形態は調査区内で確認された部分から判断すると、コーナー部はやや丸みの強い形態を呈し、北側と東側の



第14図　B地点全測図

辺は相互に直角をなさず、やや開きぎみに歪んでおり、各辺が張る可能性もある。

出土遺物は、周溝の出土中より弥生時代後期の土器片多数とガラス小玉３点が出土している。

第２号方形周溝墓土層説明

第１層：淡茶褐色土層（白色粒子を均一に、ローム粒子・ロームブロック・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第２層：暗茶褐色土層（第１層に類似するが、色調がやや暗く、しまりがない。）

第３層：暗褐色土層（白色粒子を多量にローム粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

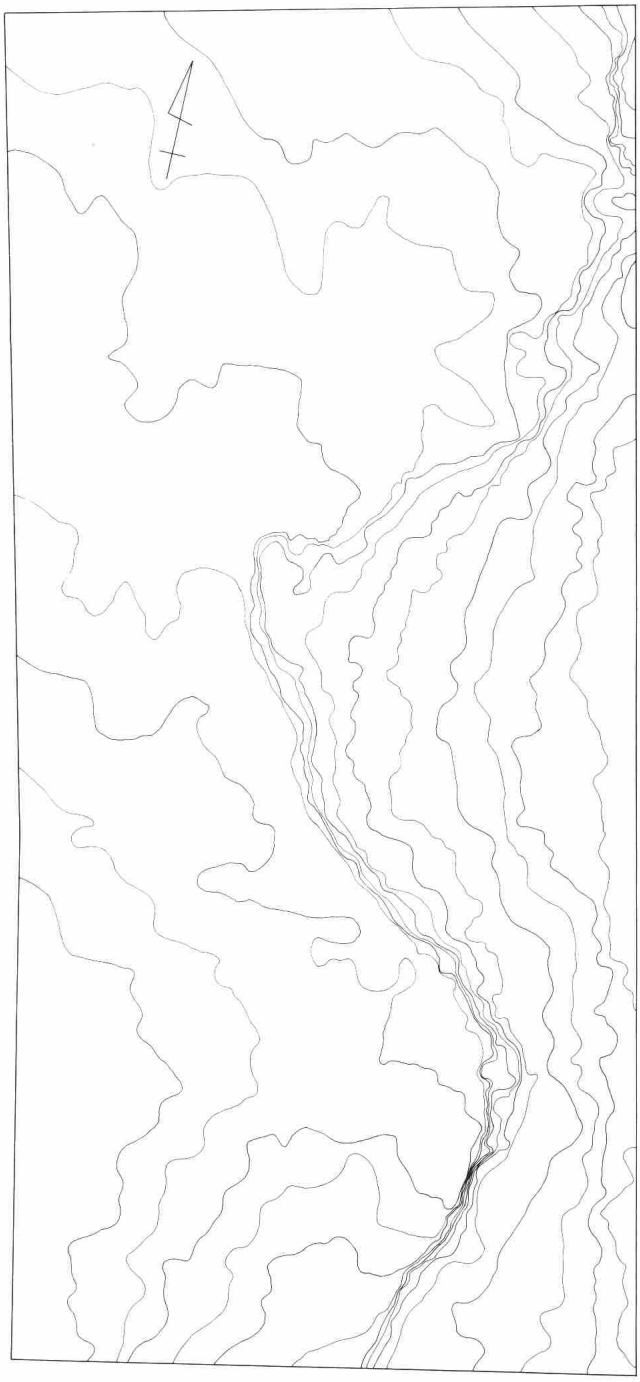
第４層：黒褐色土層（白色粒子・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第５層：黒色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第６層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第７層：暗黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量含む。粘性・しまりともない。）

第８層：暗黄白色土層（黄白色粘土ブロックを多量に含む。粘性・しまりともない。）



第15図　Ｂ地点等高線図（５cmコンタ）

第９層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に、白色粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第10層：暗褐色土層（白色粒子・ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第11層：暗茶褐色土層（Ａ軽石を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第2節　土　　壙

土壙は、A地点で検出された縄文時代中期（阿玉台式）の土壙を第1号土壙と呼称し、今回B地点で検出されたものを第2号土壙とする。

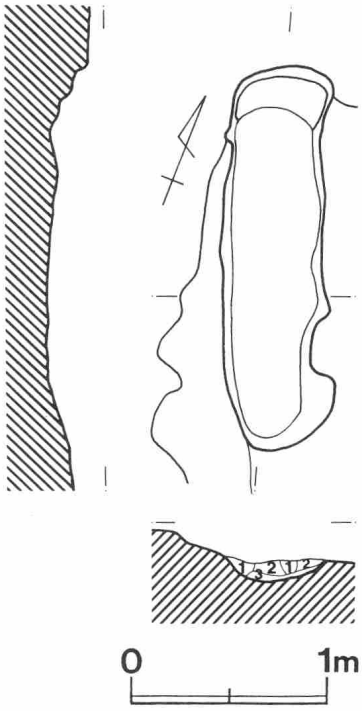
第2号土壙は、調査区中央部のやや西寄りに位置する。第2B号方形周溝墓の周溝と重複しているが、遺存状態が非常に悪く、その新旧関係を明らかにすることはできなかった。平面形は、南北方向に長い不整の長方形に近い形態を呈し、規模は南北方向2m・東西方向50cmを測る。深さは20cmあり、底面はほぼ水平をなすがやや凹凸がある。覆土は、以下の3層に分かれるが、遺存状態が悪いため、その堆積状態は不明である。

第1層：黒褐色土層（ローム粒子・白色粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第2層：茶褐色土層（ローム粒子・白色粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3層：茶褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性に富みしまりはない。）

本土壙の時期は、出土遺物がまったくないため不明であるが、覆土の観察からはA軽石降下以前でも比較的古い時期のものと考えられる。当初、第2B号方形周溝墓の覆土と類似し、その周溝内に位置していることから、方形周溝墓に伴う溝中埋葬の施設とも思われたが、周溝の方向と土壙の長軸方向がずれており、その関係は明らかではない。



第16図　等2号土壙

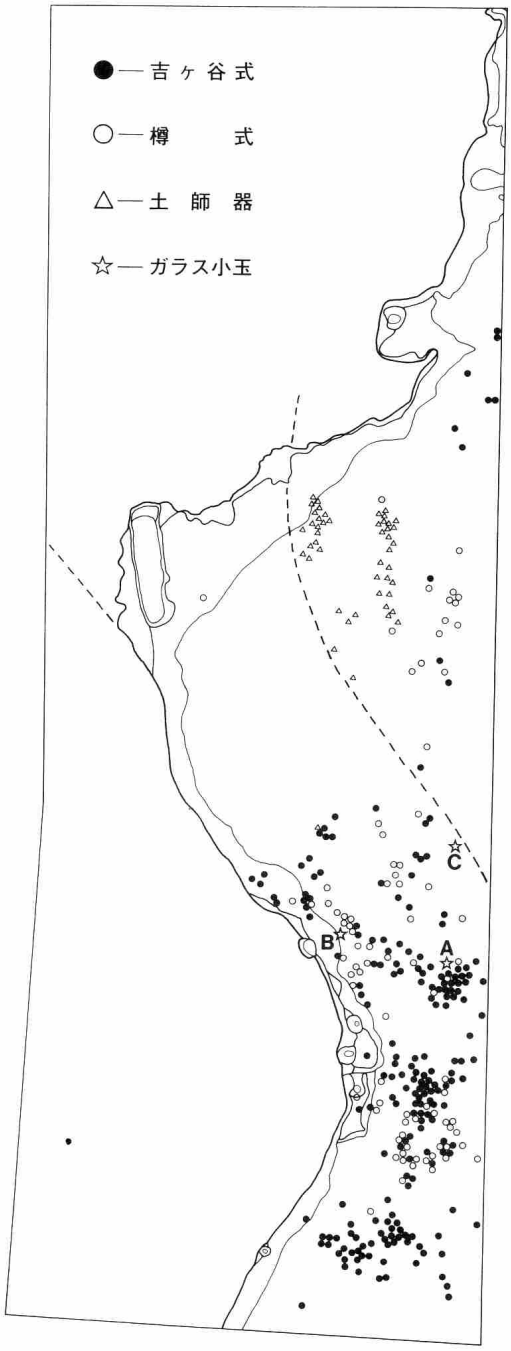
第Ⅴ章　出土した遺物

今回のＢ地点の調査で出土した遺物は、ほとんどが土器で、すべて第２Ａ・２Ｂ号方形周溝墓の周溝覆土中から出土している。土器は、縄文時代前期有尾式系・中期加曽利Ｅ式、弥生時代後期吉ケ谷式・樽式、古墳時代前期五領式・中期和泉式が出土しているが、出土土器の大部分を占めるのは、この内の弥生時代後期のもので、他はごく少数である。土器以外のものでは、周溝覆土中からガラス小玉が３点出土しているだけである。

第１節　遺物の出土状態

当初、調査区内から検出された遺構が、方形周溝墓の一部であろうことは見当をつけていたものの、その形態や重複関係が判然としていなかったため、出土遺物の取り上げについては、すべての土器破片はもとより自然石にいたるまで、その出土位置をドットにより記録して取り上げる方式をとった。周溝内から出土した遺物は、土器は破片数にして750片、自然石150個、ガラス小玉３点である。

出土土器は、調査区内で確認された周溝のほぼ全域から破片が出土しているが、主体を占める弥生時代後期の土器は、頻度的にはその南側に集中しており、古墳時代前・中期の土器は、少数ながらその北側に分布する傾向が見られる。出土状態において、器形を止どめていたのは、№24の和泉式の坏だけであり、ほとんどのものは器形の全容がまったく解らないような状態で、多くの小破片になって出土している。これらの出土土器の分布傾向から、弥生時代後期の土器は、調査区南側の第２Ｂ号方形周溝墓に伴い、古墳時代前期の土器破片は、調査区北側で重複する第２Ａ号方形周溝墓に伴うものと考えられる。なお、出土した土器のうち、唯一古墳時代中期に属する№24の坏は、完形の単独出土とその出土状態が他の時期のものとは異なっており、あるいはそれを伴う小土壙かピットが周溝覆土中に存在した可能性もある。ちなみに本遺跡で表採した第４図の紡錘車は、古墳時代前期から中期のものと思われ、同じ地



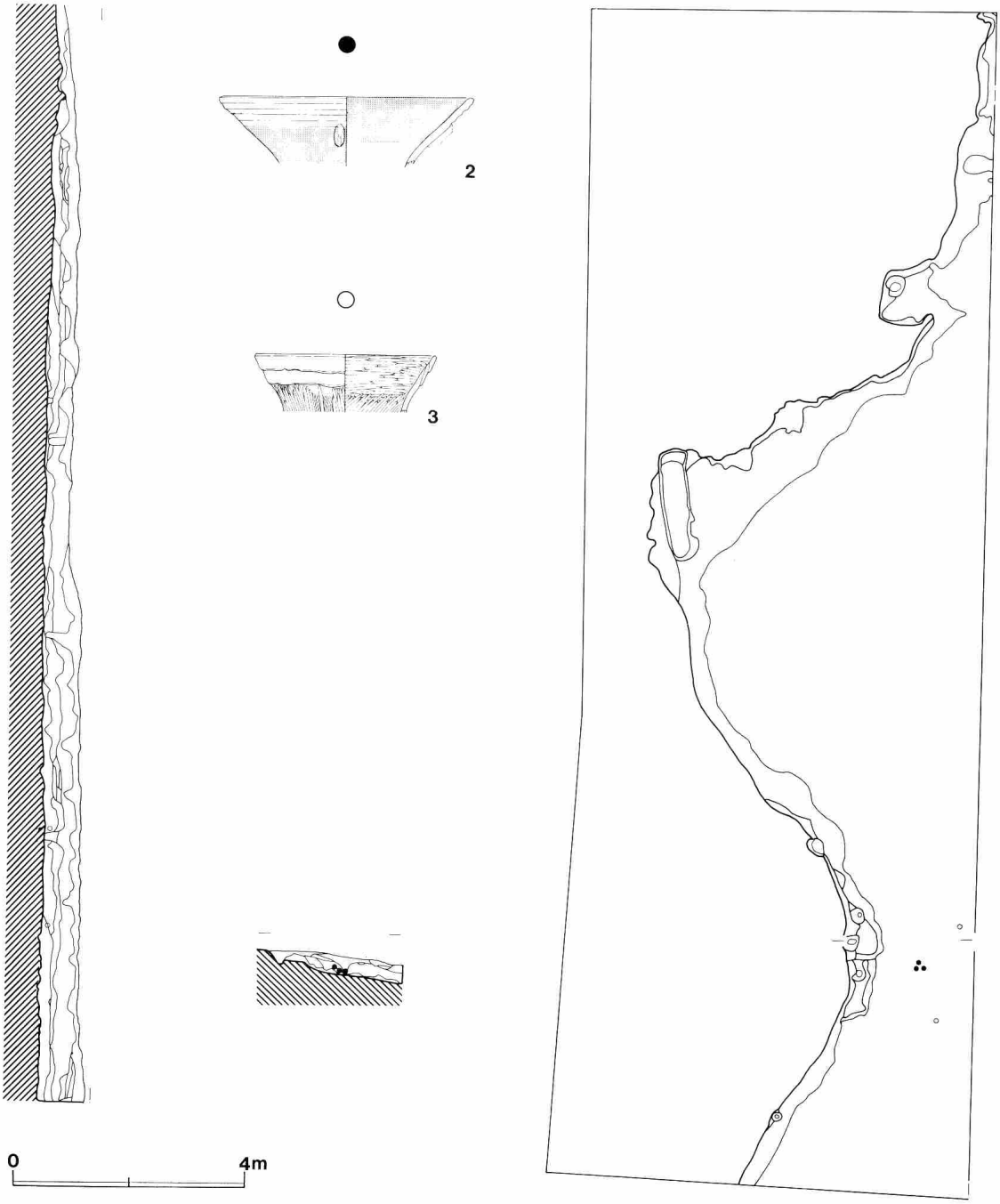
第17図　第２号方形周溝墓
遺物出土分布図

点で弥生土器（第38図）とともに和泉式土器破片も表採しており、本遺跡には古墳時代中期の集落跡も存在する可能性がある。

第２Ｂ号方形周溝墓の周溝から出土した弥生時代後期の土器には、吉ケ谷式と樽式があるが、数量的には吉ケ谷式が多数を占める。樽式については、それと判断できるものは、第33～36図に図化

第18図　土器出土状態分布図（No. 1）

したものだけである。これらの土器は、調査区内で検出された周溝の南側から多く出土していると言っても、正確には周溝墓の東側コーナー部の付近に密集した状況を示している。出土層位は、覆土の上層から下層まで満遍なく土器片が出土しているが、比較的下層に多い傾向が見られる。また吉ケ谷式と樽式には出土位置の分布や出土層位にこれといった差異はなく、両者の土器片が覆土中



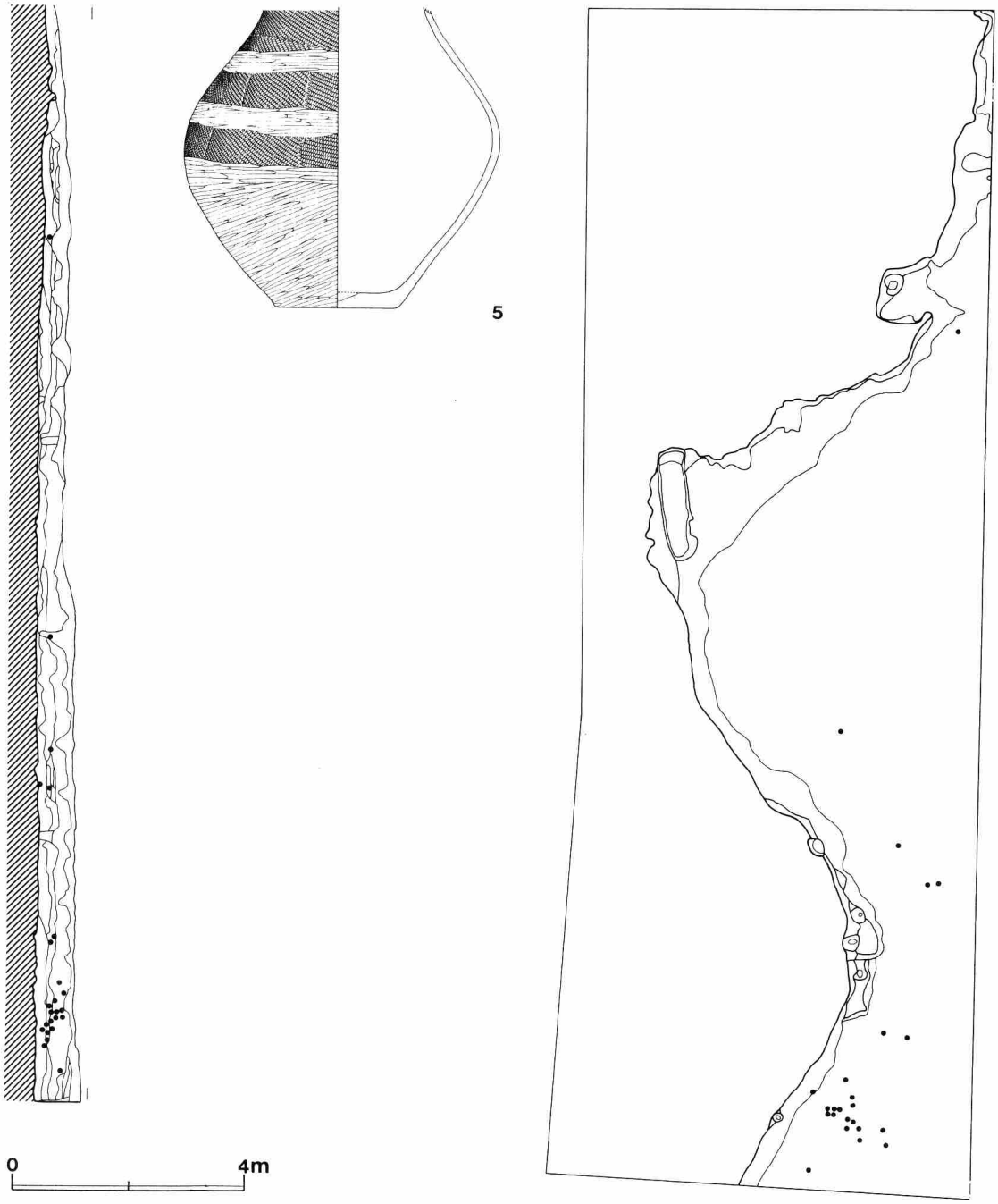
第19図　土器出土状態分布図（No.2・3）

に混在した状態で出土しており、共伴と考えてよいだろう。接合により器形がある程度復元できた土器（No 1 ～24）についても、出土状態においてその器形が解るようなものはなく、多くは多数の破片になって散乱したような状態で出土しており、方台部側から転落したり流入したような状況は認められなかった。なお、方形周溝墓に特有の底部穿孔土器や底部を意図的に打ち欠いたような土

第20図　土器出土状態分布図（No. 4）

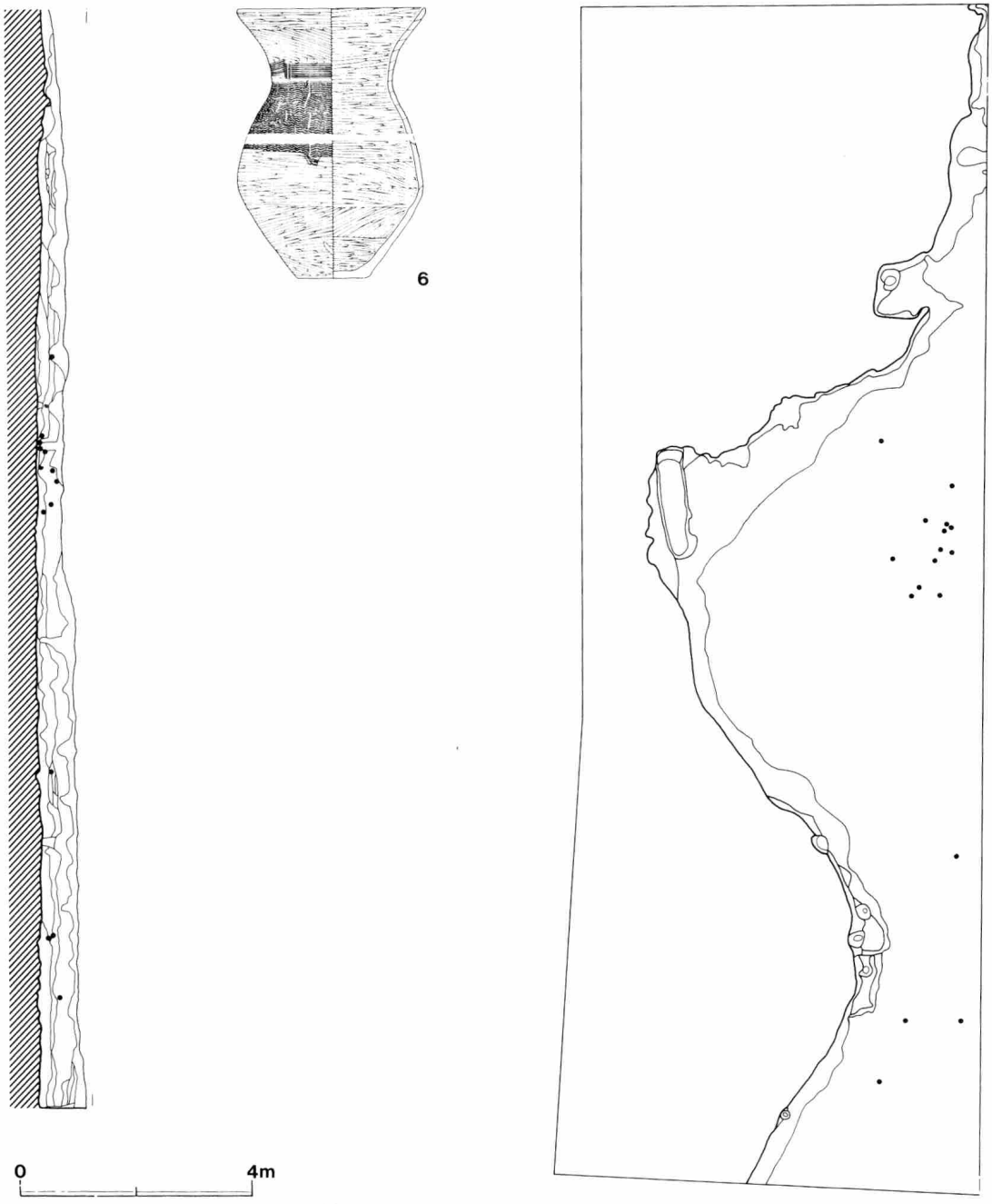
器は、まったく認められない。

このような第２Ｂ号方形周溝墓の土器の出土状態より、これらの土器は当初からその出土位置にあったものではなく、外から周溝内に投棄されたものと考えられる。また完形品がなく、同一個体の土器でも接合しないものが多いことから、他の場所で破壊されたことが推測される。その出土位



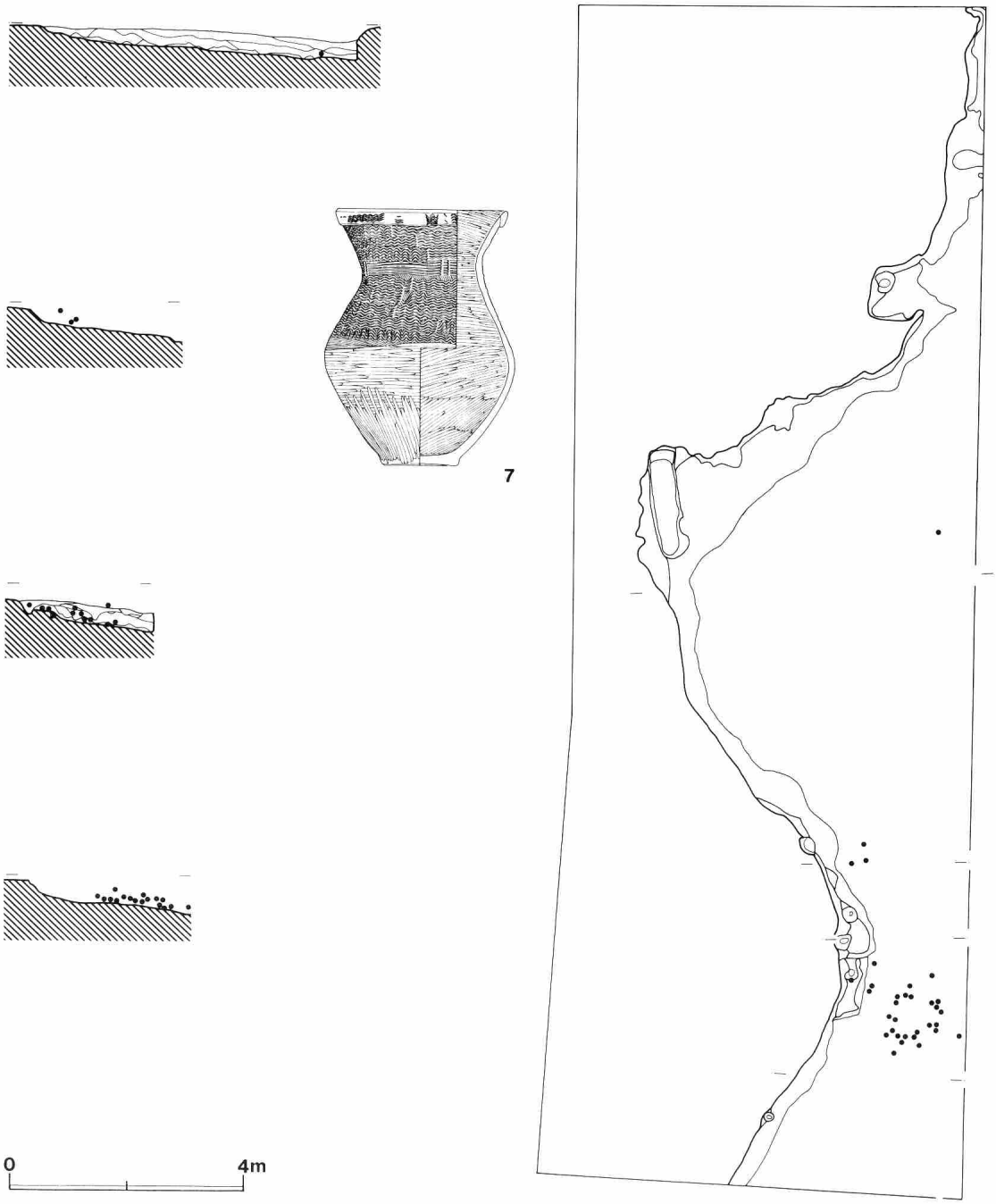
第21図　土器出土状態分布図（No. 5）

置が周溝墓のコーナー部付近に集中することや、出土土器が特定の器種に偏らず、この時期のほとんどの器種が出土していることから推測すると、墓前祭等の行為に使用された土器の可能性が高いと考えられ、行為終了後に使用した土器をその場で破壊し、周溝内に投棄したのではないかと思われる。ガラス小玉は3点出土しているが、これらはまとまって出土しておらず、単独でやや離れた



第22図　土器出土状態分布図（No. 6）

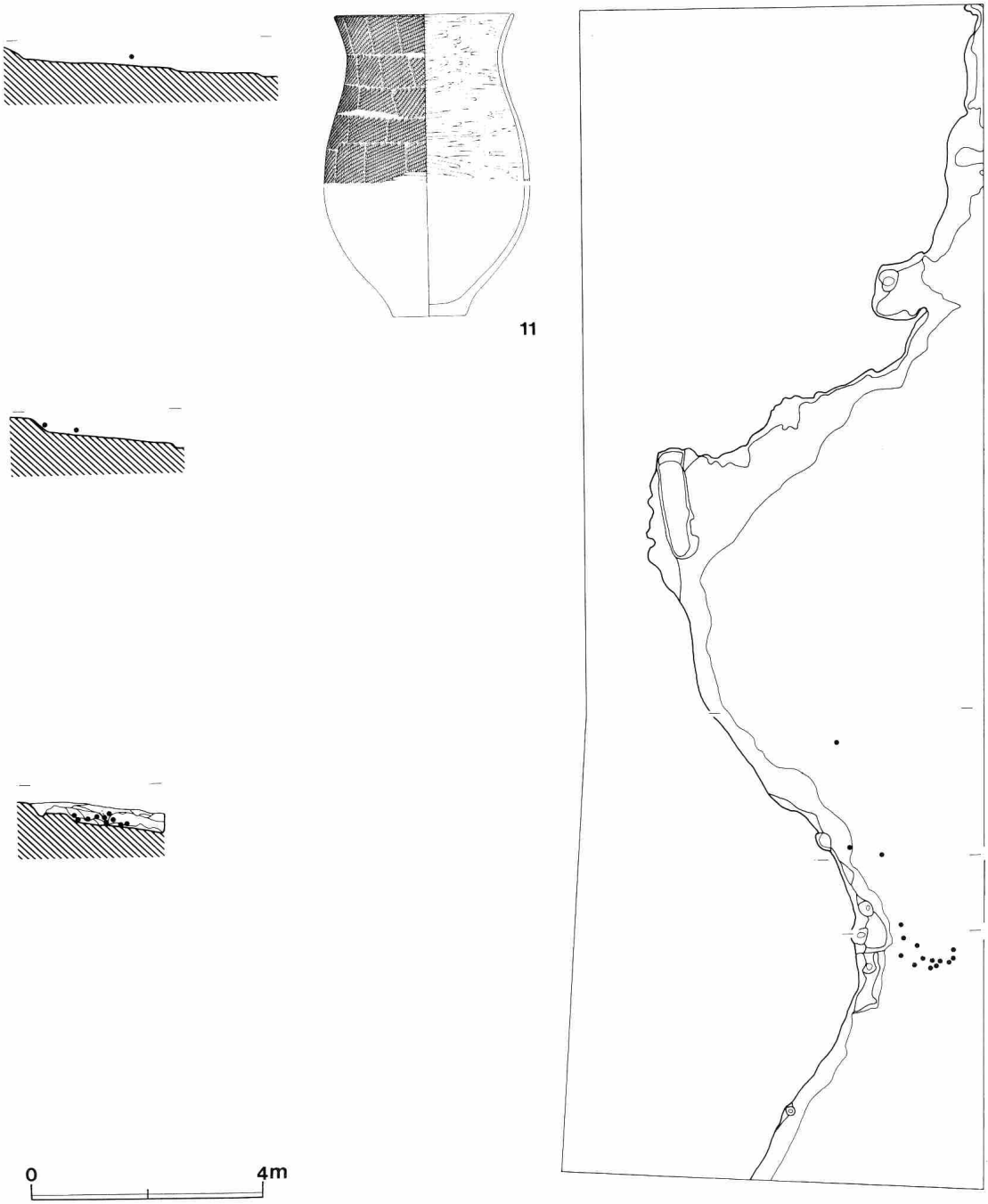
位置から出土している。いずれも覆土下層から出土し、その出土位置から第２Ｂ号方形周溝墓に伴うものと考えられる。



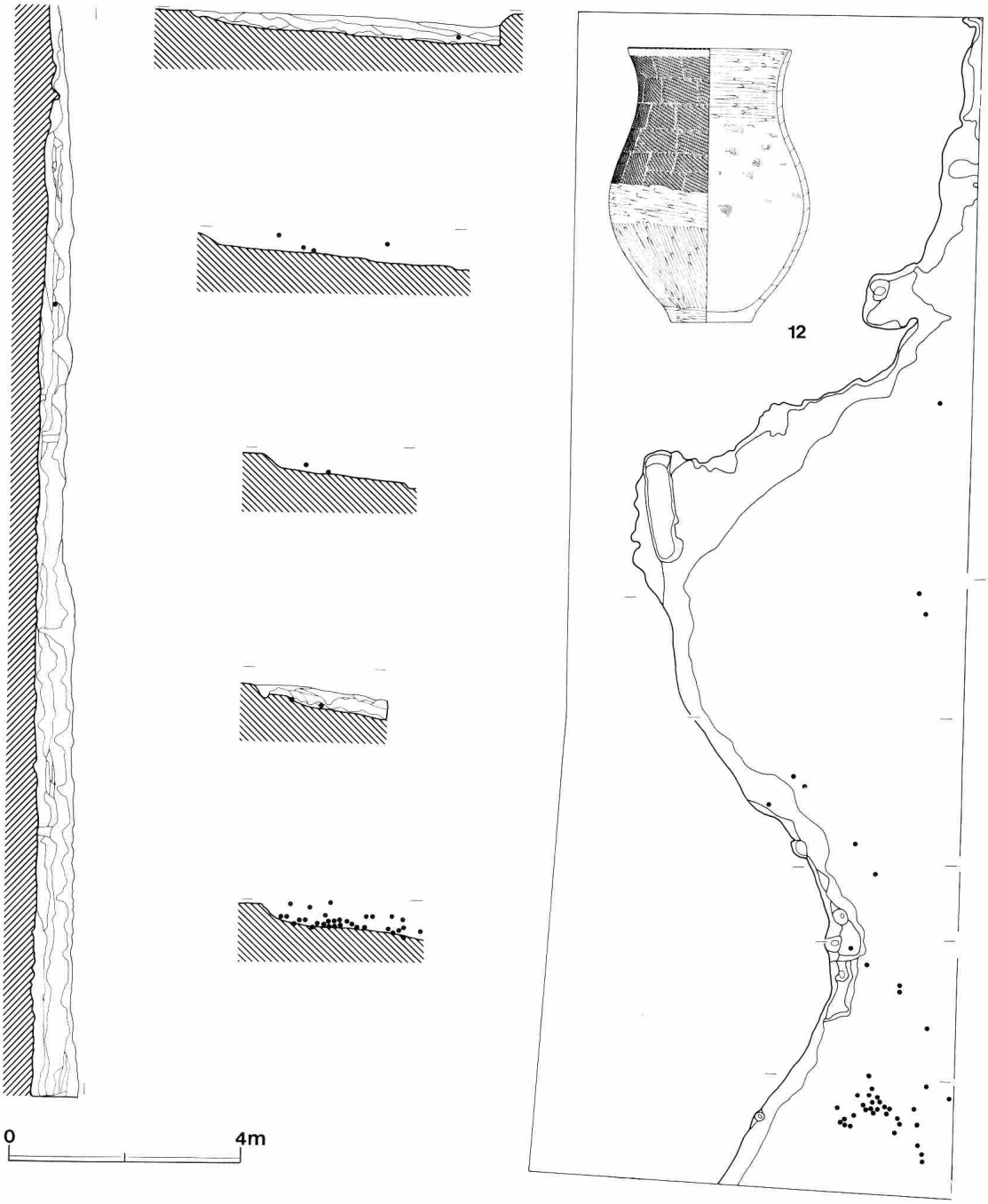
第23図　土器出土状態分布図（No. 7）

第24図　土器出土状態分布図（No. 8・9）

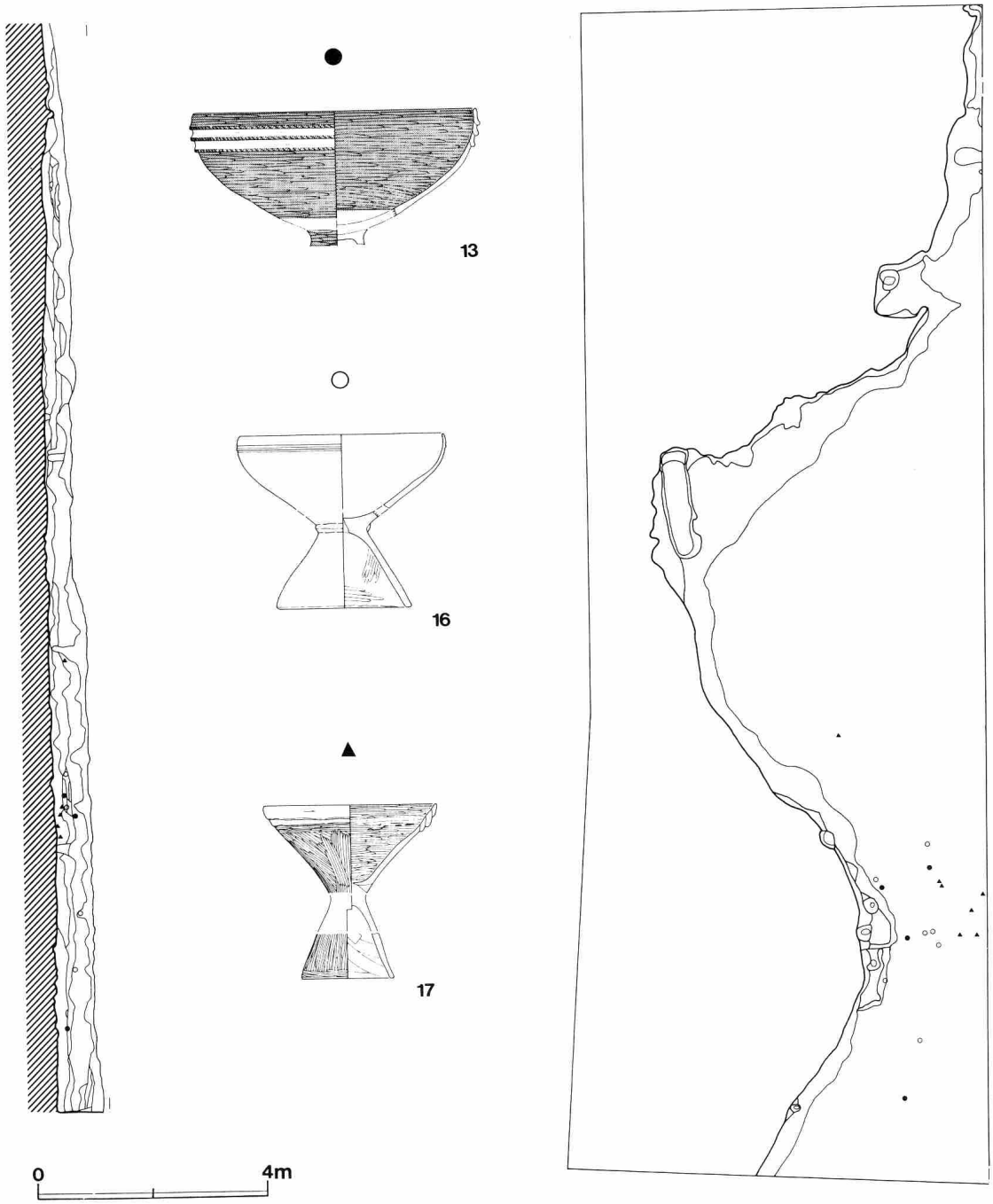
第25図　土器出土状態分布図（No.10）



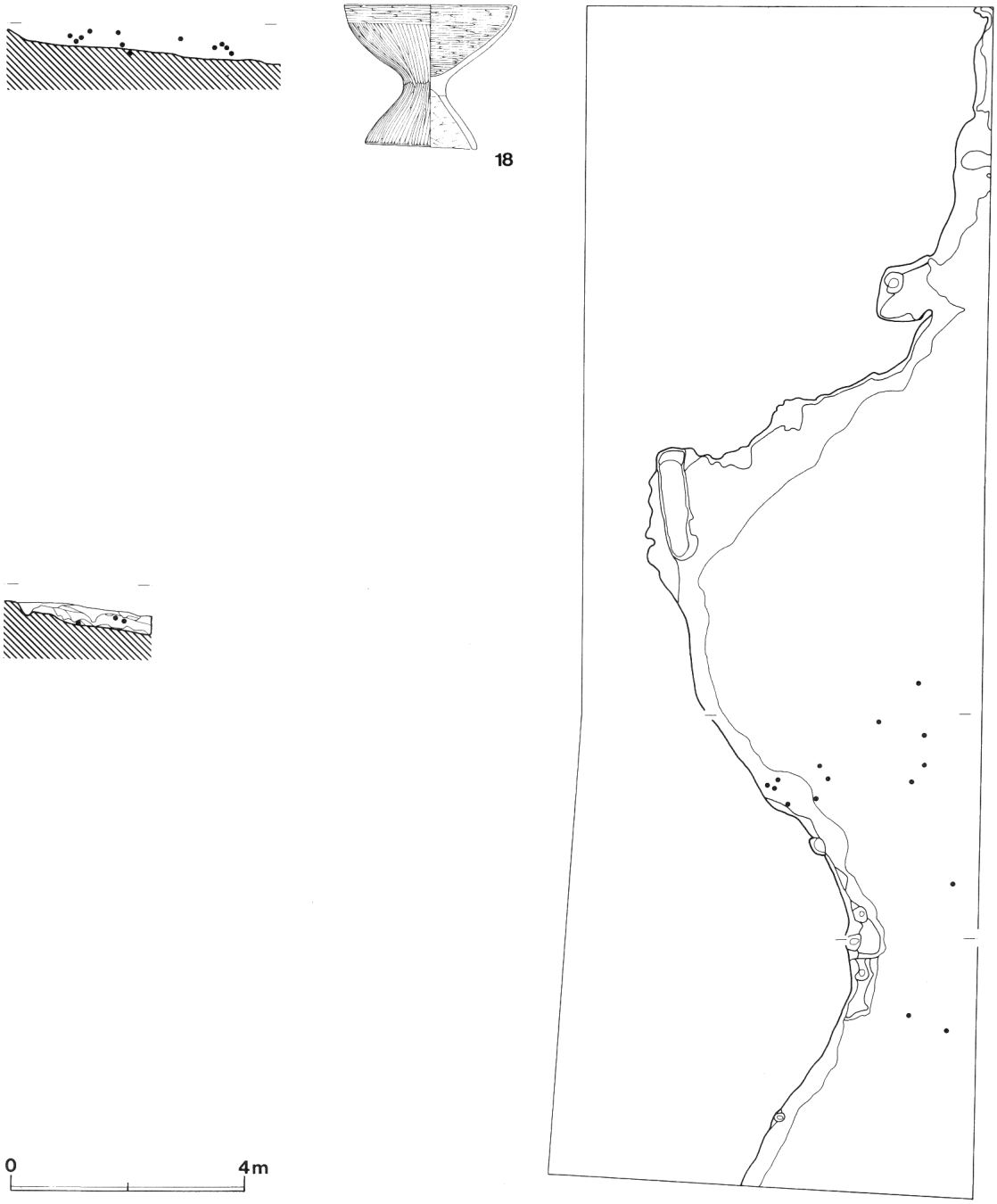
第26図　土器出土状態分布図（No.11）



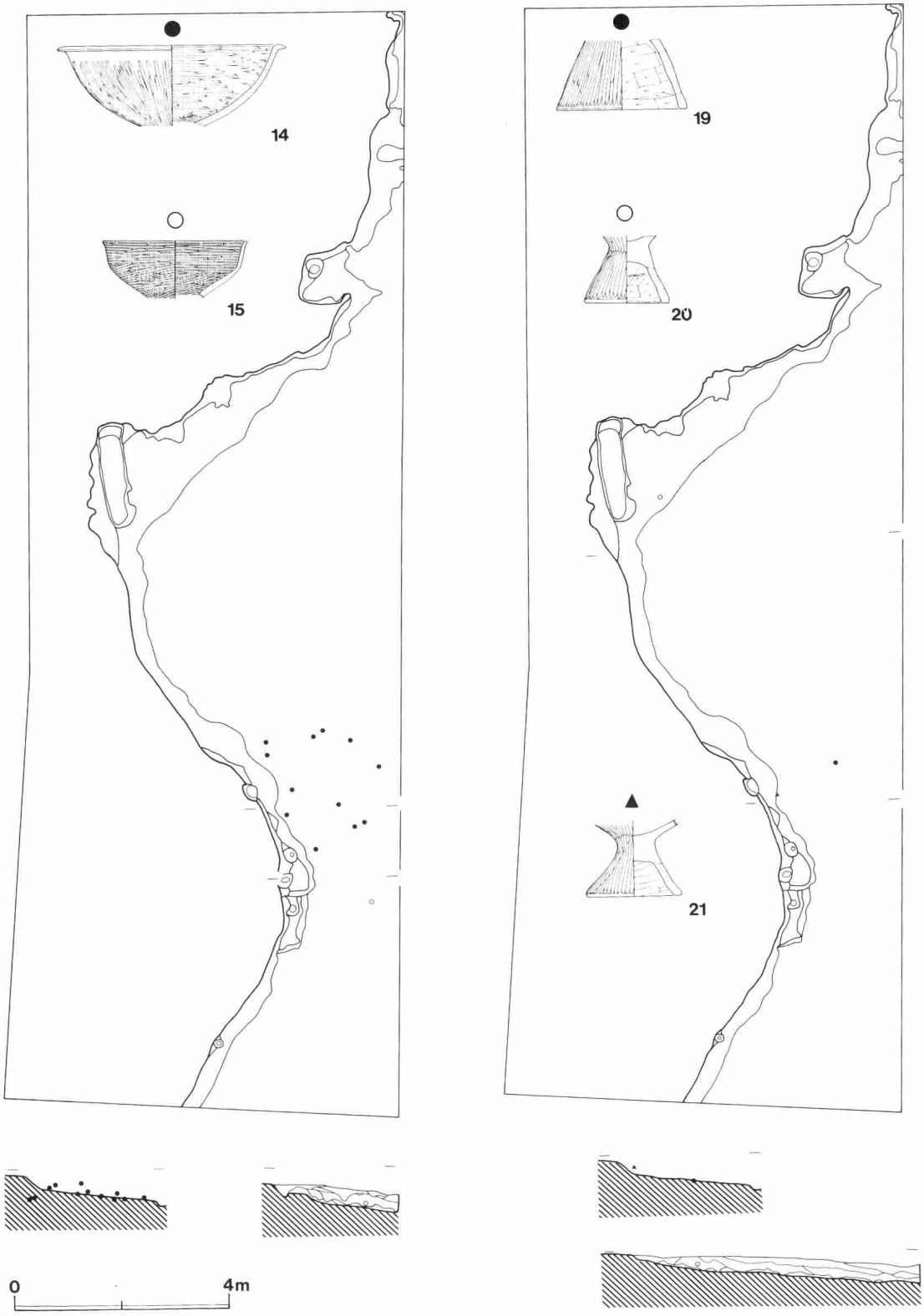
第27図　土器出土状態分布図（No.12）



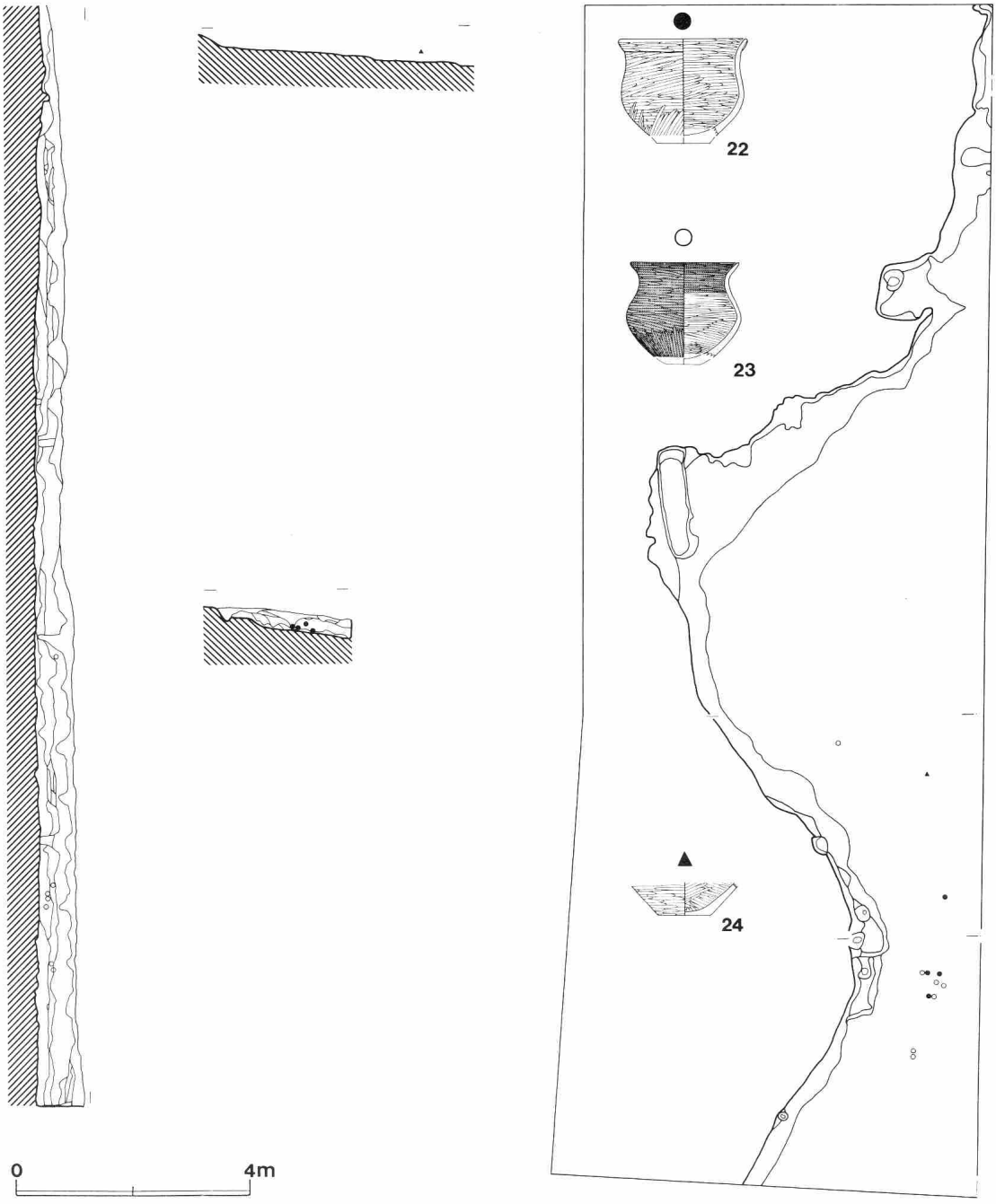
第28 図 土器出土状態分布図 (No.13・16・17)



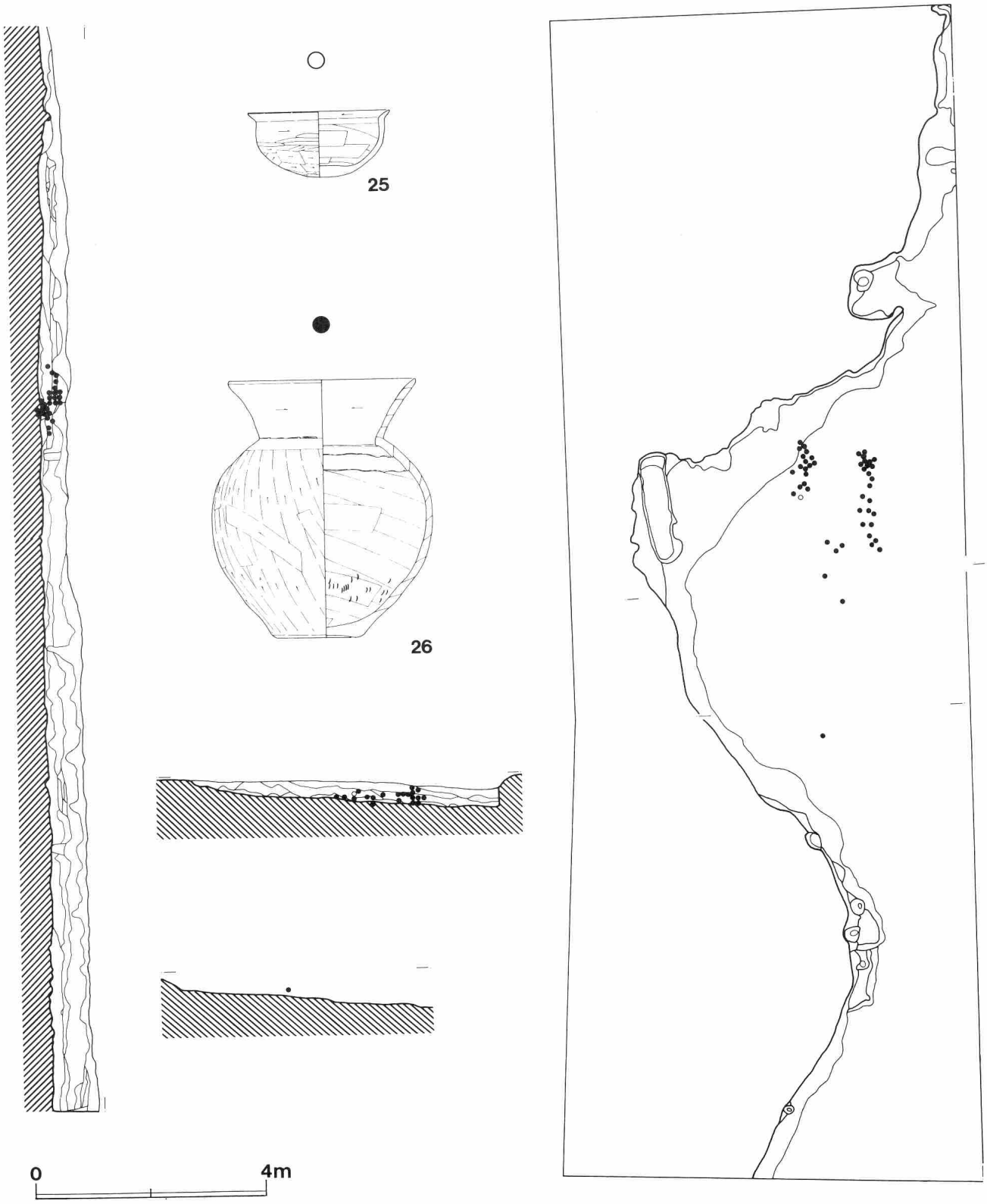
第29 図 土器出土状態分布図 (No.18)



第30 図 土器出土状態分布図（No.14・15・19・20・21）



第31 図 土器出土状態分布図 (No.22・23・24)



第32 図 土器出土状態分布図 (No.25・26)

第２節　出土遺物

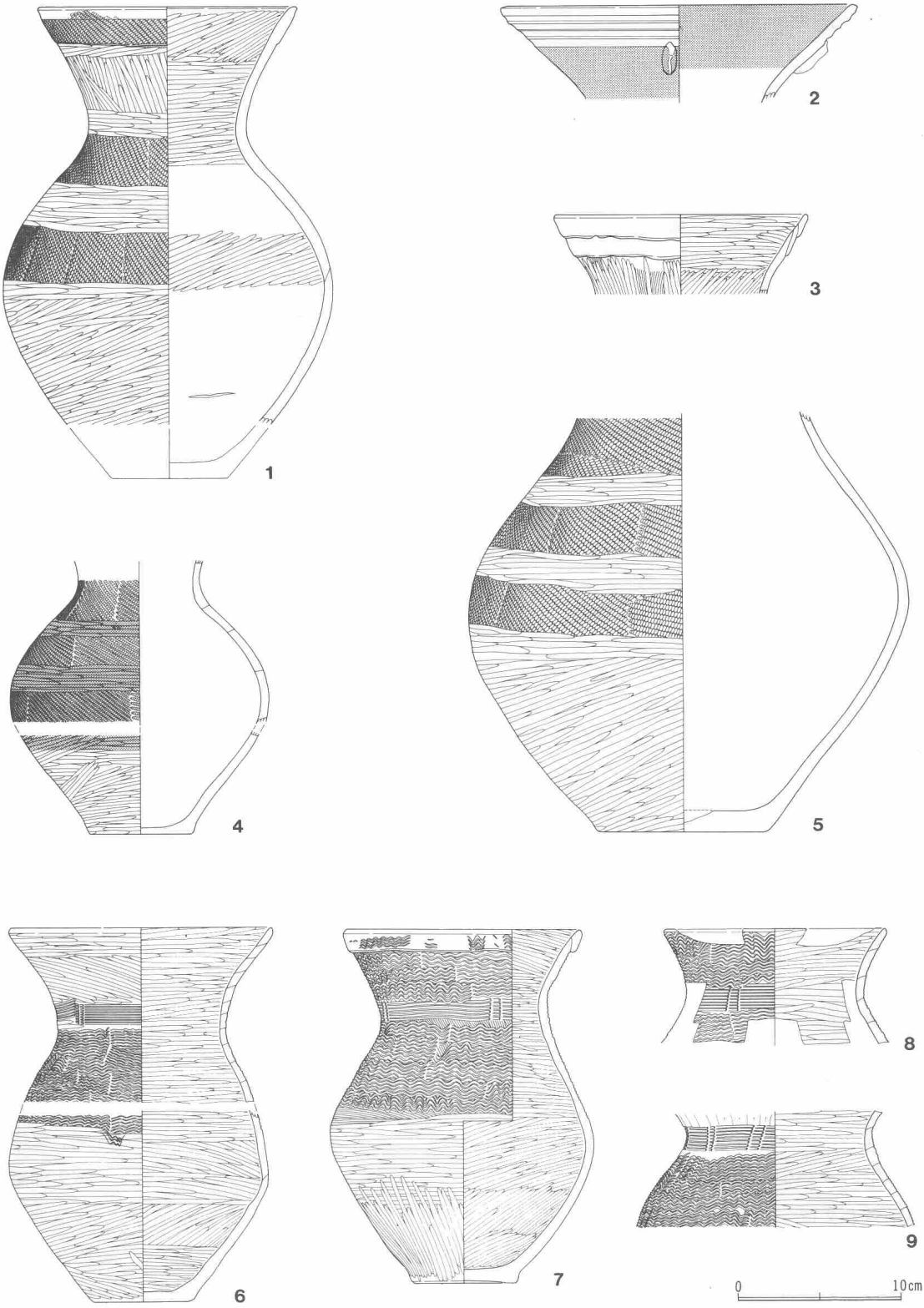
土　器（第33～36図）

1 は、弥生時代後期吉ケ谷式の壺である。口縁部径は推定で15.8cm、残存高は25.7cmで、底部を欠失している。口縁部は、粘土を薄く幅広に外面に貼り付けて他の部分より厚くし、複合口縁を意識した形状を呈する。口唇部には、やや平坦な面をもつ。頸部は、胴部との境が不明瞭で、緩やかに外反する。胴部は、あまり強く張らず、最大径を中位に有する。全体に縦長で、スマートなプロポーションを呈している。成形方法は、成形痕を残さないため不明であるが、粘土紐積み上げ成形と思われる。文様は、口縁部と胴部上半に文様帯を持ち、胴部は無文帯を挟んで上下２帯に分かれている。いずれも同一原体による単節縄文（ＲＬ）で、横位左回りに施文されているようである。調整手法は、内外面ともハケ整形の後、外面は文様施文後、頸部は縦方向のミガキ、胴部文様帯内の無文部に横方向のミガキ、施文部外の胴部下半に斜方向のミガキを施し、内面は口頸部と胴部の一部にミガキが見られる。口唇部内外面には、ヨコナデを施す。胎土は小石や赤褐色粒を多く含み色調は内外面とも淡黄褐色を呈する。残存率は、全体の約1/4程度である。

2 は、弥生時代後期吉ケ谷式の壺の口縁部破片である。口縁部径は、推定で21.8cmを測る。口縁部は、頸部より直線的に強く外傾し、口唇部に明瞭な面をもつ。文様は、口縁部外面に文様帯をもち、断面が丸い棒状工具による浅い凹線状の沈線を水平方向に４本施し、その下端にはややいびつで孔のない耳状把手が貼りつけられている。外面の施文部外と内面は赤色塗彩されている。調整手法は、内外面とも丁寧なミガキである。胎土は白色粒を顕著に含み、色調は塗彩部分が赤褐色、その他は黄褐色を呈する。残存率は、口縁部の約1／4程度である。

3 は、弥生時代後期吉ケ谷式の壺の口縁部破片である。口縁部径は、推定で15.6cmを測る。口縁部は、緩やかに外反し、外面に粘土紐の輪積痕を２段残して、輪積み装飾を残している。調整手法は、内外面ともハケ整形の後、頸部外面は縦方向のミガキ、内面は口縁部が横方向のミガキ、頸部が縦方向のミガキを施している。外面の輪積み装飾部はヨコナデを施す。胎土は白色粒と赤褐色粒を含み、色調は内外面とも淡茶褐色を呈する。残存率は、口縁部の約1／4程度である。

4 は、弥生時代後期吉ケ谷式の壺である。口縁部を欠失し、頸部から底部までが出土しているが、胴部の上半と下半は接合していない。底部径は6.4cm、残存高は推定で16.8cmを測り、比較的小形の壺である。頸部は、胴部との境が不明瞭で、緩やかに外反するようである。胴部は、丸く張り、最大径を中位に有する。底部は、器厚が比較的薄く、やや突出ぎみの平底を呈す。成形方法は、幅２cm位の粘土紐による輪積み成形である。文様は、胴部上半に文様帯を持ち、いずれも同一原体による節の細かな単節縄文（ＲＬ）で、無文帯を挟んで３帯横位施文されている。また、施文部間の無文帯と文様帯の下端には、赤色塗彩が施されている。調整手法は、文様を施文後、文様帯内の無文部に横方向のミガキ、施文部外の胴部下半に斜方向の丁寧なミガキを施す。内面の調整は、器表面が荒れているため不明である。胎土は白色粒と黒色粒を含む。色調は、外面が暗黄褐色、内面が暗褐色を呈する。胴部外面には黒班があり、中位に籾圧痕が見られる。残存率は、胴部上下半とも約1／2である。



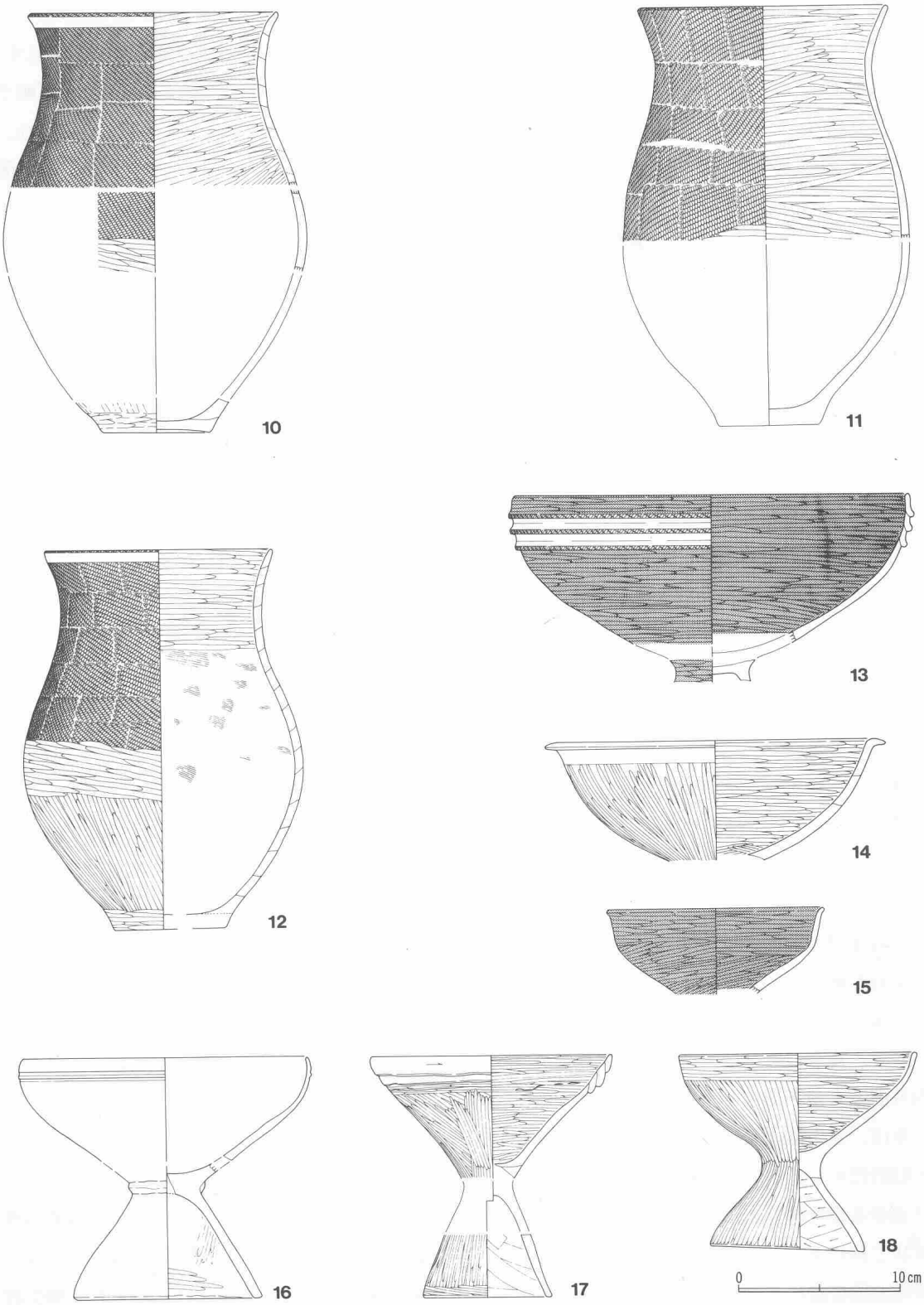
第33図　第２号方形周溝墓出土土器(1)

5は、弥生時代後期吉ケ谷式の壺である。底部径は10.4cm、残存高は25.8cmを測り、口縁部を欠失している。胴部はやや張り、最大径を中位に有する。底部は器肉の厚い、突出しない平底を呈す。成形方法は、粘土紐積み上げ成形と思われるが、明瞭な成形痕を残さないため、その明細は不明である。文様は、胴部上半に文様帯をもち、無文帯を挟んで3帯縄文が横位施文されている。縄文は、いずれも節の大きな単節縄文（ＲＬ）で、断続的に左回りに施文されている。調整手法は、器表面が荒れているため内外面とも不明瞭であるが、外面は文様施文後、文様帯内の無文部に横方向のミガキ、施文部外の胴文下半に斜方向のミガキ調整を施しているようである。胎土は片岩を多く含み、色調は内外面とも暗黄褐色を呈する。胴部外面の中位には煤の付着があり、胴部外面の下半と内面には珪点状の剝落が顕著に見られる。残存率は、約2／3程度である。

6は、弥生時代後期樽式の甕である。器形の復元は推定によるもので、胴部の中位を境に上半と下半は接合しない。口縁部径は推定で16.1cm、底部径は6.2cm、器高は推定で23.0cmを測る。頸部はやや立ちぎみで、口縁部は緩やかに外反する。口唇部はやや尖っている。胴部はあまり張らず、最大径をやや下位にもつ。底部は平底を呈し、器肉は比較的薄い。成形方法は、粘土紐積み上げ成形であるが、輪積みか巻き上げかは判断できない。文様は、頸部と胴部上半に文様帯をもつ。いずれも8本歯の櫛歯状工具による櫛描文で、頸部に2連止簾状文（単位数不明）を施文後、胴部上半に上段から下段の順に5～6段の波状文を施す。櫛描文は、いずれも横位右回りに断続的に施文され、胴部波状文は振幅・波長とも短い。調整手法は、文様施文後、外面の施文部外と内面に丁寧な横方向のミガキを施す。胎土は片岩粒と角閃石を含み、色調は内外面とも暗茶褐色を呈する。残存率は、胴部下半は完存しているが、上半は約1／4程度である。

7は、弥生時代後期樽式の甕である。口縁部径は推定で14.6cm、底部径は6.6cm、器高は21.8cmを測る。口縁部は、直線的に外反し、幅の狭い複合口縁を呈する。胴部はあまり張らず、最大径を中位に有する。底部は平底を呈し、やや突出している。成形方法は、粘土紐積み上げ成形であるが、輪積みか巻き上げかは判断できない。文様は、口縁部と頸部及び胴部上半に文様帯をもつ。いずれも6本歯の櫛歯状工具による櫛描文で、頸部に2連止簾状文（推定4単位）を施文後、口縁部は上段から下段の順に3段の波状文を、胴部上半は上段から下段の順に5段の波状文を施す。櫛描文は、いずれも横位右回りに施文され、波状文は断続的に施されている。調整手法は、内外面ともハケ整形の後、施文部外を丁寧にミガキ調整するが、外面胴部下半には横方向の後、縦方向のミガキが見られる。複合口縁部は、波状文施文後にヨコナデを施す。胎土は白色粒と赤褐色粒を含み、色調は内外面とも淡茶褐色を呈す。残存率は、約3／4程度である。

8は、弥生時代後期樽式の甕の口縁部破片である。口縁部径は、推定で13.8cmを測る。口縁部は比較的短めで、緩やかに外反する。成形は、粘土紐積み上げ成形で、幅1.5cm位の粘土紐の積み上げ痕が5帯観察できる。文様は、口縁部と頸部及び胴部上半に文様帯をもつ。いずれも9本歯の櫛歯状工具による櫛描文で、頸部に2連止簾状文（単位数不明）を施文後、口縁部は下段から上段の順に3段の波状文を、胴部は上段から下段の順に波状文を施している。櫛描文は、いずれも横位右回りに施文され、波状文は断続的に施されている。調整手法は、外面はナデの後に文様を施文し、内面はハケ整形の後に横方向のミガキ調整を施す。胎土は白色粒と赤褐色粒を含み、色調は内外面



第34図　第２号方形周溝墓出土土器(2)

とも茶褐色を呈する。残存率は、口縁部1／2弱である。

9は、弥生時代後期樽式の甕の頸部から胴部上半にかけての破片である。成形は、粘土紐輪積み成形で、幅1㎝位の粘土紐積み上げ痕が7帯観察できる。文様は、頸部と胴部上半に文様帯が見られる。いずれも8本歯の櫛歯状工具による櫛描文で、頸部に2連止簾状文（6～7単位）を施文後、胴部上半に下段から上段の順で波状文を施している。櫛描文は、いずれも横位右回りに施文され、波状文は振幅が短く断続的である。調整手法は、外面はナデの後に文様を施文し、内面はケズリ状の強いナデの後に横方向のミガキ調整を施す。胎土は、白色粒・片岩粒・赤褐色粒を含み、色調は内外面とも茶褐色を呈する。残存率は、頸部3／4である。

10は、弥生時代後期吉ケ谷式の甕である。胴部下半を欠失するが、同一個体と思われる底部が存在する。口縁部径は推定で15.4㎝、底部径は6.6㎝を測る。口縁部は、立ちぎみで緩やかに短く外反し、口唇部内面はやや内反り状になる。頸部は胴部との境が不明瞭で、やや立ちぎみになっており、胴部はあまり張らず、最大径を中位に有するようである。底部は、器肉の薄い平底を呈し、突出していない。成形方法は、粘土紐積み上げ成形であるが、輪積みか巻き上げかは判断できない。文様は、口唇部と口縁部から胴部上半にかけて、同一原体による単節縄文（ＰＬ）が横位に施文され、口縁部から胴部上半にかけては、上段から下段の順に5段施文されている。調整手法は、ハケ整形及び文様施文の後、施文部外の胴部下半と内面に横方向のミガキ調整を施し、口唇部外面にはヨコナデを加える。胎土は白色粒・片岩粒・赤褐色粒を含み、色調は内外面とも暗褐色を呈する。残存率は、胴部上半約2／3、底部1／2である。

11は、弥生時代後期吉ケ谷式の甕である。口縁部は、推定で15.4㎝を測り、胴部下半を欠失する。口縁部は緩やかに外反し、頸部は胴部との境が不明瞭である。胴部はあまり張らず、最大径を中位に有するようである。成形方法は、粘土紐積み上げ成形であるが、輪積みか巻き上げかは判断できない。文様は、口唇部と口縁部から胴部上半にかけて、同一原体による単節縄文（ＲＬ）が横位に断続的に短く施文され、口縁部から胴部上半にかけては、上段から下段の順に5段施文されている。文様の施文は、やや雑である。調整手法は、文様施文後、施文部外の胴部下半と内面に横方向のミガキ調整を施す。胎土は白色粒と黒色粒を含み、色調は外面が茶褐色、内面が黒茶褐色を呈する。残存率は、胴部上半約1／2である。

12は、弥生時代後期吉ケ谷式の甕である。口縁部径は14.0㎝、底部径6.9㎝、器高は23.6をを測る。口縁部は、短く緩やかに外反し、口唇部内面は、やや内反り状になる。頸部は、胴部との境が不明瞭で、立ちぎみになっている。胴部は、あまり張らず、最大径を中位に有する。底部は、平底を呈しあまり突出しない。成形方法は、粘土紐積み上げ成形であるが、輪積みか巻き上げかは判断できない。文様は、口唇部と口縁部から胴部上半にかけて、同一原体による単節縄文（ＲＬ）が横位に断続的に短く施文され、口縁部から胴部上半にかけては、上段から下段の順に6段丁寧に施文されている。調整手法は、内外面ともハケ整形の後、外面は施文部外の胴部下半を横及び縦方向の丁寧なミガキ、口縁部内面は横方向の丁寧なミガキ調整を施す。口唇部外面には、文様施文後にヨコナデを加える。胎土は白色粒・片岩粒・赤褐色粒を含み、色調は内外面とも明橙褐色を呈する。底部外面と胴部内面には、斑点状剝落が顕著に見られる。残存率は、約2／3程度である。

13は、弥生時代後期吉ケ谷式の高坏の坏部破片である。口縁部径は、推定で24.2cmを測り、脚部は欠失するが、坏部と脚部の接合部は残存している。体部・口縁部とも内湾ぎみに立ち上がり、口縁部外面には粘土紐積み上げによって形成した凸帯状の3段の輪積み装飾を施している。成形方法は、粘土紐輪積み成形である。坏部と脚部の接合は貼り付け接合で、脚部側はその接合面で剝離している。文様は、口縁部外面に3段の輪積み装飾が見られ、その凸帯状の先端部に単節縄文(RL)が施されている。輪積み装飾外部は、全面赤色塗彩されている。調整手法は、輪積み装飾部は丁寧なナデを施し、その他の部分には丁寧な横方向のミガキ調整を施す。胎土は白色細粒を含み、色調は淡黄褐色で、塗彩されている部分は赤褐色を呈する。残存率は、口縁部の約1/3である。

14は、弥生時代後期樽式の高坏の坏部破片である。口縁部径は、推定で21.0cmを測り、脚部は欠失している。体部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部は短く水平方向に延びる。成形方法は、粘土紐積み上げ成形であるが、輪積みか巻き上げかは判断できない。調整手法は、内外面ともハケ整形の後、外面は縦方向の雑なミガキ、内面は横方向のミガキ調整を施す。胎土は白色粒と赤褐色粒を含み、色調は内外面とも明茶褐色を呈する。残存率は、口縁部の約1/4である。

15は、弥生時代後期樽式の高坏の坏部破片である。口縁部径は、推定で13.4cmを測り、脚部は欠失している。体部・口縁部とも直線的に立ち上がるが、その境は屈曲して方向を違えている。口唇部は、短く外側に向いており、摩滅が著しい。成形方法は、粘土紐積み上げ成形であるが、輪積みか巻き上げかは判断できない。調整手法は、内外面とも丁寧なミガキ調整を施し、全面に赤色塗彩されている。胎土は、白色粒を含み、No13の胎土に類似する。色調は、暗橙色で塗彩部分は赤褐色を呈する。残存率は、口縁部の約1/4である。

16は、弥生時代後期吉ケ谷式の高坏である。坏部脚部ともに存在するが、坏部下半と脚部は接合していない。口縁部径は推定で17.4cm、脚端部径は11.6cm、器高は推定で15.0cmを測る。口縁部は、内湾しながら立ち、口唇部に向かって器肉は薄くなる。脚部は、やや内湾ぎみに開き、坏部との接合部の外面には断面三角形の凸帯を貼り付けている。口縁部外面には、成形時の粘土紐による輪積み装飾に類似する段が見られる。段の上下端には沈線状のナゾリを施しているようであるが、器表面が風化して荒れているため、明細は不明である。成形方法は、粘土紐輪積み成形と思われる。調整手法は、器表面が荒れているため不明である。胎土は片岩粒・角閃石・赤褐色粒を含み、色調は外面橙褐色、内面淡茶褐色を呈する。残存率は、坏部1/3、脚部4/5である。

17は、弥生時代後期吉ケ谷式の高坏である。口縁部径は15.0cm、脚端部径は8.8cmを測る。坏部と脚部は接合していない。坏部はやや外湾ぎみに外反し、口縁部外面には粘土紐輪積み装飾による段を3段形成している。脚部は直線的に開く。成形方法は、粘土紐輪積み成形である。調整手法は、坏部は内外面とも荒いハケの後、外面は縦方向のミガキ、内面は横方向のミガキを施す。脚部は、外面縦方向のミガキを施し、内面はナデ調整である。口縁部外面の輪積み装飾部は、指押さえの後ヨコナデを加える。胎土は白色粒と赤褐色粒を含み、色調は内外面とも淡茶褐色を呈する。残存率は、坏部脚部とも3/4程度である。

18は、弥生時代後期の樽式系と思われる高坏である。口縁部は14.7cm、脚端部径は推定で9.5cm、器高は12.3cmを測る。体部は内湾ぎみに開き、口縁部は体部とやや方向を違え、直線的で立ちぎみ

になっている。脚部はやや内湾ぎみに開く。成形方法は、粘土紐積み上げ成形であるが、輪積みか巻き上げかは判断できない。調整手法は、口縁部外面が横方向のミガキ、体部から脚部の外面が縦方向のミガキ、坏部内面が横方向のミガキを施す。脚部内面は、ヘラケズリを施している。胎土は白色粒・角閃石・赤褐色粒を含み、色調は外面が淡黄褐色、内面が暗橙褐色を呈する。残存率は、坏部脚部とも約1／2である。

19は、弥生時代後期の高坏の脚部と思われるものである。脚端部径は10.0cmを測り、脚部上半を欠失している。直線的に開き、器肉は厚くしっかりしている。成形方法は、幅1cm位の粘土紐による輪積み成形である。調整手法は、外面が縦方向のミガキ、内面はヘラケズリを施す。胎土は片岩粒と白色粒を含み、色調は内外面とも淡茶褐色を呈する。残存率は、脚部下半のみである。

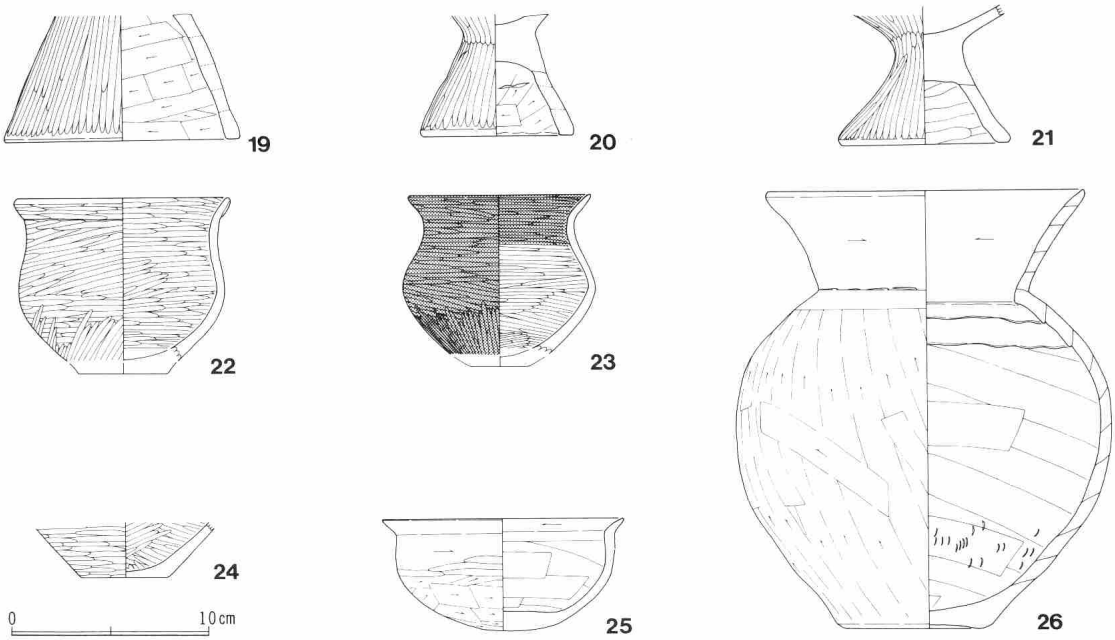
20は、弥生時代後期樽式の小形台付鉢の台部と思われるものである。台部は直線的に開き、台端部径は7.8cmを測る。成形方法は、幅1cm位の粘土紐による輪積み成形で、台部は粘土紐3帯によって作られている。調整手法は、外面は指によるナデ整形の後、縦方向の雑なミガキを加えるが、内面はケズリのような強いヘラナデである。胎土は白色粒・片岩粒・赤褐色粒を含み、色調は外面は淡褐色、内面は暗茶褐色を呈する。残存率は、台部のみである。

21は、弥生時代後期樽式の小形台付鉢の台部と思われるものである。台部はやや外反ぎみに開き、台端部径は8.8cmを測る。成形方法は、台部内面の調整から粘土紐巻き上げ成形の可能性が高いと考えられる。調整手法は、外面は縦方向のミガキ、内面は断続的な螺旋状のユビナデを施す。胎土は片岩粒・白色粒・絹雲母・赤褐色粒を含み、色調は内外面とも淡茶褐色を呈する。台部外面には黒斑が見られる。残存率は、台部のみである。

22は、弥生時代後期樽式の小形鉢の破片である。口縁部径は推定で11.0cm、残存高は8.3cmを測る。底部を欠失するが、台が付く可能性もある。口縁部は緩やかに外反し、外面に粘土紐を貼り付けて複合口縁を呈している。頚部は、胴部との境が不明瞭でやや立ちぎみになっている。胴部は、あまり張らず、最大径をやや下位に有する。成形方法は、破片のためよく解らないが、粘土紐積み上げ成形と思われる。調整手法は、内外面とも横方向の丁寧なミガキを施している。胎土は片岩粒と白色粒を含み、色調は内外面とも明茶褐色であるが、内面下半は黒褐色を呈している。残存率は、約1／4程度である。

23は、弥生時代後期樽式の小形鉢である。口縁部径は推定で9.2cm、残存高は8.1cmを測る。底部を欠失するが、台が付く可能性もある。口縁部は直線的に外傾し、頚部は緩やかに外反する。胴部はやや張り、最大径を中位に有する。成形方法は、よく観察できないが、粘土紐積み上げ成形と思われる。調整手法は、内外面とも細かく丁寧なミガキ調整を施す。外面と口縁部内面には、赤色塗彩が施されている。胎土は白色粒と赤褐色粒を含み、色調は内外面とも明茶褐色で、塗彩部分は暗赤褐色、内面胴部下半は暗褐色を呈している。残存率は、約1／2である。

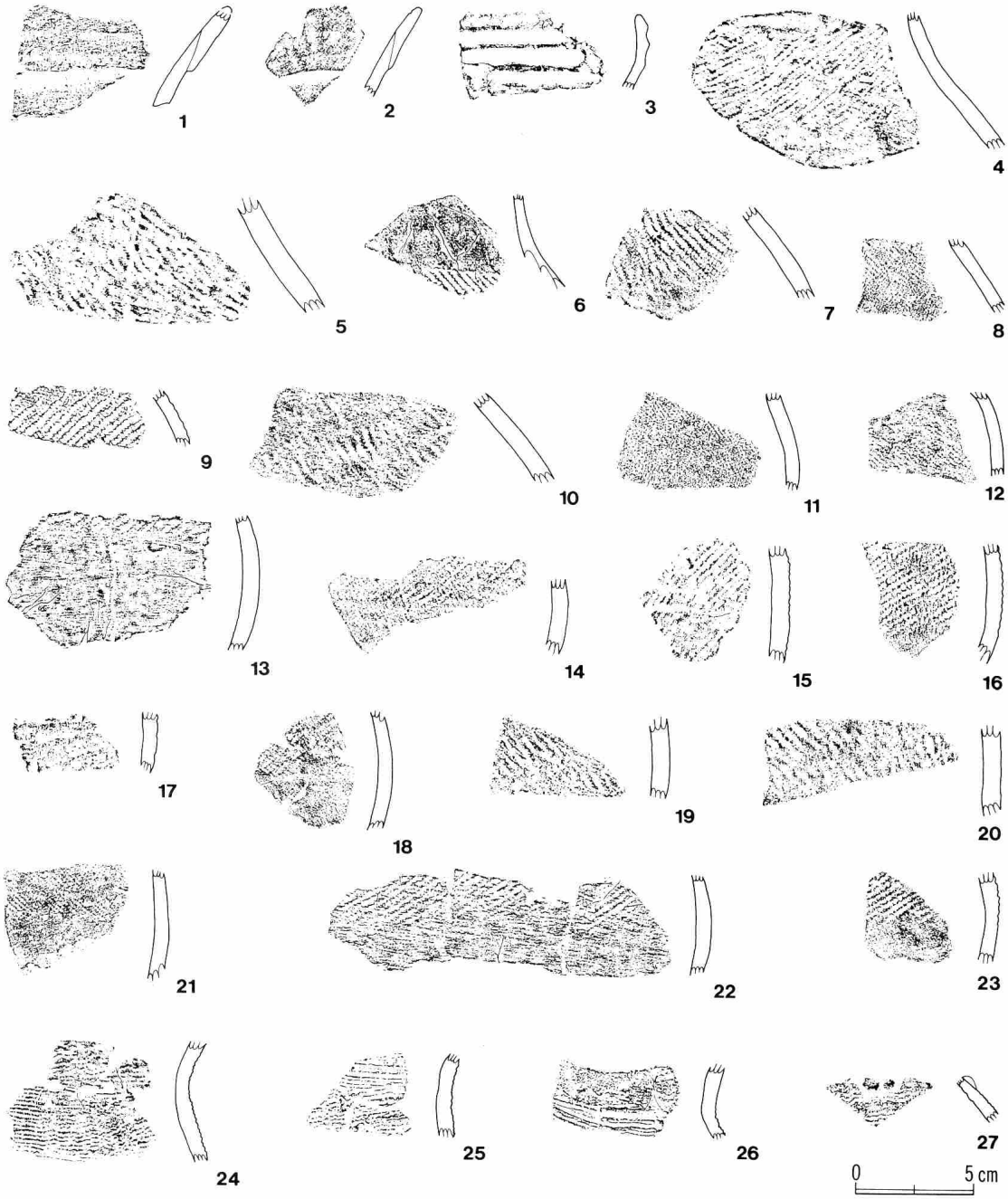
24は、弥生時代後期の小形鉢の底部と思われるものである。底部径は4.5cmを測り、器肉の薄い平底を呈している。成形方法は、粘土紐積み上げ成形と思われ、内外面とも丁寧な横方向のミガキ調整を施す。胎土は白色粒と赤褐色粒を含み、色調は内外面とも明茶褐色を呈する。残存率は、底部の約1／2である。



第35図　第２号方形周溝墓出土土器(3)

25は、古墳時代中期和泉式の坏である。口縁部径は12.3cm、器高は5.7cmを測る。口縁部は短く外側に開き、口唇部は薄く尖っている。体部は丸底を呈すが、底部内面は平坦で他の部分より器肉が厚くなっている。おそらく、当初平底に作ったものをケズリとって丸底にしたためと推測される。成形方法は、明瞭な成形痕を残さないため、不明である。調整手法は、体部外面上半から口縁部内外面にかけて左回りに強いヨコナデを施した後、体部外面下半をヘラケズリし、最後に丁寧なナデを加えている。内面は、体部ヘラナデ、底部はユビナデを施している。胎土は小石・片岩粒・白色粒を含み、色調は外面は暗茶褐色、内面は茶褐色を呈する。残存率は、ほぼ完形である。

26は、古墳時代前期末から中期前半頃の壺である。口縁部径は16.2cm、底部径は8.0cm、器高は22.3cmを測る。口縁部は、緩やかに外反し、口唇部はやや内反り状になっている。頸部は、胴部との境が明確で、鋭い「く」の字状を呈する。胴部は、丸く張り、最大径を中位に有する。底部は、中央がいくらか窪む平底を呈し、胴部よりやや突出している。成形方法は、幅1.5cm位の粘土紐による積み上げ成形と思われる。頸部下に粘土紐の輪積み痕が２帯見られるが、これは内面のヘラナデ調整痕が輪積み痕の下に入っていることから、胴部調整後に積み上げられたことが判断できる。おそらく、口縁部と胴部が分割成形され、その接合のために継ぎたされたものと思われる。調整手法は、口縁部内外面は、左回りの強いヨコナデを施す。胴部外面は、縦方向のケズリの後、木口状工具による丁寧なナデを加え、胴部内面は、ヘラナデを施している。胎土は、小石・片岩粒・白色粒を含むが、胴部上半と下半ではやや異なる。上半は粒子が細かく緻密でしっかりしているのに対し、下半は小石を顕著に含むやや軟質の胎土である。色調は、外面は暗橙褐色、内面は淡褐色を呈する。胴部外面には黒斑があり、胴部内面下半には多数の爪痕が残っている。残存率は、全体の約2/3程度である。



第36図　第２号方形周溝墓出土土器(4)

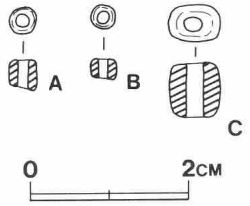
第36図の土器破片拓影図は、すべて弥生時代後期のもので、No１～23が吉ケ谷式の破片、No24～27が樽式の破片である。No１とNo２は、壺の口縁部破片で、粘土紐の下端を外側に残すことにより複合口縁を呈している。口縁部に文様は施文されていないが、No２は内外面とも丁寧にミガキ調整され、赤色塗彩されている。No３は、高坏の口縁部破片である。外面に輪積み装飾に似た段が３段見られるが、輪積みによるものかは不明である。内外面とも丁寧にミガキ調整されている。No４～23は、壺と甕の破片である。文様は、器表面の荒れているものが多いため、原体の明細は良く観察

できないが、ほとんどが単節縄文による横位施文と思われる。No 9 とNo21は、1条毎に押圧の深い条と浅い条の繰り返しが見られることや、1条毎に節の方向がやや異なる条が繰り返していることから、多条によるものと考えられる。No 6 ～ 8 ・11・12・21は、それぞれ施文部外に赤色塗彩が施されている。同一個体の破片と思われるものは、それぞれNo 5 ・19・20の個体、No 8 ・11・12・21の個体、No13・14・22の個体、No15・16の個体である。

No24～27は、いずれも櫛描文が施文されている壺あるいは甕の破片で、No24～26が頸部、No27が胴部上半の破片である。櫛描文は、頸部簾状文と口縁部・胴部に波状文が施文されているが、No26は口縁部が無文になっている。簾状文はすべて2連止めである。いずれも横位右回りで、簾状文の後に波状文が施文されている。No27には、2個1組の小さな円形浮文が貼り付けられている。いずれも、別個体である。

玉（第37図）

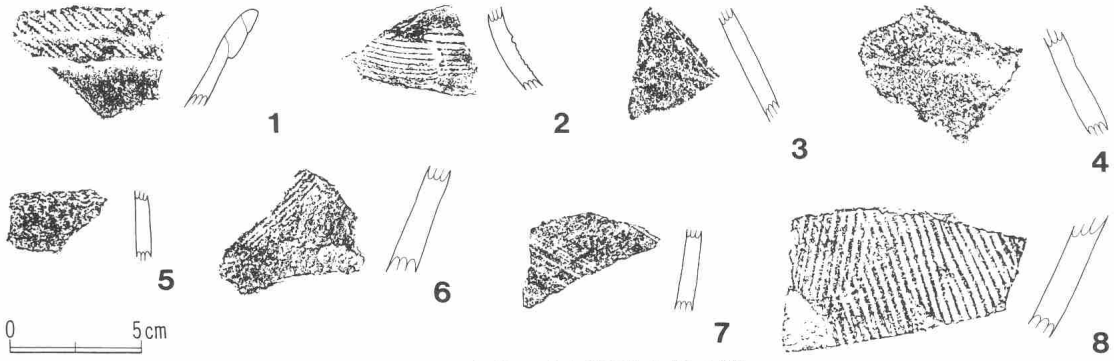
玉は、第2B号方形周溝墓の覆土中より、右図ABCの3点のガラス製小玉が出土している。A・Bは、断面が直径4ミリの正円形で、穿孔径が1ミリ弱を呈する同一の管玉状のものから切断されて作られたと思われるもので、長さはAが4ミリ、Bが2.5ミリある。色調は奇麗な水色である。Cは、断面が直径4.5～6ミリの四角形に近い楕円形で、穿孔も楕円形を呈するもので、長さは7ミリを測る。色調は濃紺色である。



第37図　第2B号方形周溝墓出土ガラス小玉

《表採土器》（第38図）

第38図に図示した土器片は、第4図の紡錘車と共に本遺跡から表採したもので、No 1 ～ 7 が弥生土器の破片、No 8 は須恵器大甕の破片である。弥生土器は、No 1 が口縁部外面の輪積み装飾部に縄文（RL）を横位施文し、内外面ともミガキ調整を施す吉ケ谷式の壺、No 2 ～ 7 が篦描鋸歯文（No 3）と櫛描文を施す壺と甕である。このうち後者のものには、胴上半部に細い篦描鋸歯文をもつもの（No 3）や、胴下半部に櫛歯状工具による間隔をおいた斜方向の懸垂文か格子目文をもつもの（No 6 ・ 7）がある。これらの内面調整はいずれもハケ調整であり、本遺跡のB地点第2B号方形周溝墓出土の樽式土器よりも古い特徴が見られ、特にNo 6 とNo 7 は中期に遡る可能性がある。



第38図　塩谷下大塚遺跡表採土器

第Ⅵ章　出土土器の編年的位置の検討

今回の塩谷下大塚遺跡B地点の調査では、前述のように弥生時代後期の方形周溝墓が検出され、その周溝覆土中から吉ケ谷式土器（注１）と樽式土器が出土している。出土状態からは、方形周溝墓という遺構の性格もあって良好な一括資料とは言えないが、ここでは出土土器の主体を占める吉ケ谷式土器を中心にして、器種毎の特徴と系統上の位置を探り、その編年的位置を検討したい。

出土した吉ケ谷式土器の器種には、壺(№１～５)・甕(№10～12)・高坏(№13.16.17)がある。このほか№22や23のような無文の小形鉢も出土しているが、現在のところ吉ケ谷式土器では坏形のもの以外はあまり例を見ないため、これらについては樽式土器のものとしてとらえておきたい(注２)。

壺は、法量差により大形（№５）中形（№１）小形（№４）の３タイプが見られ、その構成や形態は標式遺跡である東松山市吉ケ谷遺跡の住居跡出土土器（金井塚1965）とよく似ている。いずれも胴部文様帯に磨消しによる無文帯を有し、２～３帯の帯縄文を描出している。

口縁部形態の分かるものでは、幅広の複合口縁状を呈するもの（№１）と輪積み装飾による複数の段を有するもの（№２）の二者がある。前者は、現在のところ新しい段階の赤井戸式に多く見られ、小島純一氏の壺Bの組列（小島1983）に該当する（注３）。この壺Bは、南関東地方の「２重口縁b類」（関根1974）や「幅広複合口縁」（福田1981）と呼ばれる口縁部形態に類似するが、それらに見られる口縁部形態の変化と同様に、幅広の複合口縁部が頸部より方向を変えて直立し、下端に刻みを有する形態から、複合口縁部が頸部の外反と同じ方向に傾き、下端に刻みをもたない形態へ、系統的に変化するものと推測される（注４）。本遺跡例より古い段階に位置付けられるものには、東松山市駒堀遺跡Ｙ５号住居跡出土№７の壺（栗原他1974）や吉ケ谷遺跡出土の中形の壺があり、吉ケ谷遺跡→本遺跡→下道添遺跡第15号住居跡という型式組列が考えられる。また本遺跡例は、新しい段階の類例が多い赤井戸式では、前橋市荒砥前原遺跡５Ｔ２号竪穴状遺構(藤巻他1985)出土のものと同時期かそれよりもやや古い段階に位置付けられよう。

後者は、小島氏の壺Aの組例に該当し、調整手法は柿沼幹夫氏分類のＡ１類(柿沼1982)である。この口縁部形態の壺は、柿沼氏の細別に見られるように時期によってバリエーションがあるが、吉ケ谷式・赤井戸式に最も特徴的なものである。A類では、口縁部外面の輪積装飾部に縄文を施文するもの（柿沼氏Ａ２類)が古い段階に多く、新しくなると無文のもの(柿沼氏Ａ１類)が主体を占める傾向にあるが、両者とも古い段階から新しい段階まで存在しており、現状では口縁部形態だけではその型式組列上の位置を明らかにすることはできない。

№３は、口縁部下に耳状把手の付く、いわゆる「耳付土器」（柿沼1982）と呼ばれるものである。これは吉ケ谷式に特徴的なものではあるが、一遺跡からの出土数は一個体程度の場合が多く、壺の中では一般的なものとは言えない。耳状把手の孔に紐を通して壺を懸垂したり、蓋を結び付けて密閉するといった機能的差異とともに、他の一般的な壺とは使用目的の差異が推測される。類例としては、坂戸市花影遺跡第５号方形周溝墓（谷井他1974）、東松山市杉の木遺跡（埼玉県1982）、同駒堀遺跡、鴻巣市登戸新田遺跡第１号方形周溝墓（山崎1983）、横浜市下根遺跡Ｙ２号住居跡（青木他1979）などがあり、現在報告されている資料では壺Aに多く見られる。本遺跡例も基本的には壺Aの口縁部形態に属する（注５）。

甕は、すべて輪積痕を残さず、外面の胴部上半と口唇部に縄文を施し、施文部外は刷毛整形の後丁寧なミガキ調整を施すものである。器形は、口縁部が若干外反するが頸部のくびれは比較的弱く、胴部の張りも弱いもので、滑川村大谷遺跡第４号住居跡（金井塚1973）出土土器に類似している。型式組列としては、吉ケ谷遺跡→本遺跡→駒堀遺跡Ｙ11号住居跡→嵐山町屋田遺跡第21号住居跡（今井他1984）という段階に位置付けられる。

高坏は、いずれも口縁部外面に輪積装飾による段を有するもので、法量差により大形（№13）と小形（№16・17）に分けることができる。大形の№13は、口縁部輪積装飾の手法が柿沼氏のＢ２類であるが、凸帯上には刻みではなく縄文を施文している。この大形のものは、川越市霞ヶ関遺跡１次１区第12号住居跡（埼玉県1982）や駒堀遺跡Ｙ５号住居跡出土のものに、系譜的に連なると考えられるが、新しくなると壺と同様に口縁部輪積装飾のＢ２類は姿を消し、坂戸市附島遺跡Ｙ５号住居跡（加藤1986）や東松山市篭田遺跡第７号住居跡（村田他1982）及び赤井戸式の粕川村堤頭遺跡第16号住居跡（小島1983）に見られるようなＡ１類やＢ１類的なものが主流を占めるようになる。

小形の№17は、坏部が直線的に開き、口縁部輪積装飾の手法が№３の壺と同じく柿沼氏のＡ１類のものであるが、輪積装飾の粘土紐の幅が不揃いで雑な感じを受ける。現在のところ類例が少なく、その系統的位置を明らかにすることはできない。№16の高坏は、口縁部輪積装飾の形態が不明瞭であるが、段の上下に沈線状のナゾリを施すことによって段を強調する手法であれば、№２の壺と同一の手法として理解できる（注６）。

以上のように、本遺跡の方形周溝墓から出土した吉ケ谷式土器について、器種毎にその型式組列上の位置を検討した結果、資料的制約からその位置付けが困難なものもあるが、幅広複合口縁壺（№１）・甕（№10～12）・大形の高坏（№13）が示すように、これらの多くは型式的な時間幅をもたず、概して近時した時期のものとしてとらえることが可能と考えられ、極めて一括性の高い資料として評価できると思われる。本遺跡出土の土器を、吉ケ谷式における柿沼氏や石岡氏の編年（柿沼1982、石岡1982）と赤井戸式における小島氏の編年（小島1983）にそれぞれ対比した場合、柿沼氏の吉ケ谷Ⅱｂ式の前半に、石岡氏の吉ケ谷Ⅱ式を３細分した場合のｂ段階に、小島氏の赤井戸式第Ⅱ期の初頭に位置付けられ、弥生時代後期後半でも中葉に近い時期とすることができよう。

また、これらの吉ケ谷式土器と伴出した樽式土器については、その特徴から後期後半に位置付けられるものであるが、№７の甕にみられるような胴部が中位で算盤玉状に張る形態（注７）や、№９のように頸部簾状文が２連止ではあるが、簾状文の単位数が多く等間隔止簾状文に近い手法をもつものがあるなど、後期後半でも古い特徴が認められる。当地方の櫛描文土器を扱った柿沼氏の編年（柿沼1987）では、その後期Ⅲ段階に該当し、児玉町真鏡寺後遺跡Ａ地点第12号住居跡（注８）よりもやや古い段階に位置付けられるものと思われ、前述の吉ケ谷式土器の時期とも矛盾しないと考えられる。

（注１）　これらの土器には、埼玉県の比企地方を中心とする「吉ケ谷式」と、群馬県の赤城山南麓地域を中心とする「赤井戸式」の、２つの型式名があるのは周知のとおりである。これらは単に地域的呼称として慣習的に使用されているのが現状であり、必ずしも別々の型式

名を使わなければならないような型式差や地域差が明確にされているわけではない。そのような地域的呼称という意味では、児玉地方は両地域の中間に位置し、どちらの名称でもよいと思われるが、本書では単に便宜的・慣習的という程度の意味で吉ケ谷式の型式名を使用しており、決して本遺跡出土のものが吉ケ谷式であって赤井戸式ではないという意味で使用しているわけではない。

（注２）　類例は、僅かではあるが高崎市新保遺跡（佐藤1988）同引間遺跡（神戸他1979）や佐久市北西ノ久保遺跡（小山1987）などに見られる。これらの樽式・箱清水式土器では、台付や有文のものが主体であるが、小形鉢は安定した器種として存在する。

（注３）　吉ケ谷式の地域でも、東松山市下道添遺跡第15号住居跡（坂野1987）で吉ケ谷Ⅲ式以降のものが出土しており、今後この地域でもこの種の類例の増加が期待できるかもしれない。

（注４）　この吉ケ谷式・赤井戸式と南関東地方の幅広複合口縁部の形態を比較した場合、文様の種類は別として、吉ケ谷式・赤井戸式のものは複合口縁部の口唇部に明確な面をもたず、口唇部に文様を施文する例が極めて少ないという差異が見られる。また成形手法においても、吉ケ谷式・赤井戸式には、本遺跡例のように複合口縁部が薄く、口縁部の外側に粘土を貼り足して複合口縁状にするものも存在する。南関東地方のものに比べて吉ケ谷式・赤井戸式の比較資料が圧倒的に少ないという難点もあるが、一応両者の複合口縁の形態は類似するが、別系統のものと考えられよう。

（注５）　児玉地方では本遺跡例のほかに、未発表資料であるが、生野山遺跡78号墳墳丘下第２号住居跡（埼玉県1982）に、壺Ａの耳付土器の類例がある。筆者実見。

（注６）　吉ケ谷式あるいは赤井戸式の高坏には、本遺跡からは出土していないが、このほかに柿沼氏がＢ類とした口縁部に輪積装飾をもたない素口縁のものが存在する。この高坏は、吉ケ谷Ⅲ式以降になると、口縁部に輪積装飾をもつものに変わって、高坏の主体を占めるようになる。しかしこの中で、吉ケ谷遺跡出土の口唇部が短く直立もしくは内弯ぎみに立つ形態のものは、石岡氏の指摘されるとおり（石岡1982）、樽式における高坏の一形態として存在するものである。現在のところ吉ケ谷遺跡以外に類例が少ないため、吉ケ谷式として存在するのかあるいは樽式そのものなのか判断しきれないが、坏形・椀形の小形鉢の共通性とともに櫛描文系土器群との関係が窺える資料である。

（注７）　このような胴部の形態は、後期前半の樽式の壺に特徴的な形態であり、おそらくその系譜を引くものと思われる。本遺跡例は、壺か甕か判断しがたい形態を呈しているが、類例には高崎市引間遺跡第10号住居跡出土土器などがある。本遺跡例の方が頸部簾状文が２連止であり、内外面の調整に刷毛整形の後丁寧なミガキを施すなど、引間遺跡のものよりも新しい特徴を備えている。

（注８）　児玉町教育委員会が、1982年に発掘調査を実施し、樽式の住居跡が２軒検出されている（鈴木1987・1988）。真鏡寺後遺跡は、その後のＣ・Ｄ地点の調査で、弥生時代後期後半の樽式の住居跡がさらに４軒検出されており、それらより樽式土器の良好な資料が出土している。

第Ⅶ章　児玉地方の吉ケ谷式土器について

児玉地方の弥生時代後期の土器については、樽式土器・吉ケ谷式土器・二軒屋式土器の存在が知られており（坂本1984）、「いくつかの系統が錯綜する」（柿沼1978）複雑な土器分布の様相が指摘されている。しかし、児玉地方におけるこれら３つの土器型式の具体的な変遷や相互の関係を知るには、その後の発掘調査の増加にもかかわらず、良好な一括資料の調査例が少なく、未だ資料の蓄積が充分であるとは言いがたい。また、多くの研究者が指摘されるように、当地方の該期資料は正式報告の遅れているものが多く、それが当地方の該期の具体的な検討を困難にしている要因の一つであることも、率直に認めなければならない。

このような当地方の資料的状況のなかで、本遺跡からも主体的に出土している吉ケ谷式土器については、最近の弥生時代後期終末～古墳時代前期における遺跡の調査例の増加に伴い、吉ケ谷式に系譜をもつと考えられる新しい段階の資料が断片的ながら増加しており、その様相の一端が次第に明らかになりつつある。ここでは、これらの断片的な資料をてがかりにして、児玉地方の吉ケ谷式土器について若干検討してみたい。

第１節　吉ケ谷式土器出土遺跡の概要

前述のように、当地方の該期の遺跡は未報告のものが多いため、まず当地方の吉ケ谷式土器を出土した遺跡とそれに関係する遺跡について概要を述べ、合わせて関係資料の紹介を行うことにする。

児玉町生野山遺跡（菅谷・駒宮1973、埼玉県1982）　女堀川中流域右岸の生野山残丘上に位置する。1972年にゴルフ場建設に伴って発掘調査されたが、古墳群の調査が主体であったため、それ以外のものについては明らかではない。古墳群の調査に伴って、墳丘下より吉ケ谷式の住居跡が２軒検出され、そのうちの78号墳墳丘下第２号住居跡より良好な一括資料が出土している。この住居跡の資料（第40図１～４）は一部公表されているが（坂本1974）、このほかに胴部下半を欠く甕が２個体と口縁部に４段の輪積装飾と耳状把手の付く大形の壺も出土している。また本遺跡では、これらの吉ケ谷式の住居跡とは異なった地点より、樽式の住居跡４軒が検出されている。

児玉町長沖久保遺跡（恋河内1984）　女堀川上流域（旧赤根川）に近い小支谷に面する児玉丘陵の支丘上に位置する。長沖古墳群内に所在する古墳時代前期を主体とする遺跡で、1983年に道路建設に伴って発掘調査され、住居跡が３軒検出されている。このうちの第３号住居跡より、小形の台付甕や高坏（第40図７）とともに吉ケ谷式に系譜をもつと考えられる幅広複合口縁の壺が一個体（第40図８）出土している。報告（恋河内1984）では、台付甕の存在から他の２軒の住居跡と同じ古墳時代前期のものと考えていたが、伴出した高坏の形態より、弥生時代後期終末にさかのぼる可能性もある。

児玉町飯玉東遺跡　女堀川中流域右岸の大久保山残丘下の台地上に位置する。関越自動車道の敷地内で樽式の住居跡が１軒調査されているが（駒宮他1979）、それに隣接するＢ地点の調査で樽式の土壙２基とともに吉ケ谷式土器の破片を主体的に出土した土壙が１基検出されている。

児玉町真鏡寺後遺跡　女堀川上流域（旧赤根川）の小支谷に面する児玉丘陵の支丘上に位置する。Ａ（鈴木1987・1988）・Ｃ・Ｄ地点より樽式の住居跡が合計６軒検出されているが、それらの住居

跡からは吉ケ谷式土器の破片も少量出土している。また、F地点では弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の住居跡が3軒検出されており、このうちのF地点第2号住居跡より、口縁部に6段の輪積装飾をもつ無文の甕（第41図12）と、口縁部に3段の輪積装飾をもち胴部上半に櫛描文を施す小形の甕（第41図13）が、小形器台の器受部かもしくは小形高坏の坏部と思われるものと伴出している。

児玉町後張遺跡　女堀川中流域右岸の自然堤防上に位置する。古墳時代の大集落として著名な遺跡であるが、関越自動車道に隣接するC地点の大溝より、大量の五領式・和泉式土器に混じって、吉ケ谷式土器に系譜をもつと考えられる壺（第41図9）が1個体出土している。また、C地点で検出された五領期の住居跡では、口縁部に2段の輪積装飾をもつ甕がいくつか出土している。

児玉町雷電下遺跡（駒宮他1979）　女堀川中流域右岸の大久保山残丘下の台地上に位置する。五領期の第25号住居跡より、口縁部の4段の輪積装飾に縦方向のナデを加える甕（第42図16）と、口縁部に3段の輪積装飾をもつ無文の甕（第42図17）が出土している。

児玉町念仏塚遺跡　女堀川上流域（旧赤根川）の小支谷に面する児玉丘陵の支丘上に位置する。1985年に農道改良に伴って発掘調査が実施され、古墳時代前期から後期の住居跡が11軒検出されている。このうちの第8号住居跡より、S字状口縁甕・器台・小形丸底壺に伴って、口縁部に輪積みの痕跡を残し胴部と口縁部内面に雑なミガキを施す無文の長胴を呈する甕（第42図18）が1個体出土している。

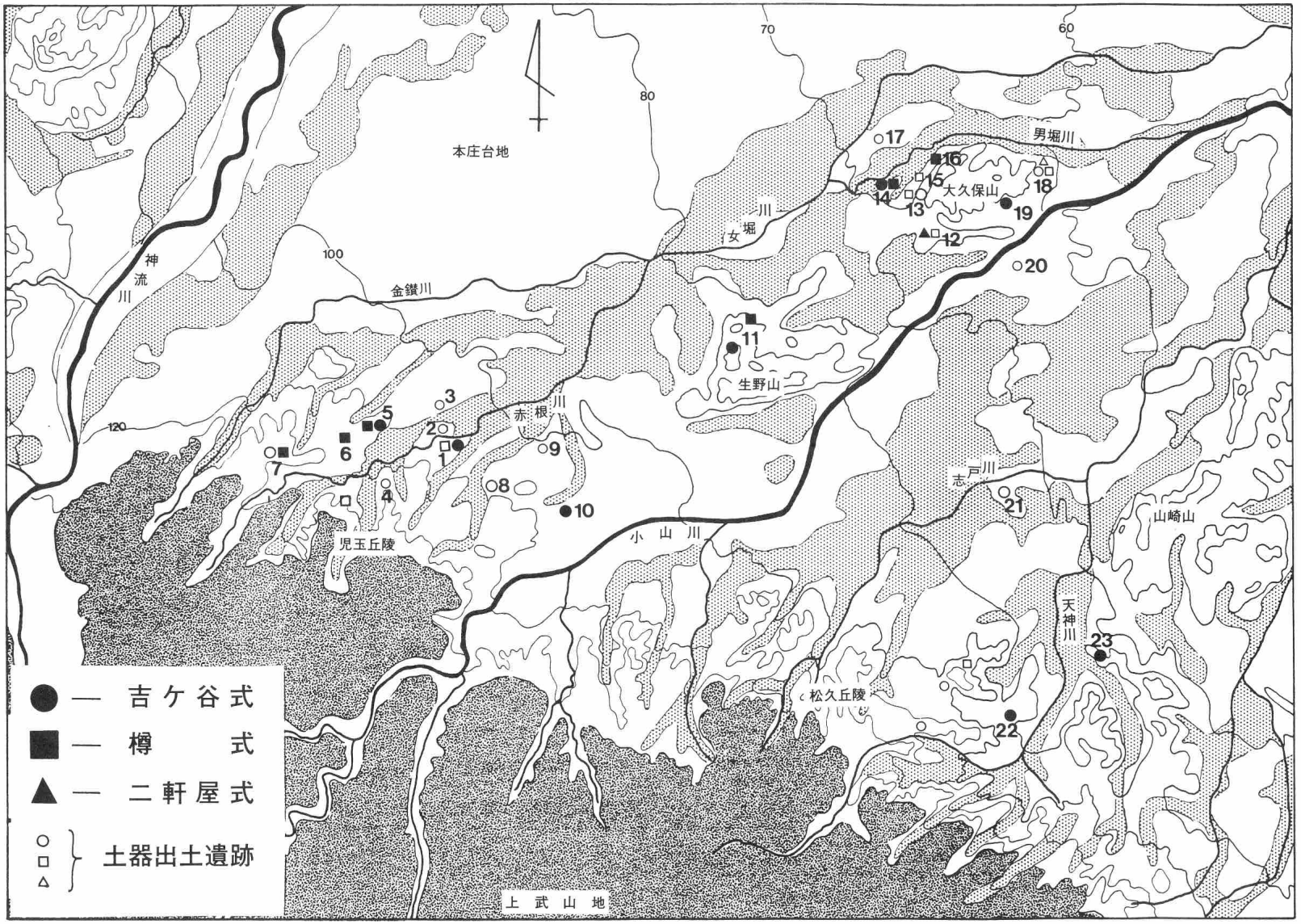
美里町神明ヶ谷戸遺跡（坂本1980）　天神川上流域の小支谷に面する松久丘陵の支丘上に位置する。弥生時代中期の環濠集落として有名な遺跡であるが、後期吉ケ谷式の住居跡3軒と土壙2基が検出されている。出土した吉ケ谷式土器については、未発表のため不明である。

美里町村後遺跡（細田他1984）　小山川右岸の自然堤防上に位置する弥生時代中期から平安時代に渡る集落跡である。調査区東側の五領期の住居跡群の近くより、口縁部から胴部上半にかけて縄文を施す比較的大形の甕（第40図6）が1個体単独で出土している。

美里町志渡川遺跡（岡本1982）　志戸川中流域右岸の微高地上に位置する。五領期の良好な一括資料が検出された第3号住居跡より、東海系・北陸系・畿内系の土器とともに、口縁部に3～4段の輪積装飾をもち、口唇部と口縁部から胴部上半に縄文を施す台付甕（第41図14・15）が2個体出土している。

本庄市大久保山遺跡（荒川他1986、本庄市1986）　女堀川中流域右岸の大久保山残丘内の小支谷に面した丘陵上の南側斜面に位置する。1982年から早稲田大学が学校施設の拡張に伴って調査を実施し、そのⅢB・ⅣA地区より吉ケ谷式の住居跡が6軒検出されている。このうちの第9号住居跡からは、胴部上半に明瞭な13段の輪積装飾をもちその上に縄文を施す甕と、脚部に円孔をもつ素口縁の高坏が出土している。また、本遺跡では樽式土器の伴出も認められるという。

神川町前組羽根倉遺跡（柿沼他1986）　女堀川上流域（旧赤根川）の小支谷に面する児玉丘陵の支丘上に位置する。埼玉県立博物館の学術調査により、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の樽式系の土器を主体とする住居跡が3軒検出されている。このうちの第3号住居跡から、樽式系の土器や器台とともに、口縁部に4段の輪積装飾をもつ無文の甕（第41図11）と輪積装飾に縄文を施す甕（第41図10）が出土している。

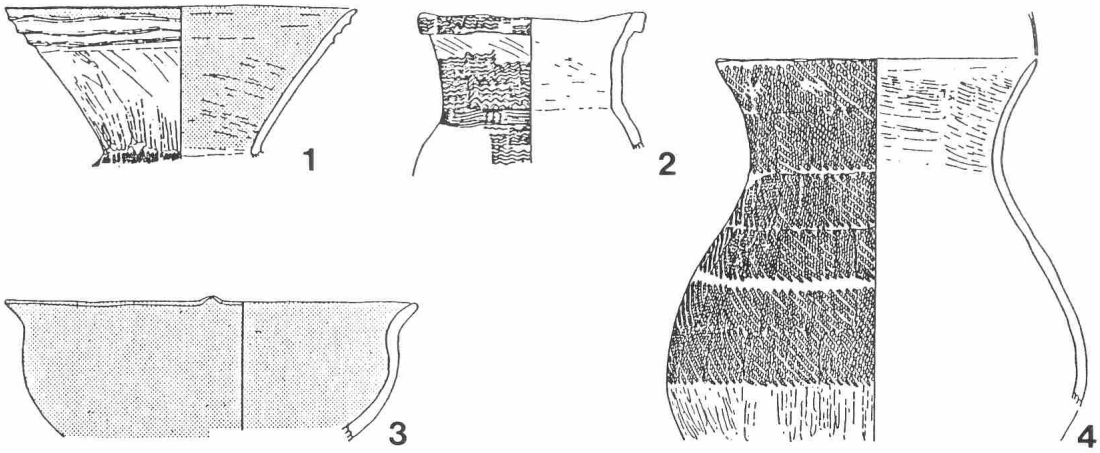


第39図　児玉地方の弥生時代後期遺跡と関連遺跡

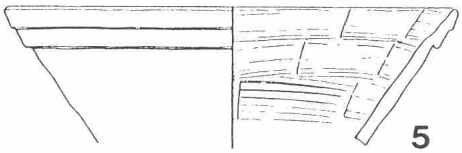
このほかに、児玉町ミカド遺跡（坂本・鈴木1981）、横尾後遺跡、飯倉古墳群、西浦遺跡や美里町の丘陵部（山川他1981）などで吉ケ谷式土器の破片が、本庄市宥勝寺北裏遺跡（金子他1980）では吉ケ谷式・樽式・二軒屋式土器の破片が出土している。

第２表　児玉地方における弥生時代後期遺跡と関連遺跡一覧表

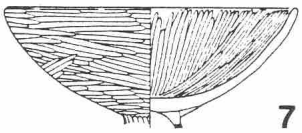
No.	遺跡名	所在地	検出遺構と出土土器	備考
1	塩谷下大塚	児玉町	弥生後期方形周溝墓（吉ケ谷式・樽式） 古墳前期方形周溝墓（吉ケ谷式系）	本報告
2	ミカド	〃	吉ケ谷式土器片	坂本・鈴木(1981)
3	横尾後	〃	〃	1984年に調査
4	飯倉古墳群	〃	〃	表採（第２図）
5	真鏡寺後	〃	弥生後期住居跡（樽式６軒） 古墳前期住居跡（吉ケ谷式系・樽式系）	鈴木(1987・1988)
6	下原北	〃	弥生後期住居跡（樽式２軒）	1982年に調査
7	前組羽根倉	神川町	弥生後期住居跡（樽式２軒） 古墳前期住居跡（樽式系・吉ケ谷式系）	柿沼他(1986)
8	念仏塚	児玉町	古墳前期住居跡（吉ケ谷式系）	1985年に調査
9	西浦	〃	吉ケ谷式土器片	1982年に調査
10	長沖久保	〃	弥生後期住居跡（吉ケ谷式１軒）	恋河内(1984)
11	生野山	〃	弥生後期住居跡（吉ケ谷式２軒・樽式４軒）	埼玉県(1982)
12	塚本山	美里町	弥生後期住居跡（二軒屋式１軒） 古墳前期方形周溝墓（樽式）	増田他(1977)
13	雷電下	児玉町	古墳前期住居跡（吉ケ谷式系） 樽式土器片	駒宮他(1979) 恋河内(1990)
14	飯玉東	〃	弥生後期住居跡（樽式１軒） 土壙（樽式２・吉ケ谷式１）	駒宮他(1979)
15	根田	〃	樽式土器片	恋河内(1990)
16	山根	本庄市	弥生後期住居跡（樽式１軒）	増田一裕氏の御教示
17	後張	児玉町	吉ケ谷式土器	1985年に調査
18	宥勝寺北裏	本庄市	吉ケ谷式土器片・樽式土器片・二軒屋式土器片	金子他(1980)
19	大久保山	〃	弥生後期住居跡（吉ケ谷式６軒）	荒川他(1986)
20	村後	美里町	吉ケ谷式土器	細田他(1984)
21	志渡川	〃	古墳前期住居跡（吉ケ谷式系）	岡本(1982)
22	神明ケ谷戸	〃	弥生後期住居跡（吉ケ谷式３軒）	坂本(1980)
23	如来堂C	〃	弥生後期住居跡（吉ケ谷式？１軒）	増田他(1980)

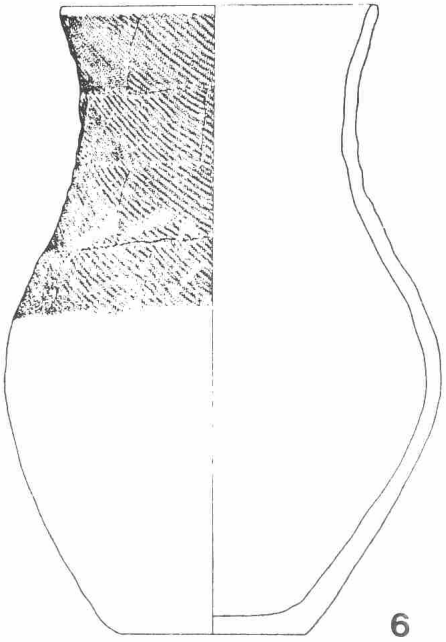


児玉町生野山遺跡78号墳墳丘下第２号住居跡

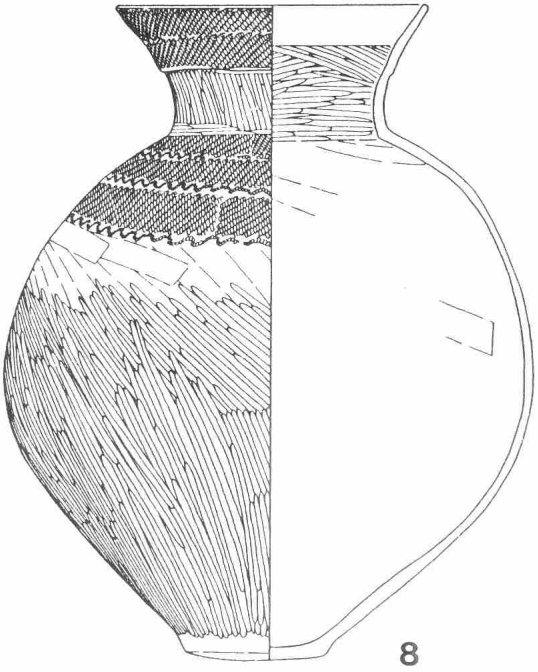


本庄市宥勝寺北裏遺跡



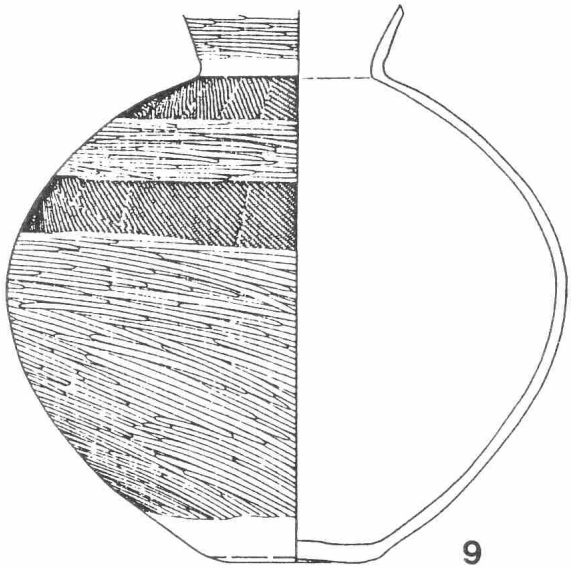


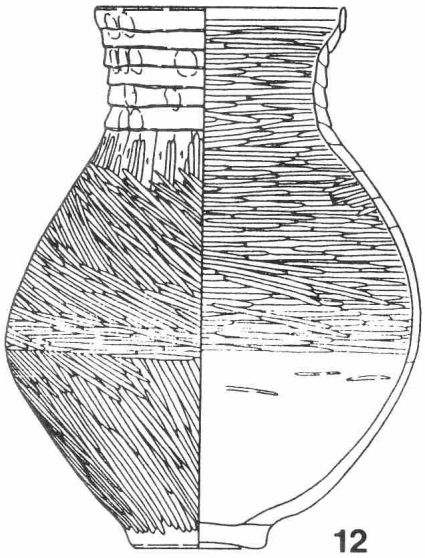
美里町村後遺跡



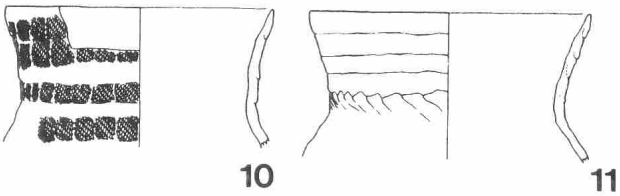
児玉町長沖久保遺跡第３号住居跡

第40図　児玉地方の吉ケ谷式関連土器(1)

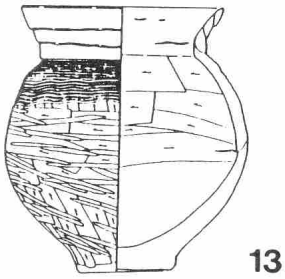




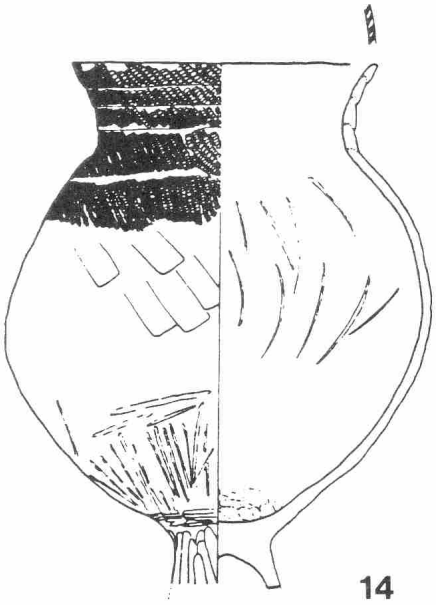
児玉町後張遺跡Ｃ地点

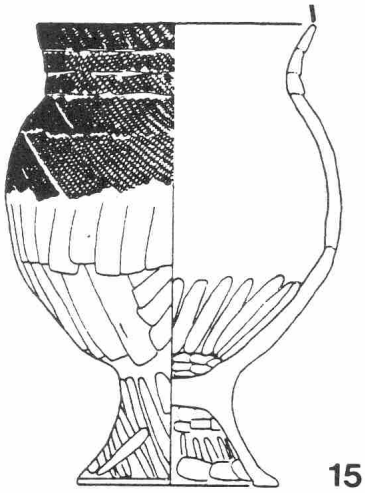


神川町前組羽根倉遺跡第３号住居跡



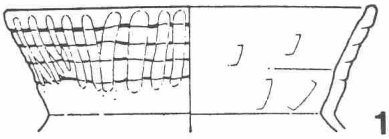
児玉町真鏡寺後遺跡
Ｆ地点第２号住居跡



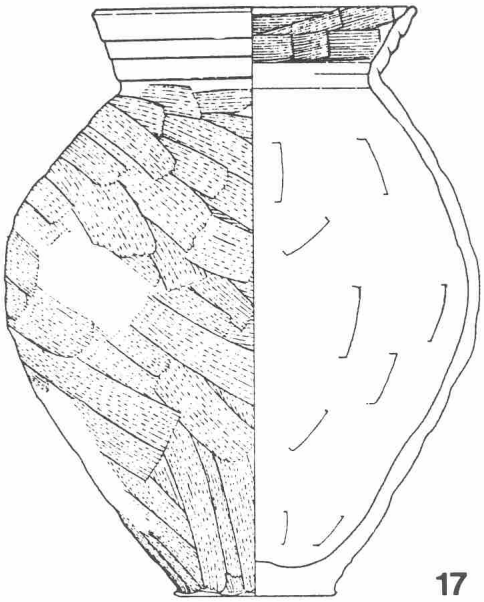


美里町志渡川遺跡第３号住居跡

第41図　児玉地方の吉ケ谷式関連土器(2)

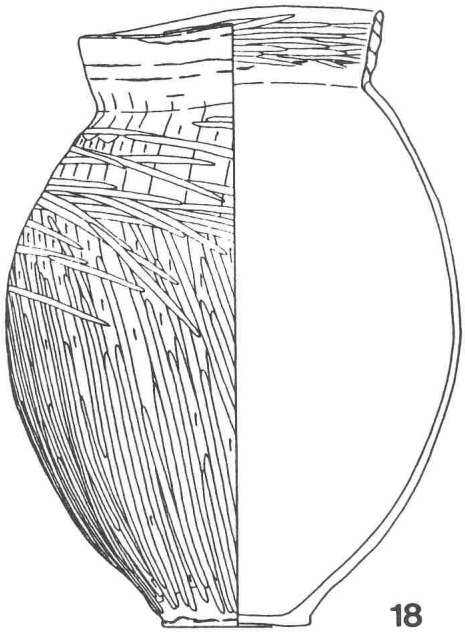


16



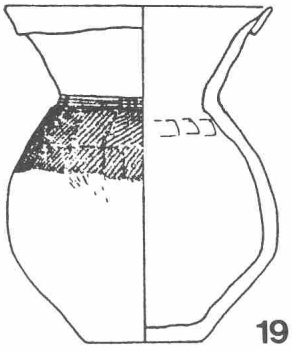
17

児玉町雷電下遺跡第25号住居跡



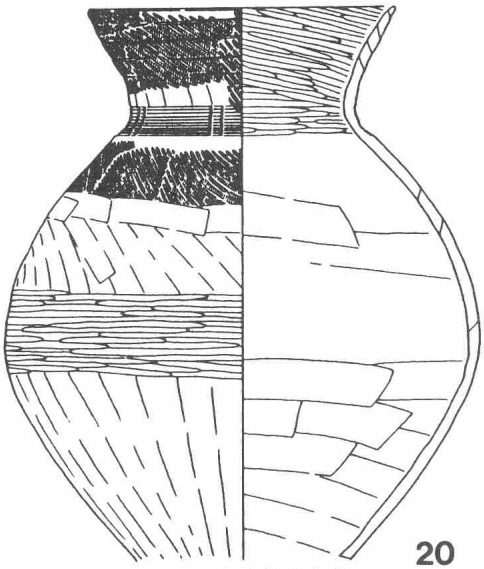
18

児玉町念仏塚遺跡
第８号住居跡



19

美里町塚本山遺跡
第33号方形周溝墓



20

児玉町真鏡寺後遺跡
Ｄ地点第２号住居跡

第42図　児玉地方の吉ケ谷式関連土器(3)

第２節　児玉地方の吉ケ谷式土器の様相

前節で紹介した資料からもわかるように、児玉地方で出土している吉ケ谷式土器は、弥生時代後期後半（柿沼氏の吉ケ谷Ⅱb式以降）から古墳時代前期のものが主体であり、現在のところ弥生時代後期前半に位置付けられるものは未発見である。そのため、当地方における吉ケ谷式土器の出現の様相については、今のところ不明であると言わざるおえない（注１）。後期後半以降の資料についても、現在公表されているものの中で比較的まとまった資料は、本報告の塩谷下大塚遺跡Ｂ地点第２号方形周溝墓出土土器（第33～36図）と生野山遺跡78号墳墳丘下第２号住居跡出土土器（第40図１～４）くらいであり、様式的な検討を行うには資料不足である。しかし、この中で甕に関しては、弥生時代後期後半から古墳時代前期まで、系統的に組列を組むことが可能であり、その系統的変化に当地方の吉ケ谷式土器の特徴を伺い知ることができる。まず後期後半以降の甕の型式組列を明らかにし、それらの甕に共伴する土器群を参考にして編年的位置付けを行い、当地方における吉ケ谷式土器の終末にいたる様相について検討する。

当地方から出土した吉ケ谷式及びその系譜をもつ甕は、外面の輪積装飾の有無によって、甕Ａと甕Ｂの２形態に大別することが可能である。

〈**甕Ａ**〉　外面に輪積装飾をもたず、口唇部及び口縁部から胴部最大径付近にかけて縄文を横位施文し、施文部外にはミガキ調整を施すもので、吉ケ谷式・赤井戸式に最も特徴的な形態とされるものである。明確な分類基準は設定できないが、口縁部の外反度と胴部の張り具合により、相対的に以下の３類に分けることができる。

第１類：　塩谷下大塚遺跡Ｂ地点第２号方形周溝墓出土の甕（第34図10～12）が該当する。口縁部が若干外反し、胴部の張りが比較的弱いものである。

第２類：　村後遺跡出土の甕（第40図６）が該当する。第１類の甕に類似するが、第１類よりも口縁部の外反と胴部の張りがやや強いものである。

第３類：　生野山遺跡78号墳墳丘下第２号住居跡出土の甕（第40図４）が該当する。口縁部の外反と胴部の張りがさらに強いものである。飯倉古墳群表採の甕(第２図)も当類に該当しよう。

〈**甕Ｂ**〉　外面に輪積装飾をもつ比較的大形の長胴を呈するもので、輪積装飾部に縄文を施文するものと無文のものがある。この甕Ｂは、柿沼氏により赤井戸式の地域差の一つとして「甕形土器では頸部から上位の輪積痕が最終段階まで残るものがある」（柿沼1982）と指摘されたものに該当し、小島氏が分類された甕Ｃｂの組列（小島1983）にほぼ一致する。口縁部の外反度と胴部の張り具合及び輪積装飾の範囲により、以下の４類に分別できる。

第１類：　大久保山遺跡ⅢＢ地区第９号住居跡出土の甕（荒川他1986）が該当する。外面の口縁部から胴部上半にかけて13段の輪積装飾をもち、その上に縄文を施すもので、口縁部はやや外反し、胴部の張りは比較的弱い形態を呈している。

第２類：　真鏡寺後遺跡Ｆ地点第２号住居跡出土の甕（第41図12）が該当する。口縁部はやや外反し、胴部の張りがやや強い形態で、長胴ぎみである。外面の輪積装飾は口縁部から頸部の範囲に限られる。前組羽根倉遺跡第３号住居跡出土の甕（第41図10・11）も当類にほぼ該当しよう。

第３類：　雷電下遺跡第25号住居跡出土の甕（第42図16・17）が該当する。口縁部は直線的に強く外反し、胴部の張りもやや強い長胴ぎみの形態で、頸部は明瞭な「く」の字状を呈する。外面の輪積装飾は口縁部に限られる。

第４類：　念仏塚遺跡第８号住居跡出土の甕（第42図18）が該当する。形態は第３類のものに類似するが、口縁部外面の輪積装飾はほとんどその痕跡程度に形骸化している。雷電下遺跡第25号住居跡にも類例があるが（注２）、それは組列上では同じ住居跡から出土している第３類の甕とは区別され、当類に該当しよう。

以上分類した甕Ａの第１～３類と甕Ｂの第１～４類は、それぞれの系列における漸移的変化の段階としてとらえることが可能である。つまり甕Ａの系列では、「胴部の張りと口縁部の外反度が次第に強くなっていく」（柿沼1982、石岡1982）という吉ケ谷式の甕に見られる基本的な変化の方向性に合致し、具体的には柿沼氏の吉ケ谷Ⅱｂ式以降の変化に対応している（注３）。甕Ｂの系列も基本的には甕Ａと同じような器形変化の指向性をもつが、頸部の「く」の字化の進行に伴い口縁部と胴部の境が明確になるにつれ、外面の輪積装飾がその境よりも上の口縁部の範囲に限定されるようになり、同時に輪積装飾部への縄文施文が減少し、無文のものが主体を占めるようになる。また、当地方の甕Ｂの第２類から第４類に示した比較的大形のものに関しては、器形が胴部最大径の上昇とともに長胴化する傾向も指摘できる（注４）。

この当地方における甕Ａと甕Ｂは、それぞれ伴出した土器群の様相により、甕Ａは弥生時代後期後半に、甕Ｂは弥生時代後期末から古墳時代前期に位置付けられ、現状では時間的な前後関係を有するが、これは単純に甕Ａから甕Ｂに変化あるいは交代するものではない。甕Ａは、栃木県大平町伯仲遺跡第６号住居跡（藤田他1984）、群馬県藤岡市竹沼遺跡Ｅ－20号住居跡（綿貫他1978）、同高崎市北宅地遺跡第１号方形周溝墓（渡辺他1983）、同昭和村糸井宮前遺跡第48号住居跡（石守他1985）などの例に見られるように、当地方と地理的にも近い群馬・栃木県地方では古墳時代前期まで残存している。また甕Ｂもその輪積装飾という特徴から、後期前半の吉ケ谷Ⅰ式から後期中葉の吉ケ谷Ⅱａ式との系譜関係が注目され、将来その間を埋める資料が検出される可能性もある（注５）。甕Ａと甕Ｂは、それぞれ系統を異にするものであること、両者とも系統的に変化しながら古墳時代前期でも小形丸底壺を伴う時期まで残存することを、まず確認しておきたい。

このように、甕Ａ１類から甕Ｂ４類に分類した当地方の甕の各段階は、弥生時代後期後半から古墳時代前期中葉頃までの時間幅をもつものであるが、その具体的な編年的位置を考えるにあたって、吉ケ谷式土器と赤井戸式土器における諸氏の編年相互と、当地方の甕Ａと甕Ｂの各類の段階を、大ざっぱに対比してみたのが第３表である。この対比表の中には、各地域の個々の資料を直接比較した場合、同時期として横一線に配列されるものではなく、相対的にやや前後の関係に置かれるものもあるが、概ねこのような対比になるのではないかと考えられる。まず、同じ年に発表された吉ケ谷式土器における柿沼氏と石岡氏の編年の場合は、細かな部分での前後関係の相違が若干はあるものの、吉ケ谷Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式の区分と吉ケ谷式の甕の型式変化についての認識は、両者ともほとんど同じであると言ってよい。ただ、その区分の仕方が明解な分だけ、柿沼氏の細分の方が一般的に使用されているようである。赤井戸式土器における小島氏の編年は、粕川村堤頭遺跡の比較的良好な

第３表　吉ケ谷式・赤井戸式編年対比表

柿沼（1982）		石岡（1982）		小島（1983）		児玉地方	
Ⅰ式	霞ヶ関（Ⅰ） 花影 杉の木	Ⅰ式	花影 霞ケ関	Ⅰ期	峯岸山６住		
Ⅱa式	霞ヶ関（Ⅱ） 駒堀（Ⅰ） 船木	Ⅱ式	吉ケ谷 駒堀５住 大谷 駒堀８住				
Ⅱb式	吉ケ谷 大谷 駒堀（Ⅱ）		屋田 駒堀11住	Ⅱ期	荒砥前原 堤頭６住	A1類 A2類	（＋） 塩谷下大塚Ｂ２号周 村後
Ⅲ式	桜山・新しき村 根平	Ⅲ式	根平２住 根平４住		堤頭８住 堤頭14住	A3類 B1類	生野山78号墳下２住 大久保山ⅢＢ区９住
				Ⅲ期	堤頭25住	B2類 B3類 B4類	真鏡寺後Ｆ地点２住 雷電下25住 念仏塚８住

資料を基軸にして行われたものであり、その壺と甕の器種における形式区分と各組列の変化の方向性は、概ね妥当なものとして評価できよう。ただし、小島氏の細分した赤井戸式の第Ⅰ期～第Ⅲ期を、吉ケ谷式の細分に対比した場合、小島氏は「吉ケ谷式土器は、赤井戸式土器の細分とほとんどすべて対応できるもの」（小島1983）として、赤井戸式の第Ⅰ期～第Ⅲ期を吉ケ谷式のⅠ式～Ⅲ式にそれぞれそのまま対応させているようであるが、資料的に両者を直接対比することが可能な甕によって比較してみると、赤井戸式第Ⅱ期として提示された堤頭遺跡の資料は、吉ケ谷式ではそのⅡ式末～Ⅲ式の段階に位置付けられるものであり、第３表のように赤井戸式第Ⅱ期と吉ケ谷Ⅱ式の対比は一致せず、厳密にはずれが生じるようである。

さて、これらの吉ケ谷式と赤井戸式の細分に当地方の甕Ａ１類から甕Ｂ４類の各段階を対比すると、まず甕Ａの系列では、現在のところ当地方で発掘調査により明らかになっている資料の中で最も古く位置づけられるＡ１類は、第Ⅵ章で検討したように吉ケ谷式ではⅡｂ式の前半に、赤井戸式では第Ⅱ期の古い段階に対比され、弥生時代後期後半でも中葉に近い時期とすることができる（注６）。Ａ２類は、Ａ１類との連続性からみて、吉ケ谷式ではⅡｂ式の後半に、赤井戸式では第Ⅱ期の前半に対比できよう。Ａ３類は、その器形から吉ケ谷Ⅲ式に対比できるが、東松山市根平遺跡第４号住居跡（水村他1980）の段階までは下らず、東松山市篭田遺跡第７号住居跡（村田他1982）のようなⅢ式でも比較的古い段階に止まるものと考えられる。赤井戸式では第Ⅱ期の中頃とすることができようか。次に甕Ｂの系列であるが、これは先の柿沼氏の地域差の指摘や、藤田典夫氏も「紐積痕のみの甕は赤井戸式に特徴的である」（藤田1989）と言われるように、吉ケ谷式の地域では対比できる資料を見いだすことができない。赤井戸式の細分においても小島氏が検討された当時は充分な資料がなかったようで、小島氏が甕の中で分離した甕Ｃｂの組列については、充分な検討がさ

れているとは言えない。そのため、甕Bの各段階の編年的位置は、伴出した異系統の土器群により比較検討する必要があろう。甕Bの組列の中で現在のところ当地方で最も古く位置付けられるB１類は、その該当資料が正式報告されていないため明細は不明であるが、伴出した高坏の形態に注目すると、吉ケ谷Ⅲ式に並行する段階に位置付けられるのではないかと思われる（注７）。ただし、同じⅢ式の段階としたA３類との時間的関係は、現状では明確にすることができない。また、長沖久保遺跡第３号住居跡出土土器も、おそらくこの段階かあるいはB２類の段階に位置するものと思われる。B２類は、真鏡寺後遺跡F地点第２号住居跡や前組羽根倉遺跡第３号住居跡で小形器台や小形高坏と思われるものが伴出しており、いわゆる外来系土器群やその影響を受けたものが見られるようになる時期とすることができよう。現状では、志渡川遺跡第３号住居跡もこの段階に包括されるが、将来的にはこのB２類はさらに細別される可能性もある。一応このB２類の段階を、古墳時代前期初頭に位置付けておきたい。B３類は、良好な一括資料ではないが、器高に対して口径が大きく胴部の張るS字状口縁台付甕や、元屋敷系高坏でもやや新しいタイプのものを伴う時期と考えられ、当地方の古墳時代の土器編年を試みられた坂本和俊氏の前期のⅣ期（坂本1984）に、当地方のS字状口縁台付甕の編年を試みられた山川守男氏のⅢ期（山川1984）にほぼ該当しよう（注８）。B４類は、念仏塚遺跡第８号住居跡より、田口一郎氏（田口1981）や山川氏がS字状口縁台付甕Ⅴ類としたものの系譜に連なるものや、小形器台、小形丸底壺などを伴出しており、確実に小形丸底壺を伴う段階とすることができる。古墳時代前期中葉あるいは後半の古い段階に位置付けられよう。

甕Aと甕Bの各段階の編年的位置を以上のように考え、弥生時代後期と古墳時代前期の境を甕B２類の段階としたが、これは、前述したように甕Aと甕Bの各類は漸移的変化の段階として設定できるため、その型式組列上の画期によるものではなく、各類に伴出する土器群の様相の変化によるものである。また、古墳時代前期に該当する甕B２類～B４類の各段階は、あくまでも吉ケ谷式・赤井戸式の系譜に連なると考えられる甕Bの組列によるものであり、当地方においてこの時期に主体的に存在する、他地域にその出自が求められるいわゆる外来系土器群の検討では、より細かな段階を設定することが可能である。

当地方の吉ケ谷式土器の様相は、小島氏が壺Bとした幅広の複合口縁の壺が弥生時代後期後半から系統的に存在することや、輪積装飾をもつ甕Bが古墳時代前期中葉まで顕著に見られることから、吉ケ谷式土器分布圏では比企・入間地方よりも、赤井戸式と呼ばれる赤城山南麓地域の土器様相に類似していると言える。これは単に吉ケ谷式・赤井戸式の関係だけでなく、当地方には樽式土器も主体的に分布しており、当地方の群馬県地方との関係の強さが伺える（注９）。

この当地方における弥生時代後期の特徴である縄文系の吉ケ谷式土器と櫛描文系の樽式土器というまったくその系譜を異にする土器群が同一地域に併存する現象は、比企・入間地方の吉ケ谷式と岩鼻式の関係に類似するが、当地方では、比企・入間地方で言われるような両者の遺跡立地上の差異（金井塚1978、柿沼1982、注10）はなく、また塩谷下大塚遺跡や生野山遺跡などで認められるように、両者はそれぞれの遺跡において客体的に伴出する場合が多く、当地方の吉ケ谷式土器と樽式土器をそれぞれ主体にもつ集団は、相互に独自性を有しながらも、けっして「人々の行き来や交流が、ほとんどおこなわれなかった」「不交流集団」（大塚1986）ではなかったことが推測される。

これら二つの異系統の土器の特徴が、真鏡寺後遺跡F地点第2号住居跡出土土器（第41図13）のように、それまでの系統性を逸脱して一つの土器に融合した現象（注11）が認められるようになるのが甕B2類の段階であり、その背景にはこの段階から当地方で顕著に認められる外来系土器群の急激な流入とその影響による在地社会の集団関係の動揺が考えられよう。当地方の吉ケ谷式土器は、その中の甕という特定の器種だけが、その後も小形丸底壺が出現する段階まで客体的に残存するが、外来系土器の流入と定着に象徴される当地方における古墳文化の安定に伴って、やがてはその系統も消滅していくのである。

（注1）　この当地方における吉ケ谷式の古い段階のものが未発見であるという資料的状況を積極的に評価し、吉ケ谷式と対比した場合にその新しい段階のものが多い赤井戸式との関係から、当地方の吉ケ谷式土器の出現について、柿沼氏は「吉ケ谷式土器は古い段階では入間・比企地方を中心に分布していたが、中頃から後半になって次第に北上し、大里・児玉地方に広がり、やがては利根川を越えて太田、館林、桐生方面に達し赤井戸式土器になったのではなかろうか」（柿沼1980）と「吉ケ谷式土器の分布圏拡大によって赤井戸式土器が発生した」（柿沼1982）という予測的見解から若干触れられている。これは、当時吉ケ谷式土器の出自を南関東の宮ノ台式土器に求められていたことにも起因するが、現在ではその出自を熊谷市池上遺跡（中島他1984）で須和田式土器に伴って出土した甕に求められるようであり（富田・中村1986）、また、赤井戸式においても吉ケ谷式の比較的古い段階に位置付けられそうなものもあり（例えば太田市小丸山出土の壺など）、比企・児玉・赤城山南麓の3地域の関係はそれほど単純ではないのではないかと思われる。いずれにしても、当地方の今の資料的状況からは、古い段階の吉ケ谷式土器が存在しないと言えるだけの後期資料の蓄積に乏しいのが現状である。

（注2）　雷電下遺跡報告書（駒宮他1979）の第47図№3の甕である。なお、甕Bの第3類と第4類を出土した第25号住居跡は、五領式～和泉式段階の土器が出土しており、五領式のものにも時間幅が認められ、良好な一括資料とは言えない混入の著しいものである。

（注3）　この器形変化の方向性は、この時期に並行する赤井戸式の甕Aの系列においても同様に認められる。

（注4）　この甕Aと甕Bに見られる変化は、吉ケ谷式・赤井戸式の弥生時代後期後半以降のすべての甕に適応できるものではない。吉ケ谷式・赤井戸式の甕は、甕A・甕Bの系列とも法量差があり、相対的に概ね大形・中形・小形の3タイプが存在する。これらの法量差による3タイプは、弥生時代後期終末以降では、それぞれ相似しない異なった器形変化をするようであり、また吉ケ谷式と赤井戸式の両地域では地域差も認められる。そのため、ここで指摘した当地方の甕Aと甕Bの変化の特徴は、吉ケ谷式・赤井戸式の甕における甕Aの中形のものと甕Bの大形のものに限定される。

（注5）　甕Bの系列に属し、当地方の甕B1類とした大久保山遺跡ⅢB区第9号住居跡の甕よりも古い吉ケ谷Ⅱ式の段階に位置付けることができると考えられるものに、栃木県足利市赤松台遺跡出土の甕（矢島1984）がある。

（注６）　柿沼幹夫氏の御教示によると、発掘調査によるものではないが、このほかにこの時期に比定できる資料として、高田儀三郎氏所蔵品中の「児玉塩野谷出土」の壺がある。これは口縁部に粘土紐の下端に刻みを有する２段の輪積装飾をもち、胴部と頸部の境付近に縄文による文様帯を一帯もつもので、器形は東松山市駒堀遺跡Ｙ５号住居跡や東松山市吉ケ谷遺跡出土の壺に類似しており、甕Ａ１類に伴出した第32図№１や№３の壺よりも古い段階に位置付けられるものである。

（注７）　大久保山遺跡ⅢＢ区第９号住居跡から伴出した高坏は、概報（荒川他1986）の写真で見る限り、坏部は比較的浅い椀状で、口縁部は素口縁をなし、脚部はやや長脚で円孔をもち、脚端部は大きく開きそうな形態を呈している。このような形態は、吉ケ谷式・赤井戸式に伴出する素口縁の高坏では、比較的新しい段階に見られる特徴を有するものである。

（注８）　ほぼこの段階に該当する他地域の良好な資料としては、群馬県前橋市荒砥上川久保遺跡６区第24号住居跡出土土器（能登他1982）がある。この住居跡からは在地化した小形丸底壺が伴出している。

（注９）　児玉地方と群馬県地方の関係の強さは、この時代に限られたものではなく、縄文時代から現代に至るまで絶えず認められる。

（注10）　最近の比企・入間地方の調査では、吉ケ谷式の遺跡は丘陵部だけでなく、後期後半以降も低台地に存在することが明らかになっている。柿沼氏が後期後半には吉ケ谷式に代わって岩鼻式が主体になるとされた入間台地では、吉ケ谷Ⅱｂ式以降の坂戸市附島遺跡（加藤1986）などが、後期を通じて岩鼻式が主体であるとされた東松山台地では、同じく吉ケ谷Ⅱｂ式以降の東松山市諏訪山古墳群内の遺跡（若松・山川・金子1987）、同篭田遺跡、同下道添遺跡（坂野1987）などが調査され、また東松山市岩鼻遺跡からも吉ケ谷式の大形壺を伴う土壙が検出されており（宮島他1989）、吉ケ谷式と岩鼻式の遺跡立地の差異については再検討が必要であろう。

（注11）　このほか、吉ケ谷式に特徴的な縄文と樽式に特徴的な櫛描文を一つの土器に合わせ持つものに、真鏡寺後遺跡Ｄ地点第２号住居跡出土土器（第42図20）や塚本山遺跡第33号方形周溝墓出土土器（第42図19）のようなタイプのものがある。これは、群馬県高崎市北宅地遺跡第２号方形周溝墓（渡辺他1983）、同新保遺跡第160号住居跡（佐藤1988）、富岡市中村遺跡（田口1988）、同前橋市荒砥中屋敷Ⅰ遺跡（松田1983）、栃木県足利市赤松台遺跡（矢島1984）など、群馬県から栃木県西部の地域において客体的に見られるものである。これらは、いずれも頸部に櫛描簾状文、口縁部及び胴部に縄文を施文するといった画一的な施文手法をもち、弥生時代後期前半から古墳時代前期初頭まで継続的な存在が認められ、弥生時代中期後半の群馬県前橋市荒砥前原遺跡第２号住居跡出土土器（平野1976）や同荒口前原遺跡第１号住居跡出土土器（群馬県1986）との系譜関係が窺える。吉ケ谷式・赤井戸式と樽式の突発的・一時的な融合現象によるものではなく、客体的ながら一つの系統として存在するものと考えられる。

参　考　文　献

青木健二他（1979）『市ケ尾・川和地区内遺跡群』　日本窯業史研究所

荒川正夫他（1986）『早稲田大学本庄校地埋蔵文化財発掘調査概報２』　早稲田大学

石岡憲雄（1982）「『吉ケ谷式』と『岩鼻式』土器について」『埼玉県立歴史資料館研究紀要』第４号

石守　晃他（1985）『糸井宮前遺跡Ⅰ』群馬県埋蔵文化財調査事業団

井上尚明（1980）「埼玉県における弥生時代研究の現状と問題点」『情報』７　埼玉考古学会

今井　宏他（1984）『屋田・寺ノ台』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第32集

大塚　　実（1986）「吉ケ谷および岩鼻式土器の背景」『土曜考古』第11号　土曜考古学研究会

岡本幸男（1982）「美里村志渡川遺跡群の調査」『第15回遺跡発掘調査報告会発表要旨』　埼玉考古学会　埼玉県遺跡調査会　埼玉県教育委員会

小沢国平（1969）「児玉町金屋池脇遺跡」『埼玉考古』第７号　埼玉県考古学会

柿沼幹夫（1978）『東谷・前山２号墳・古川端』　埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集

（1980）「埼玉県における弥生土器に関する覚書」『シンポジウム弥生土器―櫛描文の系譜―』

（1982）「吉ケ谷式土器について」『土曜考古』第５号　土曜考古学研究会

（1987）「埼玉県北西部地方の櫛描文土器」『埼玉考古』第23号　埼玉考古学会

柿沼幹夫他（1986）『前組羽根倉遺跡発掘調査報告書』　前組遺跡発掘調査団

加藤恭朗（1986）『附島遺跡発掘調査報告書Ⅰ』　坂戸市教育委員会

金井塚良一（1965）「埼玉県東松山市吉ケ谷遺跡の調査」『台地研究』第16号　台地研究会

（1973）『大谷遺跡』　滑川村教育委員会

（1978）『吉見町史』上巻　吉見町

金子正之他（1980）『宥勝寺北裏遺跡』　宥勝寺北裏遺跡調査会

神戸聖語他（1979）『引間遺跡』　高崎市文化財調査報告書第５集

栗原文蔵他（1974）『駒堀』埼玉県遺跡発掘調査報告書第４集

群　馬　県（1986）『群馬県史』資料編２

恋河内昭彦（1984）「長沖古墳群の第７次調査」『第17回遺跡発掘調査報告会発表要旨』　埼玉考古学会　埼玉県遺跡調査会　埼玉県教育委員会

（1990）『根田遺跡』　児玉町文化財調査報告書第12集

（1990）『雷電下遺跡―Ｂ・Ｃ地点―』　児玉町文化財調査報告書第13集

小島純一（1983）「赤井戸式土器について」『人間・遺跡・遺物』　文献出版

駒宮史朗他（1979）『雷電下・飯玉東』　埼玉県遺跡発掘調査報告書第22集

小山岳夫（1987）『北西の久保』　佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第８集

埼　玉　県（1982）『新編埼玉県史』資料編２

坂本和俊（1980）「神明ケ谷戸遺跡の調査」『第13回遺跡発掘調査報告会発表要旨』　埼玉考古学会　埼玉県遺跡調査会　埼玉県教育委員会

（1984）「埼玉県」『古墳時代土器の研究』　古墳時代土器研究会

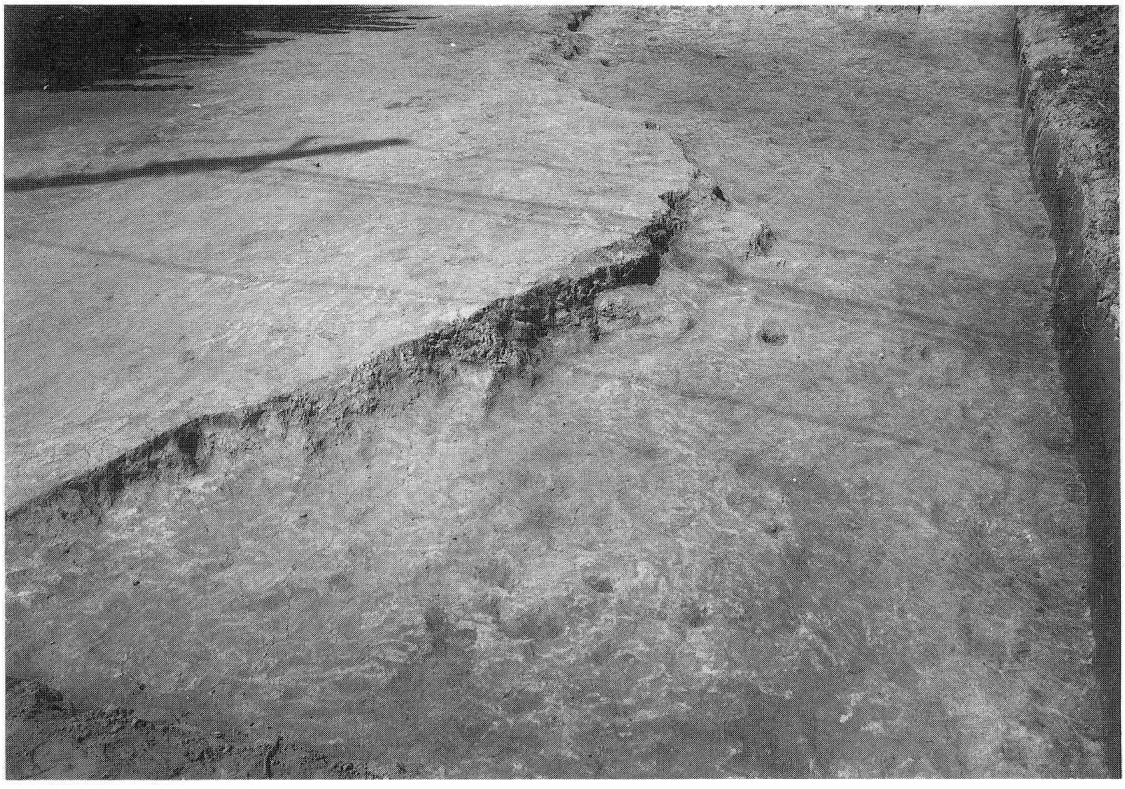
坂本和俊・鈴木徳雄（1981）『金屋遺跡群』　児玉町文化財調査報告書第２集
佐藤明人（1988）『新保遺跡Ⅱ』　群馬県教育委員会　群馬県埋蔵文化財調査事業団
菅谷浩之・駒宮史朗（1973）『枇杷橋遺跡発掘調査報告書』　埼玉県遺跡調査会報告第20集
（1973）「児玉町・美里村生野山古墳群発掘調査概要」『第６回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会 埼玉県遺跡調査会 埼玉県教育委員会
鈴木徳雄（1987）『真鏡壊後遺跡Ⅰ』　児玉町文化財調査報告書第７集
（1988）『真鏡寺後遺跡Ⅱ』　児玉町文化財調査報告書第８集
関根孝夫（1974『諏訪原遺跡』　松戸市文化財調査報告第５集
田口一郎（1981）『元島名将軍塚古墳』　高崎市文化財調査報告書第22集
田口正美（1988）『大島上城遺跡・北山茶臼山西古墳』　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第78集
谷井　彪他（1974）『南大塚・中組・上組・鶴ケ丘・花影』　埼玉県遺跡発掘調査報告書第３集
富田和夫・中村倉司（1986）「埼玉県における中期後半の櫛描文土器について」『第７回三県シンポジウム　東日本における中期後半の弥生土器』　北武蔵古代文化研究会　千曲川水系古代文化研究所　群馬県考古学談話会
中島　宏他（1984）『池守・池上』　埼玉県教育委員会
能登　健他（1982）『荒砥上川久保遺跡』　群馬県教育委員会　群馬県埋蔵文化財調査事業団
坂野和信（1987）『下道添遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第67集
福田敏一（1981）「南関東弥生土器にみられる二系統」『法政考古学』第６集　法政考古学会
藤田典夫（1989）「栃木県市貝町下椎谷の古式土師器」『栃木県考古学会誌』第11集
藤田典夫他（1984）『伯仲遺跡』　栃木県埋蔵文化財調査報告第58集
藤巻幸男他（1985）『荒砥前原遺跡　赤石城址』群馬県教育委員会　群馬県埋蔵文化財調査事業団
細田　勝他（1984）『向田・権現塚・村後』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第38集
本庄市（1976）『本庄市史』資料編
（1986）『本庄市史』通史編１
増田逸朗他（1977）『塚本山古墳群』　埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集
（1980）『甘粕山』　埼玉県遺跡発掘調査報告書第30集
松田　猛（1983）「荒砥中屋敷Ⅰ遺跡」『群馬文化』第195号　群馬県地域文化研究協議会
美里町（1986）『美里町史』通史編
水村孝行他（1980）『根平』　埼玉県遺跡発掘調査報告書第27集
宮島秀夫他（1989）『岩鼻遺跡』　東松山市文化財調査報告書第18集
村田健二他（1982）『篭田・鶴田』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第20集
矢島俊雄（1984）「堀米遺跡の土器について」『唐澤考古』第４号　唐澤考古会
山川守男（1984）「北武蔵児玉地域の古墳時代前期の様相」『第５回三県シンポジウム　古墳出現期の地域性』　北武蔵古代文化研究会　群馬県孝古学談話会　千曲川水系古代文化研究所

山川守男他（1981）「弥生時代から古墳時代の理解のための基礎的研究」『いぶき』12号　埼玉県立本庄高等学校考古学部
山崎　武（1983）『上閤・登戸新田遺跡』　鴻巣市遺跡調査会報告書第３集
山下秀樹・利根川章彦（1981）『倉林後遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第３集
若松良一・山川守男・金子彰男（1987）『諏訪山33号墳の研究』
渡辺義泰他（1983）『上大類北宅地遺跡』　高崎市文化財調査報告第37集
綿貫鋭次郎他（1978）『竹沼遺跡―昭和52年度発掘調査概報―』　藤岡市教育委員会

図　　版

図版 1

1．塩谷下大塚遺跡B地点全景



2．B地点第2B号方形周溝墓

図版 2

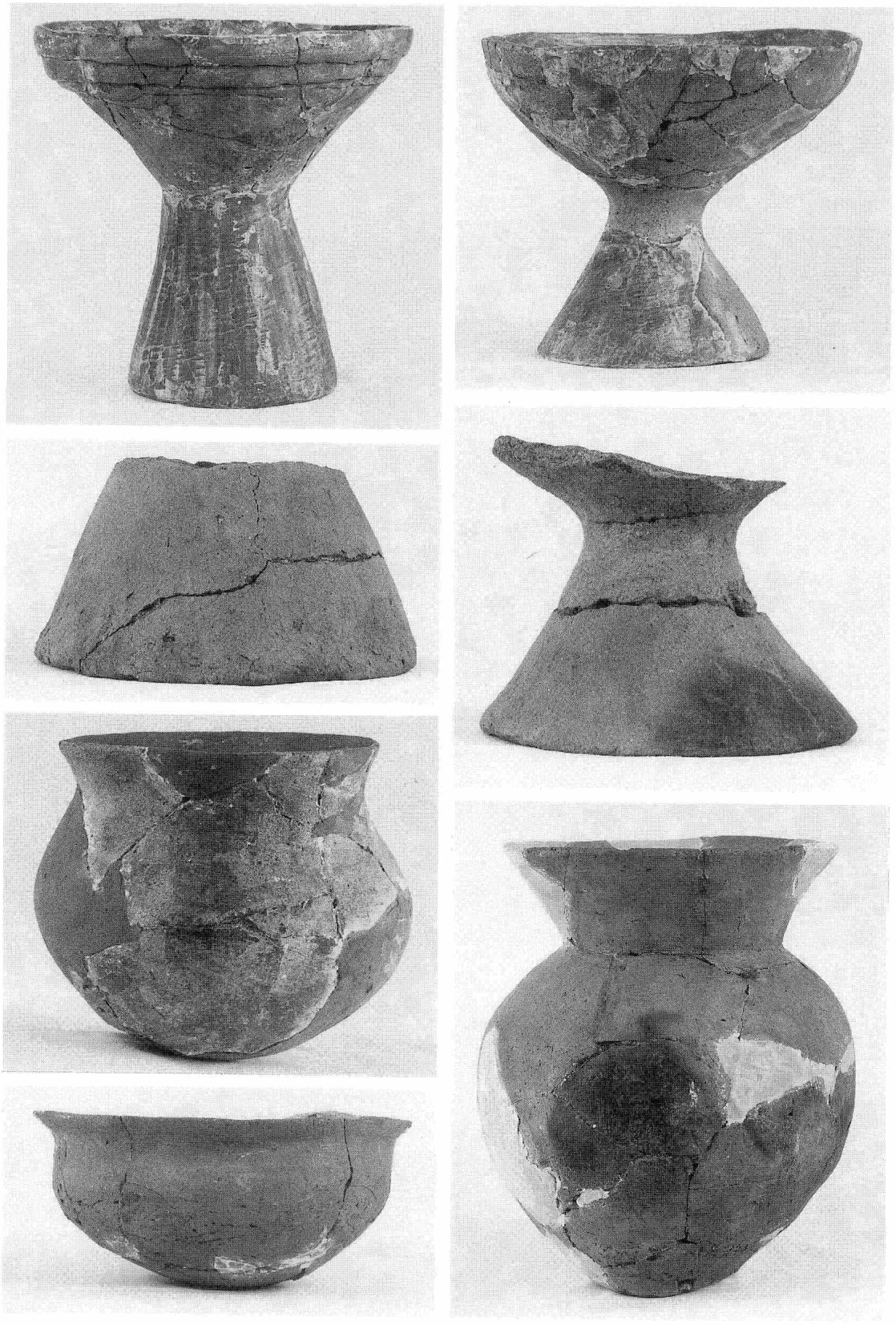
1．第２Ｂ号方形周溝墓遺物出土状態

2．第２号方形周溝墓出土土器(1)

図版 3

1．第 2 号方形周溝墓出土土器(2)

図版 4



1．第 2 号方形周溝墓出土土器(3)

児玉町文化財調査報告書第11集

塩谷下大塚遺跡

児玉町内遺跡群保存事業に伴う発掘調査報告書８

平成２年３月10日 印刷
平成２年３月20日 発行

発行者 児玉町教育委員会
埼玉県児玉郡児玉町大字八幡山368

印刷所 たつみ印刷株式会社
埼玉県深谷市東大沼356